御戸小鳥の旅路

You are the earth, I am your moon.



神戸小鳥の旅路

You are the earth, I am your moon.

瀧川 新惟



うものを造りだして以来、千年、 ふれかえり、盛んに帽子を振って別れを惜しんでいた。それはたぶん、人類が舟とい 舟はすっかり出航の準備を整えて、時が来るのを待っている。波止場には人々があ 万年にわたって絶えることのなかった光景だ。

ローグ

グボートが舫いをほどくと、舟はもういちど汽笛を鳴らし、ついに自らの力で波を蹴 タグボートに引かれて、港の外へとゆっくりと進んでいく。そして、灯台を越え、 と新天地への予感をいっぱいに乗せて、舟もまた、万感の思いであるに違いなかった。 り始めた。もう、誰に導かれるでもなく、己の力で、大海原に漕ぎ出していくのだ。 と消えた。私は、ほうっとちいさく息を吐いた。これが私たちの旅立ちなのだ。 やがて、ボゥーッ……と出航の汽笛が響き、それを合図に舟は動き出した。巨体を 港は少しずつ――しかし、あっというまに遠くなっていき、やがて地平線の向こう 私はその光景を、少し離れたところから見おろしていた。人々の別れと、そして旅路 目を閉じる。思い浮かぶのは、 懐かしい面影。

いつか――いつか目が覚めて、また会える、 はるか遠いその日まで。 さようなら。おやすみなさい、瑚太朗君。

本編へ続く)

						1
あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274	final episode: "moon" •••••• 227	『スタリイ・ムーニイ・ナイト・フライト』 ・・・ 137インターミッション(2)	episode 2: "terra"	『委員長と会長の奇妙な友情』 ・・・・・・・ 21インターミッション(1)	episode 1: "branch" ••••••••	

episode 1: "branch"



ざしてみる。夏は遠く過ぎ、朝はもう、ずいぶんと冷えるようになった。 コンロの火が温かい。しばしフライパンを焼けるにまかせ、あたしはその火に手をか いぶんと秋も深まっている。季節は変わっていくのだ。 風祭は山深い森の街だ。都会ではまだまだ暑いと聞くけれど、この町ではもう、ず ジュウジュウ、とフライパンが心地のいい音を立てている。ひんやりとした空気に、

けれど、ドレッシングにはあたしが手間を掛けている。香草の風味が、とてもいいと せ、ミニトマトとカイワレダイコンを添えてある。飾り気のない、シンプルな一皿だ 瑚太朗君の今日の担当はサラダだった。大根を千切りにして、ちぎったレタスに載

体が覚えている、ということなのだろう。 ――瑚太朗君は、切る、ことに関しては、やはり、上手い。 自分でも思う。

てこんなにおいしくなるのだろうと、いつも不思議に思うのだ。 もちゃんとおいしい。パンというのは、ちょっとトースターにかけるだけで、どうし ト、チーズで洋風の朝ご飯になる。 ともあれ、そのサラダとあたしのベーコン・エッグと、それにトーストとヨーグル イングリッシュ・ブレックファーストっぽく、で

休みの日には、こうしてあたしの家で朝ご飯を食べることにしている。瑚太朗君の

「うん」

るのに、本当に感謝している。 ないから、ちょうどいいのだ。そのあたりの事情も全部分かって、笑って流してくれ ご両親は、 なんとか人並みに家に戻るようになったし、 あたしの家には

両親がい

「通い妻の逆って何て言うんだ?」

「うーん……たかり?」

「ひでえ!」

「そういや、そろそろ収穫祭の時期だよな」

瑚太朗君はあたしの答えに大げさに笑ってみせた。

そう。 たしか、前夜祭は二人で回ったのだった。 食後のまったりとした時間。そんな会話に、ふと、 去年の収穫祭を思いだす。

けど、それは後ろめたさと表裏一体で。

楽しくはあった。

ひたすら買い食いをして、瑚太朗君におごってもらって。

手を繋いでいても、越えることのできない壁があった。 隠し事を――お互いに――していた。

そして、収穫祭のあいだ、あたしたちはずっと、 あの緑竜の日のことを思えば、それは明らかに、 アトリエで。 逃避だった。

戦い、があって。

ちびもすと、お父さんと、お母さんと。

――でも、今なら。 なにもかもを失って。

「もちろん」

「一緒に行こうね」

多分、似たようなことを考えていたのだろう。 瑚太朗君の返事は、すこしだけシリアスモードだった。

くは、十年以上ぶりに。 あたしの手に残されたものは、ただ、それだけなのだ。美しい、ひとつぶの欠片。 大切にしたい、と思う。 それでも、あたしと瑚太朗君は、なんとか日常と言える場所に戻ってきた。 オカルト研究会のみんなには、結局あれから一度も会えることはなかった。 闘争は終わった。だからといって平穏な時間に戻れるわけではないのだ。 おそら 鍵は去

だから、どうか、この幸せな時間が、

いつまでも、いつまでも続きますように、と。

そんな、とある幸せな朝のこと。 失ってしまったものの耐えがたい痛みとともに、あたしはそんなことを思った。祈った。





あたしは、その日の夜。

。港の空の色は、空きチャンネルにあわせたテレビの色だった』 あたしは、ベランダに出て、夜空を見上げ――古いSF小説の冒頭を思いだして

八十年代の、ディストピア小説とか、あるいはたしかサイバーパンクと呼ばれる種 ウィリアム・ギブスン、『ニューロマンサー』。

たのだ。 組み合わせたその題名に、なにか得るものがあるかと思って、ずいぶん昔に読んでみ 類の小説だ。 特にSF小説が好きというわけではない。けれど、ネクロマンサーとニューロンを特にSF小説が好きというわけではない。 けれど、ネクロマンサーとニューロンを

というのはこのように見えていたらしい。 そのあては外れたけれど、小説としてはずいぶん面白かった。 昔のひとには、

10 以上にファンタジーだった。 実際に起こっているのは、 超人と魔物使いの、星の運命をかけた死闘。 現実は想像

昔のテレビの、どのチャンネルにもあっていない、灰の砂嵐の色。 そんな感想はさておき――そう、空きチャンネルに合わせたテレビの色、だ。

色だけではない。

で平坦だ。 ングすれば、そのままなにかの番組でも映るのではないかと思えるほどに、空は空虚 空はまるで、空きチャンネルに合わせたテレビそのものだった。きちんとチューニ

たいだ。ひどくうすっぺらい。うさぎが餅つきをしていても違和感がないほどに、嘘っ 空には満月が天頂近くにぽっかりと浮いている。丑三つ時である。 ――その月は、やはり、あまりにも作り物のように胡散臭い。ちゃちなオモチャみ

ぽく見える。 近頃はずっと、こうなのだ。

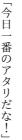
空に、現実感がない。

テレビの――向こう側から、 ガラスの板を通したような、 誰かにのぞき込まれているような、空。 テレビの向こう側をのぞき込んでいるような空。

関を使わずとも、 りない予感がある。なにか……いや、誰かの温かさが必要な類の悪寒だ。 あたしは隣家、瑚太朗君の家を見上げた。ご両親はもう眠っているだろう。正面玄 ひどい寒気がして、ぶるりと震えた。温かい布団に戻るべきだが、それでは満ち足 忍び込むのは容易いことだ。 これは。







そう喋りながら瑚太朗君が忙しく喰らいついているのは、

人類史的なレベルでシン

――収穫祭である。

ている。どこかのステージから、 楽しげだ。 奇妙な装束の人々が、民族音楽らしきものに合わせて、珍しい踊りを踊 心躍る音楽が、遠く聞こえてくる。

町は大賑わいだった。道には屋台が山ほど出されていて、呼び込みの声がいかにも

その風景は、去年までの収穫祭と変わらない。 『鍵』をめぐる闘争のことなど、

市

井の人々は知るはずもない。だから、いつもとおなじ、収穫祭。

だけど、あたしと瑚太朗君は、違う。はじめて、ほんとうに心を許して歩く収穫祭

なのだ。 「もう、おいしそうに食べるねえ、瑚太朗君は」

「いやいや小鳥さん、このタレは人類の叡智の結晶ですぜ」

差し出されて、かじりつく。

カシャリ。

と、口の中に、味が広がっていく。

「うおお……!」

一だろ?」

砂糖、ミリン、酒、それに、もしかして糀味噌かなにか? 焦げた醤油……だけの味では断じてない。

いや、

それだけではあ

看板を見上げる。

るまい。

『焼きトウモロコシ 焼鳥屋×××秘伝のタレ!』

「やはり、ただものではござらぬか……」

「そういうこと。旨いって評判の焼鳥屋なんだ」

道理で味わい深さが違うねえ……でも、なんで焼き鳥ださないんだろう」

あいよ!」

その瞬間

「お嬢ちゃん、ウチの鳥は、 トウモロコシを焼いていたおっちゃんが、 お祭り価格じゃ出せねえんだよ」 にやりと笑った。

「おいくら万円!?」

「大人になってから来な。損はさせねえぜ」

「小鳥、トウモロコシもう一本、頼もうか?」「アダルティ!」

「いいね!」

「いいオー」

「おっちゃん、トウモロコシ一本!」

た。ジュッと小気味いい音がして、香ばしいにおいが広がっていく。 おっちゃんは、トウモロコシを秘伝のタレにどっぷりとつけると、

炭火の網に乗せ

こんな幸せが、いつまでも続けばいいと思った。端的に、幸せだ、と感じた。

こんな幸せな日々を、これからずっと過ごしていくんだ。 お祭りが終わっても、瑚太朗くんが隣にいれば大丈夫だと思った。 あたしがそう心に決めた、

空が、

割れた。

反射的に見上げた空が、割れていた。 パリィン、という音があまりにも明瞭に響きわたった。

落ちていく。 空が、まるでガラスのように砕けてまっぷたつになり、東の空と西の空に分かれて

ガラスの向こうには確かに青空が広がっているというのに、その砕けたむこうには その無惨な裂け目に、粉々になった空の――ガラスの破片が、きらきらと輝いていた。 いや、輝いているのはガラスの欠片だけではない。

「どうしたんだ、小鳥」

---ああ、理解しがたいことに---星々が輝いていた。

漆黒の星空が黒々と蠢いていたのだ。

青空のガラスは、ごうごうという音を立てながら、ゆっくりと地平線の向こうへと

そのあいだから見える闇を仰いだまま、あたしは凍り付いた。

落ちていく。

隣でトウモロコシを咥えたままの瑚太朗君が、不思議そうな顔であたしに目をやった。 本能が激しく警告音をたてている。

聞こえる声がひどく遠くて、あたしはようやく気づく。 星空のあげる狂気の音の奔流に。

空のガラスは、もう半ば以上、地平線へと沈み込んでいる。 瑚太朗君には、それが見えていないのか。 おぞましいなにかが、空のガラスを、狂乱のリズムで引き裂いているのだ。

木々が秋のすこしひんやりとした風にそよいだ。誰にも、見えていないのか。

世界を覆う狂気のおとずれなど、まるで気づいてもいないかのように。 枯れ葉がほんのすこし、舞い始めている。

「小鳥――?」

瑚太朗君の声が真剣味を帯びた。

「こ、こた……」

力が入りすぎたかも知れない。思わず手を伸ばし、その腕をがっと掴んだ。

「おい!」

瑚太朗君はあたしの両肩に手を置いた。

「大丈夫か? 何があった?」

なにがあった? ふるふるとあたしは首を振った。 あたしが立つ大地は、

瑚太朗君の顔に焦りが浮かんだ。 その問いこそが、 瑚太朗君にはなにも見えていないことの証明だ。

小鳥、ちょっと落ち着いて……」

その声を、遮るように、

激しくなにかが爆ぜる音がして、 それはひどく甲高い音で、

見上げると、空を覆うガラスが完全にはじけ飛んでいて、 獣か鳥の叫び声のようで、 頭上を覆うのは、完全な夜空で――

その夜空に、太陽が輝いている……!?

違う!

そう思った瞬間、 まるで、月の大地に立って太陽を見上げているような 波のようななにかにかき消されて、 気づいた時には、 見渡す限りに広がる岩の沙漠が、 あたしひとりで、 立って、 目の前に、 目の前に、 は女が―― 縁黒の服を纏って、 銀の髪をなびかせ、 赤いリボンをひらひらとそよがせ、 あたしを見て、 あたしを見て、

暴力的なまでの濃密な意味の圧縮が、あたしは思わず絶叫した。

小鳥

あなたの記憶を――」

ああ、 脳をぐちゃぐちゃにかきまわして、

と、 死ぬ、

意識が消し飛ぶその一瞬、 ほとんど遊離したような冷静さが端的な理解をして、

彼女が言ったことを、

ほんの断片だけ、

あたしは理解した。

記憶を、

そこで あたしの記憶は、

途切れて、

委員長と会長の奇妙な友情



22 風祭高校、通称カザコーの食堂ときたら、そんじょそこらの食堂とは格が違う。 ――まさに美味 Ï

ら、一生の笑いものだ。 まり人のいないときにこっそり注文してしまうような絶品スイーツだって完備してい 食べ物よ、などと格好つけている男子生徒だって横目でちらちらと盗み見ては、あん 当然、学生の半分を占める女子生徒への心遣いも忘れない。甘いものなど婦女子の 巷の料理評論家の間で密かに有名になるくらいには、ここの学食のメニューは旨い。 こそこそと頼んで、見つからないうちに喰いきる。ライバルに見つかろうものな

破、 もちろん我らが天王寺瑚太朗は、そんな姑息な真似はしない。注文するなら正面突 正々堂々とまかり通る。

「おばちゃん! ショートケーキニつ、大盛りでッ!!」

ないのよねえ!」 「あらあら、瑚太朗ちゃん、残念だけどねえ、ショートケーキとざる蕎麦は大盛りが

「そんなに食べたければ、二つずつ注文してくれてもいいんだけどね、うふふふ!」

「オゥ、なんてこったいジーザス!」

「くそっ、仕方ない……それならショートケーキ四つでッ!!」 と、ゆらり、と何かの気配が揺らめいた。

「ルチアちゃんもやるわねえ!」

瑚太朗が凍りつき、学食のおばちゃんが、あれまあ、と笑う。 の目の前に、ショートケーキを二つ並べるつもりか……?」

「そんなはしたない真似が――」

風が……いや、これは風ではすまない。まさに暴風

――できるかッ!!」

天を舞い、椅子と机をなぎ倒して、ズサァーッ! 暴風っていうより暴力。鉄の女、此花ルチア委員長殿の鉄拳制裁。 っと転げ、そのままぶっ倒れた。 天王 寺瑚 太朗は

「普通のショートケーキを二つでお願いしますっ! それからコーヒーとココア、ホッ 見慣れたもので、おばちゃんは拍手喝采だ。

配置しながら、しかし足を止めることもなく、瑚太朗の方へと一直線に歩いていく。 トでっ!!」 さりげに追加注文を言い放って此花ルチア、ぶちまけられた机と椅子を超人的に再

食堂は嵐の後の如き惨状だが、人的被害は一切ないのがさすが委員長だ。 天王寺瑚太朗っ!」

おまえは私にどれだけ恥をかかせれば気がすむんだ! その枕元に立って此花ルチアは一喝する。 女の敵だッ! ショートケーキを目

二つ並べて食べるなど……言語道断だ!

おまえはもう少し雰囲気と

の前に

がなり立て、次の鉄拳を構えて……いうものをだな……」

のではないか。その視線を追って---の顔が、なぜだか――にやけている。これは、あれだ。よくないことが起こっている。 此花ルチアはビミョーな違和感を覚えた。床に無様にぶっ倒れている天王寺瑚太朗

白 ? ____

ところは外さない瑚太朗だ。 下から見上げる白。何のことだか言うまでもない。ギャグマンガの王道。こういう 瑚太朗が問うた。

天王寺瑚太朗、この一幕にオチをつけるべく、一切の構えを取らず、来るべき一撃 次に来るのは、もちろん……鉄拳制裁。それを受けてこそ――漢ッ!!

に備える。

え上がる。拳をおおきく振りかぶる。瑚太朗、やっぱり思わず目をつむって 言葉にならぬ叫びを上げ、鉄血委員長の顔が製鉄所の灼熱する鋼の如く真っ赤に燃 神戸小鳥の旅路

/

顔から湯気を上げて、目を回したるルチアが 天王寺瑚太朗、まるで予想外の音に目をあけて ---鉄血委員長が!·-まるで予想外の光景に目を疑った。 - 床にぶっ倒れ

「お、おいルチアッ!!」

ている!

「おばちゃんッ! やっぱショートケーキキャンセルでっ!」 泡を喰って躙り寄る。顔を見る。意識が飛んでる。こいつァマズい!

あいよ、行ってらっしゃい!!」 一言ですべては通じた。長年のつきあい、 以心伝心というやつだ。そして天王寺瑚

太朗は、此花ルチアをお姫様だっこすると、 の如く学食を飛び出していった。 ギリギリ人間的なくらいの跳躍で、

脱兎

それで此花さんは瑚太朗に保健室に担ぎ込まれたと。 お姫様だっこで」

鳳ちはやが簡潔にまとめると、 此花ルチアはまたも顔を真っ赤にして下を向いた。

「へい姉御、お褒めにあずかり恐縮でやんす」 「いや~、ラブラブですなぁ、コタさんや」

「誰も褒めとらんわっ」 目をかっと見開いて、神戸小鳥が威嚇した。

んちょを毒牙にかけようとして、いったい何をやらかしたのさ?」 「いやそれが、偶然視界に、白い……」

「またアレじゃないのかい? おイタが過ぎたんじゃないのかい?

純情純潔のいい

「ふしだらNGっ!」

大層お怒りである。

そこに、まあまあ、と割って入ったのは中津静流だった。

「コタローはルチアを保健室に連れて行ってくれた。それは正しい行動だ」 「さすが静流、話がわかる女だぜっ!」

にをしようとしていたか判ったものではないわ」 「あら、保健室にはベッドがあるじゃないの。そのケダモノが白いモノに欲情してな

「さすが会長、話がわからない女だぜっ!!」

「あら、そういう欲望が微塵もないと言い張るのこのケダモノは」

「み……微塵もないですよっ!」

「瑚太朗、今ちょっと反応が遅れましたー」

犯罪かッ!

偶然だッ!!

冤罪だッ!!」

「どうやら下半身の反応は神速でも、 ちはやがにっこりと笑うと、どこから現れたか、 頭のほうは回らないようですね、 咲夜がパスを受け取 保健室襲 っ

朗君」 「最低の二つ名だ!」

のかし 「だが、女性の下着を見たいというのは、 思春期の男性の当たり前の欲求ではない

お静さんや、 実行に移したら犯罪になる欲求というのもあるのだよ」

「ふしだら罪、 川柳で罪状とはなかなか風流ね」 離島に流刑、二十五年」

会長が頷く。 中身に異存はないらしい。 例によって、 微塵でも瑚太朗の味方なのは、

静流だけらしかった。

なにしろオカルト研究会は、 その日の部活は結局、 瑚太朗に対する魔女裁判で終わった。 男女比一対五のハーレム所帯である。

は 要するに連帯する女性から常に集中砲火を喰らうわけで、 ぶっちゃけあん と書けば聞こえ

比が六対一になるだけで、事態を悪くするばかりだ。 まりおいしくない。一応、オブザーバ(というかなんというか)の咲夜がいるっちゃぁ いるが、彼は要するにちはやの執事なので、瑚太朗には加担しないというか彼我戦力

言えば、やっぱり神戸小鳥だ。 そんな無慈悲な女王たちのなかで、いちおう瑚太朗のことを気にかけてくれるのと

込んでいるようなものだから、帰路っていうのは別にない。そして残された瑚太朗と 夜はもちろん同行だ (いないと思ってもすぐに現れるし)。 会長はと言えば部室に住み 帰路は、家が近い者同士になる。ルチアと静流はおなじアパートだし、ちはやと咲

「で、コタさんや、ぶっちゃけいいんちょとはどうなんさ?」

小鳥は、お隣さんというわけだ。

「まあ……色々あって」

小鳥にしては切り込むな、と瑚太朗は思う。

てない。小鳥にもだ。 実はこの話題は ――ルチアとのことは ――オカルト研究会ではあんまりきちんと話

じなので、西九条や静流以外に話すことはできない。そうすると、例のアサヒハルカ の一件にどうやってオチをつけたのか、なんでルチアとそんな関係になってるのか、

まあなにしろ、サンタブローシアの一件は、バラすと『転校』されちゃうような感

説明するのは実際難しい。言葉を濁すしかない。

かった。少なくとも、今日までは。 オカ研の面々も、そんな言外の雰囲気を察したか、そこはあんまり突っ込んでこな

瑚太朗の顔を覗き込むようにして、小鳥が畳みかけた。

ーいろいろ?」

瑚太朗の戦術だった。それが急に――秘密ができるっていうのは、あんまりいい気分 今まで瑚太朗は、小鳥に隠し事はしてこなかった。だいたい全部筒抜けだ。それが

じゃない。 踏み込んでくれる条件がそれか、と瑚太朗は心中、苦笑いした。なんて関係だろう。

「あいつのことだからさ、俺からは話せないこともあるよ」 ともあれ、と瑚太朗は気を取り直す。

「だからさ……すまん」 「ふうん――なるほど、それは正解だぁね」

「いいってことよ、あんさん」

は結局、判らないままだ。 一でもね」 小鳥はあくまでも優しく微笑む。その優しさの種類がいったい何なのか、 瑚太朗に

29 は星空の色に少しだけ染まっている。 小鳥は反語で文を繋ぐ。 瑚太朗は空を見上げた。雲ひとつない、 茜色の空。

その端

「コタさんが気づいてあげなきゃいけないこともあるんだよ」 空から小鳥の横顔へ、視線を移した。

「俺が?」

・そ

今日の一日を、瑚太朗は思い返す。

わってから学食に行って……それでアレだ、ルチアが倒れて保健室に担ぎ込んで、て 朝起きて、学校に来る。昼は ――静流と三人で中庭に出て食べたな。で、授業が終

「……なんか、あったか?」

首をかしげて瑚太朗。

んやわんやの末に部室。そんでもって今。帰路。

「いや、保健室とか色々あったけど……俺が気づいてないこと……?」

頭をひねる。が、

「ほんとは自分で気づいた方がいいんだけどね」「……わからん。何かまずいこと言ったかね、俺」

「すまん小鳥、この通りだ」

瑚太朗、手を合わせて頭を下げる。

「あたしゃお地蔵さんかい」 ぽこっと音がして、その頭にギャルぱんちが炸裂した。それから、ふっと表情を崩す。

「マジかよ……」

お勉強とおもって聞きねえ」

「へい、姉御」

「いいんちょ、部室でさ……ひとこともお話ししてないんさね、今日」

「 え ?」

思わず聞き返す。

「嘘だろ。ずいぶん賑やかだったぞ、今日」

「ホントだよ。瑚太朗君はずいぶんいじられてたし、いいんちょも話のネタにはなっ

てたけど、いいんちょ本人は、口を開いてないんだ」

「ダメだ。思い出せない」 小鳥の問いかけに腕を組む。唸る。しばらくして、瑚太朗は頭を振った。

「マジマジ。いいんちょ、部室で何か話してた? 思い出せる?」

「そういうことさぁね」

「やっぱ、体調わるかったのかね」

「そういうこともあるかもね。でも、 なんだかそれだけじゃないと思うよ」

「それじゃ、どういうことだよ」 瑚太朗が問い返すと、あくまでも笑顔のまま、でも小鳥は顔を横に振った。

32 「ああ……そうだな」 「何か、あったんでしょ、いろいろ」

てことだよ。そうじゃない?」 「それじゃ、いいんちょがなにを考えてるのか、判ってあげられるのは瑚太朗君だけっ

もう一度空を見上げる。夕焼けはじりじりと退却をはじめ、夜が始まろうとして いつも通りの優しい拒絶。瑚太朗にとっては、やっぱり刺さる。

いる。

「……ちょっと、今夜は考えてみるよ」

「うん、それがいいよ」

嬉しそうに小鳥は頷く。なにを考えているものやら、それこそ瑚太朗には判らな

それでも、言葉が自然と口をついた。

「……ありがとな」

かった。

「いいってことよ、あんさん」

これまたいつも通り、小鳥は茶化してみせた。

昨日の小鳥の言葉がなんだか気になって、 ルチアが休み?」 思わず瑚太朗が問い返すと、中津静流は神妙に頷いた。 瑚太朗はいつもよりも早い時間に家を出 翌日、 始業前の体育館裏で

この話だ。 いた。ここじゃなんだから、と静流は瑚太朗を連れて体育館裏にやってきた。それで、 が、そんな瑚太朗をまるで見透かしたかのように、静流は下駄箱で瑚太朗を待って よく眠れなかったとも言う。

「ちょっと気分がよくないと言っていた。とーかには連絡済みだ」 「そっちの方は問題ない。万一に備えて、特殊武器防護隊が待機している」 「大丈夫なのか、それ。その……いろいろ」 瑚太朗の言外の意図を判ってか、静流はまた、うむ、 と頷いた。

特殊武器……なんだって?」

「すごいな。そんな部隊まであるのか、ガのところには」 特殊武器防護隊。 ガのひとたちは伊達じゃない」 対NBC兵器

そういえば静流は連ジのひとだったなと瑚太朗は思い出す。

「貴様ほどの男が、なんて器量の小さい!」 「アガーイの次はッガンか」

「しかしこのあたたかさを持った人間が、地球さえ破壊するんだ!」

「いきなり罵られた!?」

「シリアス展開だ!」

「ともあれ」

静流は、おいといて、のジェスチャーで話を元に戻す。

「ルチアは元気だ。ちょっと調子が悪いくらい、誰だってある」

「ああ」

「きっと明日には学校に来る」

かった」 「うむ。そうだろう……とにかく、そんなに心配しなくて大丈夫だ。それを伝えた 「それを聞いて安心したぜ。ルチアがいないんじゃ、我がクラスは回らないからな」

「おう、サンキュだぜ静流!」 お安いご用よ、と静流は頷く。

結局、瑚太朗が教室についたのは、予鈴の一分前といったところだった。鞄を置く 例によって後ろを向いた。

「いえ知りませんけど……って、くさやと一緒にしないでくださいっ!」 「ならば、ちはやの『や』とは 「いえ知りませんけど……」 「ならば、くさやの『や』とは 「それくらい知ってます。いや、食べたことはありませんけどー」 |くさやは---くさい| ――何だ?」 ――何だ?」

「なんです?」「ちはや」

「お前達も毎朝毎朝、飽きねえな」 瑚太朗とちはやが、声の方にばっと振り返った。ちょっと……いや、かなり驚いた

「なんだ、妙なツラしやがって」「吉野……!?」

「いや、吉野君が珍しく瑚太朗のボケに反応してるなと」

「『王弋』って自尓 シモ!」「悪いか。『狂犬』だって気が向くときくらいある」

「『狂犬』って自称した!」

まあまあ落ち着いてー……で、どうしたんですか吉野君」 悪いか、あァ!?」

魔物使いの本領発揮。『狂犬』は、ぐるると唸って牙を収めた。

ステージのために、昼間は体力を温存しておきたいんだが、今日はどうしたんだ、いっ

「……違えよ。教室が妙に騒々しくて敵わねえ。夜のデッド・オア・アライブのオン・

に、なにかのイベントでもあるかのような声、声、声。 突っ込みどころ満載の吉野の台詞を瑚太朗は敢えて全部スルーした。見回すと確か

「ルチアが休みなんだ、今日」 考えるまでもない。瑚太朗には原因がすぐに判った。

「ああ……」

一なるほどー」

吉野とちはやが同時に納得した。

は納得だ。 「ちょっとしたお祭りですねー」 存在だけで空間の秩序を生起するルチアだ。 それがいないとなれば、 この騒々しさ

迷惑してる奴もいる。俺は静かな方がいい」

吉野はそう言うと、ふと腕を組んだ。

「なるほど、俺はこうして委員長にも世話になってるってワケだ。 無意識のうちにな

「報わ あいつだって好きでやってんだろ。 れない仕事ですね」 嫌ならやめりゃいい。 それだけの話だ」

「吉野君も口が悪いですねえ」 自分でそう納得すると、吉野は席に戻って、机に突っ伏した。

゙そういうやつなんだよ」

その日はそれで終わった。いつもよりちょっと騒々しいクラスに、幾人かは開放感 瑚太朗とちはやは、顔を見合わせて笑う。

明日には元通りだろう。誰もがそう思った。 を感じ、幾人かは鉄拳委員長の施策の価値を再認識した。でも、それくらいのことだ。

「おい、静流、こりゃ一体、どうなってるんだ」

私にも判らない……」

静流と瑚太朗は、ふたり、 週間が経った。 途方に暮れていた。

ルチアはまだ、学校に出てこない。

声はそれなりに元気そうだ。 これでも瑚太朗は毎日、ルチアに電話している。

『心配するな、天王寺』

『て記り 仏の皆及はこうにこうさい。「そうは言うがな、大佐」

『大水、うりぎょう。『ひゃ、くこさだ。とごり「冗談だ。大丈夫なら、いいけど」 『大佐? 私の階級はそんなに上じゃないぞ』

: 『ふふ、ありがとう。でも、大丈夫だ。ただの風邪だ』

ただの風邪が、一週間になるだろうか。疑惑が膨らむ。

「うむ」

「ガのひとのところに、訊いてみるわけにゃあ、 む、と静流は考え込む。 いかねえのか?」

「……とーかに訊いてみるのは、できる」

「うむ。だが、教えてくれるとは限らない」「西九条先生か」

「判ってる。訊くだけ訊いてみるしかないだろ」

そうとなれば善は急げ。 。 放課後、二人は揃って、 職員室に向かった。

「失礼します」 職員室のドアをノックし、

声をかけてドアを開けると、西九条が、少しびっくりしたような顔で二人を見返し 一瞬あって立ち上がり、二人のほうへと歩み寄る。

「天王寺君……に、静流ちゃん」(一瞬あって立ち上かり)二人のほうへと歩み

「判ったわ」

先生、ちょっとお話しが」

「ここじゃなんだから、ちょっといいかしら?」西九条、要件を察したか、はあ、とため息ひとつ。

変わっていく風祭の景色だった。 車窓を流れるのは、都市高速道路の単調な構造物と、そのむこうでゆっくりと移り

運転席には西九条。

条の言葉を待っていた。 瑚太朗と静流は、 その後部座席に並んで座って、彼らの上司であり先生である西九

「ルチアちゃんのことかしら?」 トンネルをいくつか抜けて、ちょっと郊外に入った頃、ようやく西九条は口を開いた。

バックミラー越しの視線に、瑚太朗が黙って頷く。お互い判っていたことの確認だ。

がかれる。 西九条は、ちらと町の方へと視 「そうねえ……」 がックミラー越しの視線に、瑚

うだ。 「まず心配しないでほしいのは、ルチアちゃんの状態が決定的に悪くなったとか、そ 西九条は、ちらと町の方へと視線を向ける。風祭の市街地、きっとルチアがいるほ

「本当ですか?」 ういう話じゃないの」

わかるでしょうけど、本当に危ないとなったら、そんなところには居られないわ」 「本当よ。ルチアちゃんはまだ自宅にいる。サンタブローシアのことを考えてみれば うむ、と静流が頷いた。

「それはそうだ」

してもらえると思うわ」 「でしょう。だから、物凄ぉく悪い事態とか、そういう話じゃないわけ。 これは納得

「そう、ですね……」

でも、と瑚太朗は思う。

ているわ」

「でも、ちょっとよくない、という事態ではある。クラス委員長が、 一週間も学校を

休むくらいには」 ーそうね」

御さんに連絡もとるでしょう」 「友人が一週間も学校を休んだら心配だってする。本人が大丈夫だって言っても、

親

「ふふ……」

西九条が笑う。

「親御さん、ね」

「先生はそのつもりだと思ってましたけど」

「そうね。上官っていう、組織上の関係はナシにはできないけど、そうありたいと思っ

「だから、相談にきた。静流もです。友人として。な?」

静流はまた頷く。それから、特に迷いもなく言葉を継いだ。

お姉さんになる」 「コタローの喩えなら、とーかは私のお母さんでもある。そうすると、ルチアは私の 静流ちゃん……」

41 「おい、お静さん、そいつァどういうこったい」 西九条が、ほんのちょっとだけ目を見開いた。少し遅れて瑚太朗も。

「私も、家族が――いない。ルチアと同じだ」 絶句した。思わぬ告白だった。瑚太朗は辛うじて言葉を絞り出す。

「うむ」「そう、なのか」

頁 · ·

頷く。

「だからとーか、私も心配だ」

<u>:</u> その静流の言いように、西九条は、少なからず心を動かされたようだった。

「まあ、いいか。あなたたちには、知らせても」

なにかの呼び出し音がして、ついで、どこかで聞いたことのあるような声がした。 はあ、とひとつため息をついて、車載インターフェイスに指を滑らせた。

『どうした、西九条君』

「忙しいところすみません。ルチアちゃんの件なんですが……」

『うむ。どうしたね』

「静流ちゃんと天王寺君に、教えても大丈夫でしょうか」

:

男性の声がすこしだけ黙り込んだ。

『学校には、どうしてあるんだったかね』

『西九条君』

い

風邪が長引いている、と」

『うむ……』 「そちらは何とかなるでしょうが、事情を知っている二人は、 疑問を抱いているよう

『普通に考えれば、そうなるだろうな。だが、組織として守るべき規律はある』 「しかし、心配事を抱えていては、戦力に揺らぎが生じかねません」

『ふむ、それもまた一方の正しい物の見方だな』

スピーカのむこうから、ふむ、 と頷くような気配がした。

判断は君に任せる。本件については、 私は聞かなかったことにしよう』

「……判りました。感謝します」

いいえ、報告すべきことはありません」 **何も聞かなかったのだから、感謝の必要もない。** 他には何かあるかね?』

『我ら、この身を捨て、楯となり槍とならん』

「聞いての通り、許可が取れたわ」 楯となり槍とならん」 かちゃりと小さく硬質の音がして、 それで通話は終わった。

「今のひと……誰です? どこかで聞いたことがあるような声でしたけど」 西九条が簡潔にまとめた。

「遠くないうちに会う機会があるわ」

「そうですか……」

「それよりも、ルチアちゃんのことでしょ?」

「あ、そ、そうです! その……」

頭と言葉が空回り。

「よっぽど心配なのね、ルチアちゃんのこと」 ふふ、と西九条先生が笑う。

|そりゃあ……」

「若さ――若さなんだろうなぁ……」

西九条先生が呟いた。

「要するに」

ハンドルを握って前を向いたまま、西九条は話し出す。

値内ではあるにせよ、少しだけ上昇しているの」 「ルチアちゃんの生体基盤の有毒物質コントロールモジュールの安全性指数が、

そこで瑚太朗が授業の如く手を挙げる。

「なにかしら、天王寺君」 い、先生」

「全然要していません。意味不明です」

「ああ……ごめんなさい。そうだったわね、

天王寺君は詳しいことを知らないんだっ

たわね」

一つまり」

静流が言葉を継ぐ。

「本当にもしかすると、だけどね」

「ルチアはちょっと調子が悪い。今のところ問題はないけど、よくない兆候かも知れ

確率にすると?」 静流の説明を西九条が補足する。

「それじゃあ、ほとんどゼロってところですか」

「そうね、大体のイメージなら……○. 一パーセントっていうところかしら」

安堵の声を漏らす瑚太朗に、静流が目を細めた。

どういうことだ?」 コタロー、こういうものは、単純な確率論では処理できない」

○.一パーセントの確率で世界が滅ぶとしたら、どうだ?」

「〇.一パーセントの確率で石につまづいて転ぶくらい、誰も気にしない。しかし、

「世界が……?」

想像してみる。瑚太朗の脳内に、どこかのゲームの映像がプレイバックされた。

「そういうことだ」 「ちょっと、ヤバいな」

粛々と頷いて、静流は続ける。

い。○.一パーセントは、笑って見過ごせる確率じゃない。そうだろう、とーか」 「ルチアは別に、世界を滅ぼすような威力の――ものではない。けど、それなりに強

| ええ……」

ないの。家で休んでいれば十分。だから、心配しすぎないで。天王寺君もね」 「でも、繰り返しになるけど、ルチアちゃんは別に病院に担ぎ込まれるような状態じゃ あいまいに西九条は首肯した。

「よろしい」 ちょうど目の前の方に出口のインターチェンジが見えてきた。

はい……」

ハンドルをそちらに切って、西九条はそうまとめた。

そして、瑚太朗が自分自身の言葉に少なからぬ不安が混じっていることに気づいた



西九条に別れの挨拶をすると、二人はオカ研の部室に向かった。

道すがら、静流はあまり元気がなさそうだった。

「静流さんよ」

「せめて俺たちくらい元気な顔をしていようや」なんだ、と顔を上げる。

「……そうだな」

ようやく笑顔めいた表情を、静流は見せた。

「台無しだ!」 「二人ともずいぶん陰惨な顔をしているわね」

部室に着くなり、会長殿のお言葉は辛辣だった。

「ずいぶん遅かったじゃないのさ、コタさんや」

「どこ行ってたんです?」 例によってそういうふたりの目の前にはお菓子の袋が山積みだ。

「……ちょっと、ルチアのことでな」 小鳥の地球滅亡ラインは大丈夫なのか、ひとごとながら心配になってくる。

「あー」

小鳥とちはやが揃って声を上げた。

"此花さんも幸せ者ですねー」 「いよっ、お熱いねぇ、おふたりさん!」

「うつけ。誰も褒めていないわ」 「いやあ、それほどでも!」

まあ……」

いいながら瑚太朗はぽすんとソファに身を投げる。

「……要するに風邪?」

「先生もそう言ってたじゃないですか」 確認してきたんだよ。静流が心配するからさ」

「言い方に温度差があるぜ、ちはや」 ゙それは仕方ないですね……」

「わたし、静流とは仲いいですから」

「俺はどうなんよ!?」

知りませんっ」

「ですねー」

い捨てて歌舞伎揚の袋をばりばりと破る。

これは実にいい傾向ですね」 咲夜が突然現れてコメントした。

まるで喫茶店のようなシーリング・ファンが、くるくると回っている。 やれやれだ。瑚太朗はソファの背もたれにだらりと寄りかかって、天井を見上げた。

空白のような時間――ふと、小鳥が口を開いた。

「でもあれだね、いいんちょがいないと、この部屋は静かだねえ」

ちはやが、お菓子をぽりぽりと頬張りつつ答える。

「なんだかんだいって、此花さんがいると賑やかですよねえ」 いいんちょなのにねえ」

「そうそう。こんなところまできて取り締まりとは、いいんちょも大変だよ」

"どこかの誰かさんがバカなことをしてるからですよ」

朱音がなんだか不満そうに呟 「いた。 **こんなところとはなによ」**

「でもまあ……いろんなひとがいて、いいんじゃないです?」

49 「のんびりアホっ子フィールド全開よりはマシかもしれないわ」 呆れ半分、諦め半分といったふうの照れ隠しで、ちはやが言う。

朱音さんまで、なんですかそれ……」

「それで、どうなの、此花の様子は」

------え?」

最初自分が問われていると気づかず、 半拍遅れて瑚太朗、会長の顔を見返した。

「行ってきたのでしょう? 家まで」

「いや、そういうわけでは」

「はあ?」

ちはやが目を丸くした。

「それじゃなにをしてたんです?」

「瑚太朗、馬鹿じゃないんです?」 「いや、西九条先生に話を聞いて……な、静流?」 うむ、と頷く。と、突然ちはやが、ガタッ・と椅子を蹴って立ち上がった。

「な、ば、馬鹿とは何だ馬鹿とは!」

「なんで彼女が風邪ひいているときに、お見舞いも行かないんですか!」

「え、か、彼女……って、」

「違うんです!?」

どん、とちはやが机を叩いた。

「いや」

少々きつめの視線が、瑚太朗を睨んでいる。

だ……と思った。 その横で、小鳥がこちらを見ている。その顔が、 がなっている。その顔が、

子供を見守る母親のそれみたい

鼻から息を吐いて、ちょっと目を瞑る。それから、口を開いた。

「なら、そういうことです」 「少なくとも俺は、違わない――と思う」

そして歌舞伎揚の続きに取りかかる。 言うべきことを言ったと見えて、ちはやは椅子に座り直すと、ふん、と腕を組んだ。

「静流も行くか?」

と怒られる」 「あー」 「ルチアのことは気になるし、らぶらぶのシーンは見てみたいが、邪魔をするときっ 静流は首を振って、歌舞伎揚をひとつ摘んだ。

またちはやが、じろりとこちらを睨んだ。風呂場に潜んでたときのこととかか。

「言われなくてもそうするさ」「いいから行ってきたらどうです?」

「おう!」 頑張れオトコノコ!」

小鳥の声に立ち上がる。

「天王寺」

「なんです会長?」

「これを持っていきなさい」

紙袋を手渡される。

「お馬鹿。風邪薬よ」 「なんですかこれ。護符とか?」

「そいつは……ありがたいです。渡しておきます」 さすがは現実主義者。いいものを持っている。

さっさとお行き」

あいよっ」 鞄を掴むと、瑚太朗は廊下に飛び出した。

ルチアの家は、 学校から少し離れた、 何の変哲もないアパートだ。 『いやしかし……』

ここに来るのは二度目。感覚的には、 もう慣れた道だった。

しばらくごそごそやっている気配があって、やがて、

ピンポーン、とチャイムを鳴らす。

『天王寺か』

「おう」 ちょっと驚いたような声がした。

『ど、どうした』

「ちょっとお見舞いにな」

口籠もる。ふむ。

前の方がはだけてるくらいの方が俺は パジャマを見られるのが恥ずかしいとかか? 病人なんだから気にするなって。ルチ アのことだ、寝るときだってそんなにルーズな恰好してないだろ。あーでもちょっと 「風邪で寝込んでるんだから、部屋が片付いてないくらい気にしないぞ。あ、あれか?

どかぁん! 爆音がして天の岩戸が開いた。

おまえは一体何を想像しているんだこのド変態がッ!!」

そんでもってルチア宅。

「まったくおまえはどれだけ私を辱めれば気がすむんだ……!!」 ルチアはぶつぶつと文句をいいながらお茶をすすった。

「まあ、元気そうで安心したよ」

「おかげさまでな」

ジト目だ。

「褒めてる?」

「褒めてなどいない!!」

瞬時に日本刀が突きつけられた。

真剣だ!

「ですよねー」

「ふん!」

しかし……」 刀を鞘に収めて、鼻息をひとつ鳴らす。

ちら、と視線が瑚太朗の横に向けられる。

「いったい何を買ってきたんだ」

「ああ」

瑚太朗はレジ袋の中身を―― 来る途中にスーパーに寄ってきたのだ――ちらと見

「ネギと生姜と大葉と梅干し」

された調理場だった。

「お粥くらいはな。まあ、任せとけって!」 「あ、ああ……それは構わないが……天王寺、 「メシまだだろ。米は使わせてもらうぜ」 おまえ、 料理なんて出来るのか?」

さすが自炊派委員長。

瑚太朗が何をするつもりなのか、

すぐに気づいたらしい。

実は、ここ一週間、家で毎日練習してたりする瑚太朗だ。

瑚太朗はさっそく台所に立った。ぱっと見渡しても、さすが委員長、

きちんと整理

「あ、その、流しの下だが……」 ルチア、鍋は?」

「りょーかい」 開けると鍋の大小が積まれている。適当なサイズを見繕う。ついでに米びつも発見。

「なあ、 塩は?」

「その、一番上の引き出しだ」

いほ <u>ر</u> را

そんなにフクザツなことをするには、瑚太朗はレベルが足りない。 引き出しを開けると結構な種類の調味料が並んでいる。まあでも使うのは塩だけだ。

さて――と、瑚太朗は考えた。

なら「料理とインスタントラーメンの中間くらい?」なんだそうだ。 せてから弱火でことこととやれば、完成。小鳥なんかに言わせれば、シンプルなやつ まず、粥ってのは、そんなに難しい料理じゃない。研いだ米を水から煮て、沸騰さ

少しくらいルチアを驚かせてやりたい。 干しで頂く手もあるが、それじゃあんまり味気ない。ちょっとくらいできるんだぜと、 そうすると問題は、具をどうするか、の一点だ。もちろん、味付けなしの白粥を梅

細かく切って、茶碗に盛った後にぱらぱらと載せてやるのだ。 姜は皮を剥かずにそのまま千切り。これは米と一緒に煮る。大葉だけは別で、これは ……と手順をもう一度確認すると、瑚太朗は鍋に米をあけて、蛇口をひねるとそれ で、用意したのがネギにショウガに大葉だ。ネギは直火で炙って小さく切って。生

を研ぎはじめた。

それから半時間ほど。

に声をかけた。 く小さい声でひとり言った。だいたい思ったような感じの味だ。それから、部屋の方 静かにぐつぐついっている鍋の前に立つと、一口味見をして、 よし、

「食器、適当にさがすけど、いいか?」

渡されたのは黒い方。

それならお茶を淹れよう」

「え……ああ、それは私がやろう」

していたけれど、予想よりマシな手つきなのを見て、とりあえず任せてみることにし ルチアはそこではじめて台所へと立った。最初こそ瑚太朗のほうをちらちらと気に

明太月) 詩ていたのだ。

黒っぽいのと、白っぽいの。 瑚太朗の横にやってくると、ルチアは食器棚をあけて、茶碗をふたつ取り出した。

「天王寺はこっちを使ってくれ」 その二つを右手と左手に持って、ううむ、とルチアは唸った。

「客用か?」

「いや、私のだ」

マジか!」

「きちんと洗ってあるから、断じて何の問題もない。学食の食器と同じだ」

「こっちは静流のだからダメだ。あと何か出す皿はあるか?」 「そこまで言われると凹むな……俺がそっちを使えばいいんじゃないのか?」

「あ、ああ。梅干し用に小皿をひとつ。それからコップを二つ。水かなにかあるか?」

58 湯飲みを二つ。 要望通り小皿を出すと、ルチアは急須にお茶っ葉を掬って、お湯を注ぐ。それから

「天王寺はこっちだ」

「ルチアのか」

「そうだ。私は静流のを使う」

さっきと同じ言葉を聞いて、瑚太朗はふと、もしかして嫉妬の一種なのか、と気づ

く。唇がにやけた。 「どうした天王寺」

「いや、なんでもねえよ」

にも食欲をそそる。 そんなこんなで、二人の前に瑚太朗謹製のお粥が並ぶ。湯気が立っているのがいか

手を合わせてルチアがスプーンを取った。

「それじゃ……いただきます」

その様子を瑚太朗はひっそり伺っている。

アが感心の声を上げた。 やがて、ルチアの喉がこくりと鳴って、さいしょの一口が終わる。ふうん、とルチ

「おいしいな、これは……」

[「]ああ。なにか変わった調味料でも入れたのか?」

いいや、特に。ただ、ネギもショウガも大葉も、風邪には効くもんだぞ」 近所のスーパーで簡単に手にはいるし、三つあわせれば、それなりの薬効になる

と、これは小鳥の入れ知恵なのだけれど、そこはカッコつけさせてもらうことにした 瑚太朗だ。果たせるかなルチアは、ほう、と感心したような声をだした。

「そういえば、そんなことを聞いたことがあるな」

「調子が悪いときにこれは、確かにいい。有り難いな」 「梅干しも体にいいって言うぜ」 また一口。

進めるとルチアは梅干しをひとつ茶碗にとる。それから箸で崩すと一口。

「だろ?」 「酸っぱいが……うん。いいな」

「なあ、天王寺」

「ん? なんだ?」

いだろう」 「その、せっかくだから、 お前も食べろ。こっちを見てるばかりじゃお腹はふくれな

59

ちょっと赤くなっている委員長であった。

やがて茶碗が空になり、ルチアはスプーンを置く。

「おいしかった。ありがとう」

「ひとの手料理を食べる機会は、あまりなかったんだ。こういうのも、 言うとほっこりと微笑んだ。 いいものだな」

そう喜んでもらえると、実際瑚太朗も嬉しい。

「そりゃ、よかった。作った甲斐があったぜ」

「最初はどうなるものかとひやひやしたがな」

「そんなに俺、信用ないかね」

んだ」 「ひとが食べるものに激辛ソースをかける人間の料理を、どうやって信用しろという

「ははは……そりゃまたまったく正論」

ちょっと冷や汗。そんな瑚太朗をぐさりと刺す視線が、少しだけ弛む。

「でも、本当に美味しかった……」

瑚太朗の心臓がどきりと弾んだ。 ルチアはそういうと、ベッドにもたれかかった。そのしぐさがあんまりに普通で―― |何を――だ?|

風邪じゃ、ないんだって?」

『毒』――のひと文字が、瑚太朗の心象に場違いに浮かぶ。

間、 理不尽だよなあ。その理不尽のせいで、ルチアは今も手袋をはずさない。ここ一週 学校を休んでいるのだってそうだ――

ん? なんだ?」 ---なあ、ルチア」

「その……西九条先生から聞いた」

その表情に陰がさす。

そして深々と息を吐くと、 答えずにルチアは自らの両手を見つめた。

ーそうだ」 と告げた。顔を上げ、今度はルチアが問うた。

「どこまで聞いている?」

「ぜんぜん」

瑚太朗が飄々と首を振った。

|詳しいこと俺は判らないからな。ちょっと体調が悪いくらいのことだって」

「そうらしいな」

まるで他人事みたいに言う。

「実は私も、詳しいことは判らない。科学者たちが言っていることを信じるしかない。

自分で自分のことが判らないのは――」 言葉が途切れる。

そんなルチアを、何故だか瑚太朗は少しだけ遠い目で見ていた。

その焦点が戻ると、瑚太朗は不意に立ち上がった。

?

それから何の気なしといったふうに右手をあげた。ルチアの視線がそちらに向く。 そして疑問符を浮かべるルチアの横にやってくると、肩を並べるように腰を下ろす。 と、なにかが輝く音がして、その手首あたりで七色に輝くなにかが爆ぜた。気づけ

ば、 瑚太朗の右手に、オーロラブレードが形成されていた。

ルチアが――目を剥いた。

「な、何だ、それは……!?」

結構危ない」

「俺にもよく判らん。でも、それなりに切れる。 とぼけてみせる。

唖然としてルチアはブレードを凝視している。

「天王寺……」

「人に見せたことなくてさ。西九条先生にも。だからこれ、ルチアと俺の秘密だぜ」 聞いていないぞ、そんなものの話は……」

「あ、ああ……」

「いつからこれが使えるようになったのか、実は覚えてないんだ。俺も――同じだぜ 少し驚いたように、でも黙ってそれを見ている。

ルチア。自分のことはよく判らねえ」

「でもさ、自分のことがよく判ってるやつなんか、どれだけいるもんか。 しげしげとブレードを見て、瑚太朗が呟く。 そんなヤツ

はきっと、世界のどこにもいないんだぜ、委員長」

一そういうもの?」

俺は、そういうもんだって思うことにした」

「馬鹿だからさ、よく判らねえんだ。難しいことは。判らないもんは判らないから、

考えたって仕方がない。考えて何かいいことあるなら別だけどさ」 ルチアがぽうっとした目で瑚太朗のほうを見ていた。

「まあだから……あんまり心配しなさんな」 にっと笑い返すと、瑚太朗はその右手で、ルチアの頭をぽんぽん、 と撫でる。

その目の前で、ぱりん、とオーロラブレードが崩れ、光る粉になって宙に消えた。

くたり、とその首が瑚太朗へと寄りかかる。ルチアが声にならない声を上げた。

子供でもあやすようにして、瑚太朗はその頭を撫でて――その時ようやく異変に気

「よしよし」

「おゝ、レ・

「おい、ルチア……」

顔を覗き込む。赤い。かなり。

ちょっと体調が悪いくらい、という感じではない。「お前、熱あるんじゃないのか?」

はっと瑚太朗は顔を上げる。 そして……突然、ガラガラという音がした。

雨戸が閉まっていく。誰の手も借りずに。

震える声で瑚太朗は呟いた。脳裏に、嫌な予感が過ぎった。否、予感ではない。全自動……!?

「まさか……防毒シェルター!?」

その言葉を証明するかのように、 突如物置の扉が開いた。

チアを庇うようにして瑚太朗が 振 り向く。

男達だった。全身がひどく物々しい装備で覆われている、いつか 物置から――どこに通じているのか、 通路から 出てきたのは、 真っ黒い異様な サンタブローシ

「ガーディアンの……特殊武器防護隊……」

瑚太朗が呻いた。

『その通りだ』

アで見た男達だ。

『有害物質指数が第三種警戒態勢の閾値を越えた。これより此花ルチアの緊急搬 マスク越しに、電子的な声が響いた。

よび当シェルターの無害化作業を行う。天王寺瑚太朗』 男が瑚太朗を見た。 対閃光防御がされたゴーグルの向こうに、 君に対しても此花ルチアと同 その瞳 は 見え な

様の初動措置を取ることになっている』 君も同行してくれ。 本警戒態勢に関する運用規則で、

ったりめー 天王寺は敢えて不敵に声を上げた。 だ

俺は此花ルチアを独りになんかしないんだぜ。覚えておけ」

査をされて……解放されたのは、たっぷり数時間が経った、もう真夜中のことだった。 のガーディアンの病院で、腫れ物でも触るかのような――穏健に表現して、だ――検 準備されていた真新しい制服に着替えて、ベッドに寝転がって窓から月を眺めてい 階下のガレージ、宅配便のトラックに偽装された特殊輸送車に載せられ、どうやら例

ると、ノックの音がした。入ってきたのは西九条だった。

「先生……」

「例によって天王寺君は何もなし」

西九条は端的に検査結果を告げる。

「でしょうね。それで、ルチアは……?」

問題は全部片付いたわ」

「大丈夫。ちょっと体調を崩しただけだから。

家の方も除染措置が終わって、直近の

「さすがですね、ガーディアンは」 その言葉に刺がある。

「できることは、しているのよ。私たちにはその義務がある」

「でしょうね」

その言葉に、なぜか西九条は……悲しそうな顔をした。

「……そのことなんだけど、天王寺君、ちょっと来てもらえるかしら」 「こんなことは、続くんですか?」

脳裏を嫌な予感が過ぎる。瑚太朗は黙って靴を履いて、ベッドから降りた。

果たしてそこが病室と言えるものか判らないが――病院の一室という意味では辛う いくつかの鋼鉄の分厚い扉を抜けて、二人が辿り着いたのは、ルチアの病室だった。

ルチア……」

じて病室だ。

を置いたり、あるいは――手術したり――できるのだろう――部屋の、真ん中にぽつ りと置かれたベッドのうえ、半身を起こしている。 硝子窓の向こうに、その姿があった。一面真っ白で、必要以上に広い----検査器具

「ルチアちゃんからは、こっちは見えないわ。ただの壁みたいに見えるはず」

瑚太朗のガラスに置く手がぎゅっと握りしめられた。

「モルモットってわけですか」

「そんなに悪く言わないで」

口が歪む。 ひどく気落ちした声だ。西九条だって他人事ではない――そう気づいて、 瑚太朗の

「――すみません。言い過ぎました」

物質の漏出もない。そろそろ普通の病室に戻れるわ」 |大丈夫……気にしないで。とにかく見たとおり、ルチアちゃんは元気は元気。 有毒

「……そうね。でも、それを使わなければならないようなことには、ならないと思う」 |緊急時にはシェルターとして隔離できるような?|

瑚太朗、その言い方が、少しだけ引っかかった。

「天王寺君、ルチアちゃんを普通の生活に戻したい?」

「なにか手が?」

「そりゃあ、もちろん」

「方法はあるの」

「俺にできることが?」

「他の誰にもできないことよ」

教えてください」

一切迷わないその声に、西九条の目がすっと細められた。

「それなら天王寺君――ルチアちゃんと、すこし距離を置きなさい」

---なんだって?」 瑚太朗が凍える声で問い返した。

りの会話が続いている。 ルチアは相変わらず、 病室のベッドの上で身じろぎもしない。その姿を前に、ふた

-::: 「その拡張された生体の機能の一部として、 極めて強力な有毒物質を発生させること

「……知ってます。聞きました」

ができる、っていうことも」

わね」

「天王寺君。

ルチアちゃんが、ある種の―

-改造人間であることは、もう知っている

その制御が不安定になる条件が、検査で判ったの。 天王寺君.

「あなたと接触していると、そうなるのよ」 軽く息を入れて、西九条が言いにくそうに続けた。

西九条の提案から、予想はしていた。

「どういうことですか」 しかし改めて聞いてみると……瑚太朗は言葉を絞り出す。

心身ともに健康、なんて言うじゃない」

その視線が、ルチアの方にちらと向いた。

ね、 たわ。一七世紀、デカルトの『我思う、故に我在り』、なんていうのもそうね。でも 人間の心と体は、もともと不可分なものなの。特に一時期の近代科学は体と心を

紀元前の古代ギリシャの時代から、人間は『魂』っていうものの存在を仮定してき

70 している。体の調子が悪いと気分も沈むし、気分が悪ければ体の調子も何だかよくな 分離して考えていたけれど……そんなことはそもそも不可能なのね。相互に深く関係

天王寺君は、そういう経験ない?」

話されているのは一般論だ。だが、瑚太朗は無言だった。

「それは、改造人間のルチアちゃんの場合も、同じなの。心が不安定になれば、

体の

「つまり、俺が近づくと、心と――体も不安定になって、毒が……」

方も、調子がすこし、おかしくなる。天王寺君……」

「そういうことね」

「そんな……」 静かに西九条は首を振った。

瑚太朗は自らの心臓のあたりに手をやり、ぎゅっと掴むような仕草をする。

「俺が……?」

ガラスの向こうで、ルチアがぐっと俯いた。涙を流していた。

『お願いだから……放っておいてくれ……』 スピーカーから、その声が聞こえた。

「ルチア……」

"独りに、しないで……』

「天王寺君――気がついた?」

くなって、ふっと視界がブラックアウトし、 あまりにも切実な、矛盾する願いが、瑚太朗の心臓を打ち砕いた。 瑚太朗はその場に頽れた。 膝に力が入らな

寝かされていた、古びた長いすから身を起こすと、頭の上から声が聞こえた。 瑚太朗が目覚めると、そこは病院の薄暗い待合室だった。

ゆるゆると瑚太朗は、 力なさげに顔を上げた。

西九条先生……」

太朗の隣に腰掛けた。ほんの少しだけ距離を取って。 西九条は小さく頷くと――その所作は、意味を限定しないささやかな承認だ

瑚

下だけになる。その廊下の蛍光灯も、きちんと交換されていないのか、時折、ジジ…… そのまま、沈黙が続く。陽も落ちて、診察時間も終われば、灯りがついているのは廊

と音をたてて明滅する。ひどく弱々しい。 「俺、何だったんでしょうね……」

71 誰にいうでもないふうに、瑚太朗の口から言葉が漏れた。

「あいつの側にいたいって思ったんです。あいつを笑わせてやりたいって」

一切の留保なしに、西九条は瑚太朗の言葉を肯定する。

言葉尻が霞んで消えた。西九条はゆっくりと口を開いた。

「それなのに俺は……」

ること、っていうのは――」 「声が届かないとき、というのは、あるものよ、天王寺君。 時間だけが解決してくれ

「それでどうにもならなかったら、どうするんですか……?」

「それは判らない。天王寺君、現実にはね、どうにもならないことも、あるのよ」

「そんなの納得できないですッ!!」

瑚太朗ははじめて、激昂した。

はしちゃ、いけないんだ……!!」 を途中で放り投げたら……それは……ひどいことだ。あんまり残酷です。そんなこと 「俺が、ルチアに希望を見せてしまった。その責任を俺は負わなきゃいけない。それ

が漏れてくる。 そこまで言うと……瑚太朗は顔を伏せた。片手で顔を覆った。その指の間から嗚咽

いた。古い古い――昔話だ。 それを聞きながら、西九条は微動だにせず――心の奥にくすぶる種火と向き合って 込んだ。

「天王寺君……」

「……あなたはいつも、そうなのね」 答えはない。だから西九条は独り言のように続ける。

ないということの実例が、ここにある。瑚太朗にはそれが判らない。 だから西九条は、瑚太朗の悔し涙の意味がよく判った。 その言葉の意味は届くまい。西九条の言葉はもう、瑚太朗には届かないのだ。

届か

思わず口を開きかけて――しかし西九条は、ひとりの大人として、その思いを飲み ひどい話だった。

やがて、瑚太朗は泣き疲れたか、そのまま眠ってしまった。

江坂と今

宮だった。 「ふむ、寝てしまったか」 見計らったように、ふたつの足音が近づいてきた。闇から現れたそれは、

「やれやれだっつーの。人騒がせもいいところだな――お前も少しはシャキッとしろ

よ。西九条センセ?」

「だといいんだがな――狂犬どもがうろついてる。こちとら混乱ってほどでもないが、 言われなくてもそうするわ」

「配置は?」

何かあるって嗅ぎつけられたみたいだな」

「ありがとう。天王寺はどうする?」 ·通常戦力は輪番待機、特殊戦力は準戦時待機。中津嬢もな――行こうぜ、センセ」

る。この様子だと、その先はなさそうだが……」 「私が見よう。『フォレスト』に連れて行くよ。状況が変わらなければ、そこで待機す

「先のことは判らない、と。そんじゃまあ、そのバカはお任せしますよ」

所作だった。それを合図に、西九条は立ち上がり、既に背を向けて歩き始めていた今 頷き、江坂は軽々と、瑚太朗を背負いあげた。まるで我が子にするような、それは

矍鑠たる足どりで歩き出した。 一人残された江坂は、ふむ、 と呟くと、背負った瑚太朗の重さもものともせずに、

宮の後を追った。

そんなことがあって、二日が過ぎた。

ルチアは相変わらず学校を休んでいて、小鳥と静流は、一体何があったのやらと心

独りでどんよりと沈んでは、無言で帰っていくばかりだ。 配そうに瑚太朗のほうを気にしている。その瑚太朗ときたら、 オカ研に顔を出しては

今日も夕方になり、朱音を残して部員は今日も帰路についた。

な事態はつまり、初めてのことだった。 が、そもそも、ここは朱音ひとりの居場所だった。沈鬱にもなりようがない。こん 独り残った朱音は、オカ研がこんなに沈鬱になるのは、いつ以来か――と考える。

コンコン、

コンコン。 とノックの音がして、千里朱音は我に返った。 誰だろう。

除けば、この部屋にやってくるのは、津久野と宮島くらいのものだが。 「入りなさい」 もう一度音がすると、朱音はやれやれと息をついた。オカルト研究会の現役部員を

振り返りもせず言う朱音の声に、ドアがキィ……と開き、現れたのは、

赤毛のロン

グヘアに羽の髪飾り、鳳ちはやだった。 「そうなんですけど、あの……少しいいですか?」 帰ったんじゃなかったの?」

ようやくちはやの方へと顔を向けた。思い当たる用件と言えばひとつしかない。 その声にいつもと違った――なにかを内に秘めたような――ものを感じて、朱音は

「天王寺と此花のことね」

ちはやが黙って頷く。

「まあいいけど……」

ちょうど朱音に背中を向けるような場所だ。 朱音が渋々頷くと、ちはやは部屋の中へと足を進め、ソファにぽすんと座り込んだ。

ちはやはしばらく何かを考えるようにして、窓の外のほうに目を向けていた。が、

「激辛パフェのこと、話しましたよね」

やがて、小さく息を吐いて、ぽつり、ぽつり、話しだした。

「もちろん。聞いていてよ」

ちはやとルチアが仲直りをしたときのことだ。

「たしか、天王寺が策を弄したのだったわね」

の予定だったとか」 「そうです。後から小鳥に聞いて、笑っちゃいましたけど。 あれ、本当は普通のパフェ

「瑚太朗の口先は、ほんとに回りますからね」「よくもまあ、そんなゲテモノで仲直りできたものね」

「騙されるちはやがアホなのじゃなくて?」

|最近はそんな気もしてきました……じゃなくって、ですね」

ちはやの口調に真剣味が混じる。

要するに、似てると思うんです」

「似ているって、何と何が」

「その、此花さんと私の時と、それから、今回のこと」

朱音が、すっと目を細めた。その表情に似合わぬ軽口を叩く。

と同じで、瑚太朗と此花さんの間に、誰かが入ってあげないとダメだって思うんです」 「それなら、ちはや、おまえがやればいい。違って?」 「ええと……私と此花さんが喧嘩をしたとき、瑚太朗が間に入ってくれました。それ

ぱり、瑚太朗ってすごいと思います」 「最初はそうしようかって思いました。でも、私は瑚太朗みたいにはできません。やっ

「すごい? どこが?」 「その……なにかあったときに、真っ正面から向き合うんです。私には、

きません」 なかなかで

朱音は少しばかり遠い目をした。

| そうね……」

「あれはどちらかというと、外界干渉者というより自己改革者の資質ね。私たちには「魔物性」

少し及びもつかないところがある」

「はい、それで……」

朱音の言葉を聞いて、ちはやはようやく、朱音のほうを少しだけ振り返った。

「そんなことだろうと思ったわ」「何とかならないかって思って、相談に来たんです」

上がった。窓に歩み寄ると、眼下の風景を見下ろした。 の気配がする。狩人どもも動き始めている。そんななかで、この私に動けというの?」 「ちはや、おまえ、私たちが置かれた状況を判っているの? 風祭の収穫祭は近い。鍵 その言葉はあくまでも冷たい。が、ちはやは、怖じ気づくこともなく、ふっと立ち やれやれと首を振って、朱音が言う。

的な町並みだ。 校庭のむこうに、風祭の町が広がっていた。山間の盆地に拓かれた、いかにも人工

た。デスクの椅子から立ち上がり、その隣へと足を進める。朱音の目に映るのは 「なんて言うんですかね……」 ちはやはそれだけを呟く。その目が何を見ているのか――朱音は少しだけ気になっ

アンの根城と目される建物があった。ガーディアンには敵わないとはいえ、ガイアは がある。濃厚な緑のピラミッドだ。そのちょうど反対側あたりには、忌むべきガーディ それほど遠くないところに、日本マーテル会風祭支部――要するにガイアの本拠地

ガイアで特殊な諜報能力を保有している。 敵対組織の本部の場所は、 それなりの確度

囲気は で判っているのだ。 朱音の目に映るのは、そんな風景だった。だが、隣に立つちはやからは、 ――闘争じみたものを見ているような雰囲気はまるで感じられない。 そんな雰

「おまえは、いったい――なにを見ているの?」

<u>.</u>

「なにって……いやなんとなく外の風景を」 朱音の問いかけに、ちはやは小さく首をかしげた。

-

な微笑みであることに気づいて――絶句した。絶句した朱音に気づいたか気づかない だからこそ。朱音は口を開きかける。開きかけて、ちはやの顔を見て、それが穏やか この天然むしゃむしゃ娘は――と朱音は微かに苛立った。それなりに長いつきあい ちはやは問うた。

「この部室は、好きですか?」

答えはない。が、それを最初から削って

|私は、好きです。友達ができたのって、初めてなんです。ほら、私たちって――」朱 答えはない。が、それを最初から判っていたかのように、 ちはやは続ける。

も、ここはなんだか居心地がいいです。たぶん、みんなどこか変わってるからだと思 音には判る。それは、魔物使いのことだ「――なんだか浮いてるじゃないですか。

うんですけど……」

んです。殺したり殺されたりすることばっかりでしたけど、その、そうじゃなくって 「そういうなんて言うんですかね、普通っぽいことをしてみて……ようやく気づいた ちはやは続ける。

普通の人は ――普通に幸せになればいいんだなあって。そう思います」

朱音はようやく気づいた。 相変わらず街を――闘争のゲーム盤を――見下ろしたまま、ちはやは言う。それで

彼女の双眸はごく穏やかに捉えていた。 い。彼女が見ているのは、盤面だ。闘争には関係のない、普通の人々、普通の生活を、 この娘は、ゲームの駒を――ボーンやナイトやビショップを――見ているのではな

花さんには幸せになってほしいって思います。朱音さんだって、そう思いませんか?」 「私はガイアの魔物使いです。でも、私はこの部室の一員です。だから、瑚太朗と此

ないが、最初の質問――この部室は好きですか?――が脳裏から離れなかった。何と いう巡り合わせか、それは、朱音自身が、かつて天王寺瑚太朗に問いかけたそれと、 問われて、朱音は答えに窮した。ちはやがその意味を判って問うたものだとは思え

相似形を為していたのだ。

?

『ここがおまえにとって良き居場所となれば良いわね、 天王寺瑚太朗

た。ここが天王寺瑚太朗にとって良き居場所となることを、自分は望んでいるのだ。 その自分の言葉が、一〇〇パーセントの嘘であったとは、今の朱音には思えなかっ

「ちはや……おまえは、」

「なんです?」

「いいわ」 なんでもなさそうに、ちはやが応える。それで朱音の心は決まった。

目を輝かせ、ちはやが飛び上がった。「朱音さんっ!」

「さすがでです! きっと何とかしてくれるって……頼った甲斐がありました!」

「ひとつ条件があるわ」対して朱音は、不敵に笑う。

「条件?」なんです?」

「ちはや、おまえにも協力してもらうわよ」

ルチアのことは気に掛かっていたが、それでも教師たる自分に手を抜くことは出来 その日、 西九条灯花は職員室でテストの採点に励んでいた。

西九条は何十人もの生徒の先生だった。

に共感を覚えていた。 を失ってはガーディアンはガーディアンたり得ない。西九条はその考え方にそれなり ガーディアンたるものの依って立つ場所だ。二重生活は決してラクではないが、それ ガーディアンのメンバーは皆、それぞれに真っ当な市民生活を送っている。 それが

要に迫られた副業に過ぎない。 こと、それが西九条のいわば本業であると、西九条は思っていた。ガーディアンは、必 じっさい、西九条は教師の仕事が好きだった。教師としてこの世界と関わっている

校内でガーディアンたる自分の顔が僅かでも覗くのは、はじめてだ。 徒の顔を見て、自分の内なる副業が第一種の警報を発した。 が、その呼び出しに、西九条はさすがに目を剥いた。 入口に突っ立っているその生 この学校に赴任して以来

る千里朱音だったのだから。 なぜなら、そこに立っていたのは、ガーディアンの敵対組織、ガイアの次期首魁た

だが、こればかりは仕方がないんじゃないか――と醒めた自分が呟いた。

実は、少し相談があって」

屋上に吹く風は、この季節はまだ穏やかだ。

に降り積む季節のまえの、今はまさに収穫祭、感謝祭の時期だった。 収穫祭も終われば、空気は急に寒々しさを纏い、季節は冬へと移ろっていく。

静か

「で、いったいどうしたのかしら、千里さん?」

西九条がつとめて友好的な――少なくともそう装われた――声をかけた。

時折屋上に足を運ぶことのある西九条だ。ここはそれなりに慣れた場所だとも言え だが、このシチュエーションはさすがに、ちょっと胃にくる。

それに対する千里朱音は、 超然と街を見下ろしていた。部室でしていたのと同じよ

|駒と|

呟く。 盤面、 か

その言葉は風に乗り、 西九条の耳にも聞こえた。

「なんですって?」

ーうん 「いや……なんでもありません。それで、ですね、西九条先生」

相談!?」 西九条はまたしても目を剥いた。 次いで出た言葉は、 ほとんど純粋な疑問だった。

「この件については、他に頼れる先生もいない」「その、なんでまた私に?」

「オカルト研究会についてです」

するに、ガイアそのものだ。教員側ですら、まったく手を出せない、理事会に完璧に 西九条は今度こそ意味が判らないと思った。だって、オカルト研究会というのは要

そのことについて、何故私に?

保護された学園の闇だ。

と、その疑問を読んだか、朱音が、ぽつり、と付け加える。

す。その、天王寺瑚太朗と、此花ルチア」 「部員の人間関係で、うまくいっていないところがある。それを何とかするつもりで

「天王寺君と、ルチアちゃん!?」

今度こそ西九条は、絶句した。

緊張の無言が続いて、どれだけ時間が経った頃か。

「あーもうっ!」

西九条が唐突に叫んで、髪の毛をわしゃわしゃとかき回した。

「あの二人のことは知っているし、何とかしたいと思っているけどっ!!」

そして指先をビシッと朱音の方に突きつける。

「どうしてあなたがそこで出てくるのかしらっ!?」

対する朱音は、してやったりと笑う。

るのが、おかしくて?」 「どうして? オカルト研究会の会員のトラブルを、オカルト研究会の会長が仲裁す

るなら勝手にやったらいいでしょうに!」 「いや、それはそうなんだけど……でも論点はそこじゃないでしょう! それに、

かのヒントもあるかも知れないし」 「そこは、此花と懇意にしている西九条先生に話を通すのが筋というものだわ。なに

あくまでも平然という朱音に、西九条はまた押し黙った。

- ぐぬう……」

に超したことはない。願わくば、教師はただ、生徒達を見守る役どころであるべきだ。 の人間関係のトラブルを、生徒たち自身で解決できるのなら、教育効果も含めてそれ だが同時に――朱音の言っていることは、 朱音の言っていることは、全くの正論だ。学校というのは特殊な社会だ。生徒たち 明らかにおかしい。筋が通らない――そ

85 こまで考えて、西九条はようやく気づいた。

「そんなところね」 「筋の通らないことをしようとしているから、私のところに筋を通しに来た……?」

首肯する。

「動機はなに?」

「会員の尻ぬぐいは会長の仕事よ。そうではなくて?」

そういうことじゃなくて、」

ずにはイエスとは言えない。ノーとは言いたくない。できればイエスと言いたい。そ んな自分の心の動きにとまどいもする。 言葉が途中で止まる。口に出すべきではない言葉もある。だが、この疑問を片付け

考えて、考えて……西九条は呟いた。

「……なぜ——『魔女』ともあろうあなたが?」

それは、ダブル・ミーニングだ。

ほとんど周知の事実だ。そして、『魔女』と対極にある概念 朱音が『学園の魔女』と呼ばれているのは、一部の生徒や多くの教師のなかでは、

果たして、朱音はにやりと笑った。

「踏み込んだ質問だわ」

「踏み込むというのなら、あなたのほうが踏み込んだのよ、千里さん」

「それは、そうね」

西九条先生、 あなたは私を『魔女』 と呼んだわ」

れない。でも同時に私は、まだ――人間なのよ。人間には 気に障ったかしら?」 いや、特に。でも、西九条先生。敢えて言わせて貰う。私はたしかに『魔女』かもし ――すべての人間には、

間 いものだ。 の生活を謳歌する権利がある。そうではなくて?」 西九条は腕を組んで唸った。自分に利する、敵対者の利敵行為は信用してはならな 一度裏切った者は、繰り返し裏切る。どんな戦争論にも書いてある。

だが一方で、敵対者の利敵行為は、 非常に魅力的だ。 普通の戦闘では手に入らない

自身の心が 戦略的価値が手に入る。ことがある。 そんなときにどうすればいいか――そうか。 ようやく西九条は答えを見つけた。それは、 わくわくと踊っている。 戦略的にも正しいし、なにより西九条

何かしら?」

千里さん」

交換条件? 交換条件があるわ」 物騒だわね」

聞くだけは聞くわよ。認めるかどうかは知らないけど」

する責任があるから。だからね、」 師としては全部任せっきりにすることはできないの。なにかあったときには、フォロー 「生徒の問題を生徒が解決しようとするのは、とても素晴らしいことね。だけど、教

ここぞとばかりにひまわりのような笑顔をつくって、西九条は言った。

「そのためにも私を、オカルト研究会の顧問にしてくれないかしら?」 言葉の意味を理解して、今度は朱音が目を剥いた。してやったりと、西九条は好意

的な笑い声を上げた。

「会長、ここは……」

「深く問わない方がいい。私は西九条先生から聞いただけ」

そのことについては、自分は知らないふりをする約束だ。 ガーディアンの病院に、部外者が――という問いを、瑚太朗は何とか飲み込んだ。

放課後、会長に「ついてきなさい」と言われるがままに歩いて、 何と辿り着いたの

がここだ。何が起こっているのか瑚太朗にはさっぱりだった。

神戸小鳥の旅路

かつかつと歩く朱音の後を追いながら、三人目の同行者 ちはやに耳打ちをした。

「おい、 一体どうなってるんだ?」

「私もさっぱりです……」 ちはやも何が何だか判らないという顔をする。

「此花さんがここにいるんです?」

「あ、ああ」 知っているのなら隠すこともないか、と一瞬で瑚太朗は判断した。

「でも、ここ、なんだか――」 「そうだ。このあいだ、担ぎ込まれた」

一ちはや」

「ここで見聞きしたことは一切他言無用。天王寺もそう心得なさい」 朱音がちはやの言葉を遮った。

ちはやも瑚太朗も、それぞれの理由で絶句した。

傍証はある。朱音の口止めこそがそれだ。 れない。そのような敵陣と似た匂いを、彼女は敏感に嗅ぎつけていた。ここはまさか。 命の危険はないだろう。どんな現代兵器を用いても、自分が倒されることはない。 鳳ちはやは馬鹿ではない。彼女の戦闘経験のなかで、敵陣に切り込んだことも数知

のではない、ということくらいは判った。だがその理由は? いかにオカルト研究会 歩む朱音こそが不可解だ。なぜ、そんなことを。それに、 咲夜とのつながりは、今この瞬間も確保されているのだ。だが、そのただなかを悠々と の暴君でも、正義の味方の戦闘集団・ガーディアンがそれを恐れる理由はなにもない。 一方で、瑚太朗もまた、朱音とちはやが、味方としてこの施設のなかを歩いている 此花さんはもしかして……?

なければならない。少しくらい暴力的手段に訴えても、だ。 流と同じく、だ。もしこの二人に手を出す者がいれば――と瑚太朗は考える。調停し だが、瑚太朗にとっては、朱音とちはやも、オカルト研究会の仲間だ。 ルチアや静

理由があるとすれば――組織的対立だ。この二人はもしや。

「もう、一体なんてことになってるんですか――!!」

気にも留めず、朱音はさっさと先に進んでいく。 「そりゃこっちの台詞だぜ……」 ぱっと聞くだけなら喧嘩腰の会話を交わしながら、 二人は頭を抱えていた。 それを

ずんと通路を進む。 幾度か角を曲 がり、 幾度かエレベーターに乗り、 しかし誰にも会わず、 三人はずん

進んだ先に、瑚太朗は見覚えのある病室を見つけた。

あ.....」

足を止め、ちらりと朱音が振り返る。

「此花の部屋ね」

「そうだけど……」 黙って朱音は瑚太朗に視線をくれた。 瑚太朗がごくりと唾を飲み込んで……それか

ら、扉に歩み寄って、ノックした。

「はい」

「俺だ」

返事がある。ルチアの声だ。瑚太朗、すう、と息を吸いこんだ。

中で身じろぎする気配がした。

「天王寺……?」

その声は固かった。だが、西九条がここに行けと言ったのだ。ならば信じるしかあ

るまい。

「なんだって!?」

「実は見舞いの客がいるんだ。西九条先生の口利きでさ――会長とちはやが」

なにかがとっちらかるような、バタバタとする物音がしばらく聞こえて、やがて、

小さく 告げ

小さく声がした。

瑚太朗は引き戸に手をかけ、がらりと開く。そこには数日ぶりに見るルチアの姿が

あった。

「天王寺……」

ルチアはそう呟いて、それから後ろにいる二人に目線をやった。

「久しぶりね、此花」

「どうもです」

二人は口々に挨拶をする。

ルチアは二人の――朱音の顔を凝視した。まるで幽霊でも見たかのような顔で。

イアの次期『魔女』候補筆頭。ガーディアンで知らぬものはない。

「会長……鳳さん。どうしてここに」

「それは……どうも」

当たり前だと言わんばかりに会長が答えて、ずんずんと部屋に押し入った。

「見舞い。お前が倒れたと聞いてね。西九条先生に取り計らってもらったのよ」

「椅子は? 天王寺」

「はっ、ただいま」

壁際に折りたたまれていた椅子を広げる(ついでにちはやと自分のも)。 会長はそこに当然のように座ると――じっとルチアのほうを見た。少し気圧される

ように、ルチアが身じろぎをした。

気づいたのだ。

況ではないのか。その困惑を全部無視して、朱音は続ける。 ルチアは、まるで状況が掴めていない。これはもしかして、 武器を手に取るべき状

おまえ、天王寺と上手くいっていないんですって?」 「それで、此花。倒れた件はいいとして――どうせ風邪ならば直ぐに治るでしょう――

「なっ!?」

「だ、誰から聞いたんですかっ!!」 委員長が瞬間沸騰湯沸かし並みに赤面した

間関係が上手くいっていないなんて、人聞きの悪いことが許せるものか」 「見れば判る。この事態は、オカルト研究会会長としての沽券に関わるわ。

私利私欲だ!」 思わず瑚太朗が突っ込んだ。

「闘争はね、弱みを見せた方が負けなのよ」

「よくわかりませんけどー」 ちはやが呆れた声を上げた。今回の朱音の行動基準は、ちはやにはさっぱりだった。

それでね、此花

あ.....」

ルチアが肩の力をふっと緩めた。 朱音の口調が、少しだけ柔らかくなった――のに

「大した違いじゃないけれど、一年分の人生の先輩として、おまえに教えてあげられ

ることがあると思ってきたのよ」

「そう身構えないで。別に難しいことじゃない。シンプルなことよ……まあ、見せた 「教えて……?」

「は、はい!?」

方が早いか。ちはや」

急に名を呼ばれ、ちはやは慌てて返事をする。

「ちょっと、こっちに来なさい」

「なん……ですか?」

不穏な雰囲気を感じて、ちはやは少し後ずさり。

「何よつれないわね。短いつきあいでもないでしょうに」 なんだか不満そうに朱音が振り返って、手招きをする。

ちょっと困ったような顔をしてそろそろと朱音に歩み寄る。

と、朱音はその頭の後ろに片手を伸ばして――そのままちはやの唇を奪った。

朱音以外の誰もが、凍り付いた。

最初に声らしきものを発したのは、ルチアだった。

- な な な····・! - 1

わなないて、

「何をしているんですかッ!!」

怒号が飛んだ。

が、朱音はその手を緩めない。

ルチアには、見えなかった。 そうこうしている間に……ちはやの目が、少しだけ潤んだ。

嫌がっているようには

「お、鳳さん……?」

ふたりの背後に、なぜだか百合の花が咲き誇っているのが、 瑚太朗もまた、視線を動かせない。 毒気を抜かれたように呟く。その視線は二人に釘づけだ。 瑚太朗には見えた。

ふたりの唇が離れると、ちはやはよろよろとよろめいて、椅子に座り込んだ。その

頬は上気していて、妙に色気がある。そんな顔でちはやはおずおずと呟く。

「お……お姉様……?」

「ちょっと待てお前らいったいどういう関係だ!?」

一天王寺おまえは黙っていなさい」 ばっさりと疑問を切り捨て、朱音はルチアの方に向き直り---

その目を覗き込んだ。

「恐ぃこゝら……?」

「恐れている……?」

「此花」

朱音がその名前を呼んだ。

それは図星だった。「触れ合うということを知らないのね」

じっさい、ひとと肌が触れ合うということを、

瑚太朗や静流のほかにしたことも

テくこう

キスともなれば、そもそも目の前で見るのなんて初めてだ。

ということ。誰とでもできるわけじゃない。私だって、ちはやの他に、それをしたい 「触れ合うというのはね、此花、互いに踏み込んで、個と個の境界線をすりあわせる

とは思わない」

それを聞いたちはやの顔が、真っ赤に茹であがった。

「誰だって、ほんとうに触れ合えるひとというのは、ほとんどいないものなのよ。 お前もそうなのでしょう?」

此

はっとルチアが顔を上げた。

「会長、まさか私の……」

「私は一般論で話しているわ」

「行くわよ」

多少つっけんどんに声をかけた。

またも切り捨てて、朱音は続ける。

「いい? 触れ合える人がいるなら、きちんと踏み込みなさい。恐れすぎず、大切に

しすぎず、互いに踏み込みなさい」

「踏み込む……」

朱音の言葉をルチアはかみしめるように口にした。

その様子を見て、朱音はほんの僅かに柔らかい顔をした。

「得難いものは、手を離してはだめよ」

み寄ると、 優しくそう言うと、立ち上がる。それから、未だに座り込んでいるちはやの方に歩

まだぼうっとしているちはやの手を引いて、 朱音は廊下に出る。

「あ……」

そして振り返ると、

別れの挨拶をして去っていった。「それじゃ、また部室で」

そうして二人が残された。

嵐のような展開に、瑚太朗は呆然と突っ立っていた。

触れ合う――踏み込む。 その横顔に、ルチアは視線を向けた。

ここしばらくのことを思い出してみる。

瑚太朗は私の方に、確かに一歩踏み込んできてくれた。 それを私は嬉しいと思った。

しかし、私ときたらどうだ……?

その厚意にただ縋って――。

「それは、よくないな」

を知って、瑚太朗はまた言葉に詰まった。そんな瑚太朗に、ルチアは声をかける。 思いが自然と言葉になった。聞いて瑚太朗が振り向く。 ルチアがなぜだか笑顔なの

「――なんだか、すまないな」

「すまないって……何がだよ」

「いろいろ、さ」

はぐらかして、 ルチアはまるで独りごとのように言う。

「私はまだまだ、判っていないんだなぁ……」

「それは私が知ってる」

ていたのは判るが、それが一体どういう意味だったのか。 瑚太朗はその笑みの意味がよく判らない。朱音とルチアがなんだか小難しい話をし

「まあいい。行こう」

ルチアはこともなげにベッドから降りると、靴を履いた。

|あ..... 瑚太朗が口を開きかけて止まった。ルチアの顔に、ほんの僅か、不安のいろが過ぎる。

それから、まだ訳も判らず立っている瑚太朗の手を――ごく自然に取った。

「いや……まさか!!」

瑚太朗が飛び上がった。

「なら、いいじゃないか」

顔だった。 ルチアは淡々と……でも、ほっとしたようにいい、その手を引いて病室を出た。 笑

「おい、どこに行くんだ?」

「退院手続きをしに。でもその前に、屋上に行きたいな。いいだろう?」

「いいけど、どうやって屋上に出るか、 俺は知らないぞ」

二人はそんなことを言い合いながら、廊下を歩いていく。

その後ろ姿をこっそりと見守る二つの人影があった。 静流と小鳥だ。

「そうだねえ。コタさんも、よかったねえ……」「ルチア……よかったな……」

二人はそれぞれに、友人の幸せを祝福していた。その顔に嘘はなさそうだった。

「さ、お前たち、帰るわよ」「こ人はそれそれに「友人の幸せを祈福していた」そ

がいた。 後ろから朱音がずいと顔を出して言う。その横にはまだ顔を赤らめたままのちはや

「帰るって、どこへです?」

「決まってるじゃない」

- もちろん、我らがオカルト研究会の部室に、よ」

れていった。 向いた瑚太朗に――絶叫と鉄拳が炸裂して、瑚太朗はどっか遠くの方へとぶっ飛ばさ その彼女達の視線のさきで、瑚太朗が何事かを言った。ルチアの足が止まる。振り

四人が目を丸くする。やがて、小鳥が、くすりと笑いを漏らした。

後の三人も、やれやれと苦笑いだった。そんな小さな幸せな日のこと。「今日もオカ研は平常進行――だねえ」



だから。

朗君は、 だ『わかる』といったほうが正しいだろう。 ポチのほんとうの名前を、あたしは知っている。いや、知っているというより、 その名を自分で名乗ったのでもないし、誰かに教えてもらったのでもないの なぜなら、彼は ——天王寺瑚太朗、瑚太

無理がある、 いたのとはずいぶん違う調子に思える。それだけでも、ポチが瑚太朗君だというのは なく、もしかしたらアウロラかなにかの悪戯に過ぎないのかも知れない。 太朗だということは、ただあたしがそうと分かるだけで、 そもそも、 それにここでは、瑚太朗君の名前はあくまでもポチだ。 のかも知れない。 瑚太朗君が「コトリ」とあたしを呼ぶ声は、瑚太朗君があたしを呼んで 何ら確たる証拠があるでも 瑚太朗君の名前が天王寺瑚

そを心配しだしたとしても。他の誰が冗談だろうとあざ笑い、他のポチが、瑚太朗君だということを。でも、あたしは確かに、わかるのだ。

みそを心配しだしたとしても。 それは確かなことなのだ。 他の誰もが妄想と断じても、あるいはあたしの脳

リボンで結ばれたあたしと瑚太朗君のあいだには、いつもアウロラのそよ風が吹いて いる。彼が近づいてくれば、その風がざわめくのがわかるのだ。 ヒナギクの丘にアウロラの風が揺れ、あたしは瑚太朗君がやってきたことを知った。

「ここにいたのか」

「おはよう、ポチ。どうしたの、こんな朝早くから」

「コトリこそ、学校はどうしたんだ」

「うへへ。サボり」

空を飛んで?」 「よくないぞ、それは。送っていこうか?」 やれやれ、と瑚太朗君は肩をすくめた。

なら、それは当たり前のように当たり前のことだ。 当たり前だろう」 当たり前。そう、魔物――外宇宙さえ越えていく超長距離移動の能力を持った魔物 分かってはいる、のだ。

「……ねえ、ポチ」

「学校いこ。歩いて」 「なんです?」

はあ?」 どうして、と顔が問う。

'歩きたい気分なの」

「しかたがない、了解した、コトリ」 瑚太朗君は少し迷ったようだったけど、 結局は苦笑いで頷いた。

うん!」

いつも瑚太朗君は優しい。

んだけれど。 だれにでも、 じゃないといい。

今度は物理的な春の風が吹いた。

急いで歩けば二時間目には間に合うかも知れないけれど、でも今日は、できるだけ 冬は終わりつつある。

ゆっくり歩いていきたい。 こんな時間が、いつまでも続くわけではない。

それは分かっているけれど。

窓の外には、まんまるな月が浮かんでいる。 西の空に傾きつつあるが、 明け方

と言うにはまだまだ早い時間だった。

夢をみた、気がして、ベッドから半身を起こし、ぼんやりとした目をこすった。

どんな夢なのか、覚えていなかった。

ろげだ。そもそも、 収穫祭のような場所を、二人で歩いていたような気もするけれど、その風景はおぼ ただ、瑚太朗君が隣にいた感覚だけは、はっきりとわかる。 その約束は、ついに果たされないまま、あたしと瑚太朗君は別れたのだ。 あたしは瑚太朗君と収穫祭に行ったことはない。

瑚太朗君とあたしは、七年以上に、森の中ですこしだけ---すれ違っただけの関係

瑚太朗君のことを思いだすたびに、不思議だった。

だった。

だった。 どちらかというとそりがあわず、時に殺伐ともするような、うまくいかない関係 最後には、両親を『殺されて』。

最後にあたしが言い放った言葉だ。『あんたなんか嫌い。死んじゃえばいい!』

も――余りにも切なく、密やかで、激しかった。 いた感情は、その断片があたし自身のなかにあるとは到底考えられず、しかし余りに それなのにもかかわらず、この気持ちは、なんだろう。夢のなかであたしが抱いて

あるいは、『契約』にともなう副次的な勘違い、なのだろうか。

そんなことを思ってしまうほど、この思いは場違いで、そして深くあたしの心に刻

そう。 端的に、 あたしは -瑚太朗君に恋心を抱いていたのだ。

み込まれていた。

もしかすると、この夢は ――あたしの願望なのかも知れない。

遠い昔の約束の通りに。 今度こそ、瑚太朗君とふたりで、収穫祭を目一杯に楽しみたい、

それを誰にも言うこともできず。

ましてや瑚太朗君本人に言うことはできず。

に思う。 その激しい炎を内に秘めたまま、夢の中のあたしは、ただ静かに笑っていた、よう

「瑚太朗君……」

迷い、願い、不安、望み……いろいろなものを込めて、あたしはそう呟いた。

今、その名前で彼を呼ぶことは、叶わな

ただ、逢いたいと思った。そう考えると心が震えた。

(『機構』に行ってみようかな……)

覚めやらぬ心は、そんなことを思っていた。

ない。 説明もいいわけもない、おそらくは極めて原始的な、 それは欲望だったのかも知れ



現だった。 何年か前のことだった。その引き金になったのが 統合当時は、単に『両組織同盟』と呼ばれていたのが、今の名前に改組されたのが、 ――他の誰でもない、瑚太朗君の出

とうはあたしたち(つまり、 瑚太朗君のマスターである、という理由で、 オカ研の、という意味だ)五人でひとりのマスターにな 機構ではあたしは顔パスだった。

ところに収斂していき、瑚太朗君が召喚された三週間後にはもう、瑚太朗君の使役は、 るはずだったのだが、マスターの力はなぜだか――なぜだか、だ――徐々にあたしの あたしにしかできないこと、になっていた。 そして――おそらくは、これは偶然ではあるまい ポチが瑚太朗君だと『わかっ

た』のも、まさにその三週間のできごとだったのだ。

かしたら、 なに高い構造物ではないから、『変化』のあとでも再利用されているのだ。それはもし 今はもう住む人もいないけど(誰があの階段を歩いて登る?)、マーテル会本部はそん 時あたしも一度だけ両親に連れられてきたことがある。まわりの古い高層ビルには、 している。 機構本部の建物は、植物型の魔物に覆われた、コンクリート製のピラミッドの形を 『変化』以前は『マーテル会』、ガイアの渉外団体の本部だった場所で、当 並び立つ墓碑のなかの、ちいさな墓守小屋のようなものなのかも知れない

瑚太朗君は、 機構の地下ホールの巨大な空間のまんなかで窮屈そうに枝葉を広げて

「もうここもずいぶん狭いねえ」

情を暗くした。

にひとっ飛びに飛ぶ。かつん、と靴が小気味いい音を立てた。 するりと枝葉を体にしまうと、瑚太朗君は床を蹴り、ホールの入り口のあたしの前

コトリか」

「上のホールの頃はよかった。この格好になればふかふかの椅子に座れる」

「コトリはマスターだ。マスターに邪魔もなにもあるか」 「ここは不粋さねえ……邪魔しちゃった?」

「へへえ……」

にへら、と笑ってみせる。ずきり、と心臓のあたりが痛む。

と、

瑚太朗君はふと表

「……コトリ、何か気に障ったか?」

――あたしたちは、赤いリボンで繋がっているのだ。

深い、

深いところまで。

「それならいいが……『塔』にでも登るか?」

「ポチは気にしなくていいよ。あんがと」

「うんうん、そうしよう。今日は遠くまで見えそうだ」

⁻ううん、いいの。行くときは自分の足で行くんさ」 見たいものがあるなら連れていくぞ」

111 「本当に遠いところに行くときは、ね!」 "それじゃ、こっちが形無しだ」



を越え、遠くには海すら見え、夜になると星々のきらめきがすこしだけ近くに見える。 ドのうえにそびえ立っている。巨大な墓石たちよりもさらに高い『塔』からは、 安定して投入するのが難しかったらしい。今では機構本部のシンボルとしてピラミッ いた、大樹型の魔物だ。一応、星間航行を目指してはいたらしいけれど、静止軌道すら 『塔』は、瑚太朗君には全く程遠いものの、昔の『機構』……というかガイアが作って バスケットを開け、ポットのお湯でお茶を淹れる。サンドイッチとあわせて、ピク 山々

「まあたお世辞言っちゃって」「美味しいな、今日も」

ニック。

「ああ、あの……激辛パフェ……」 「嘘をつく必要はない。このあいだの食堂のパフェはひどかった」

たちはやちゃんが目を回していた。 ルチアはなぜか好物なのだけれど、ほんとにあれだけは理解できない。一口もらっ

「あれよりは、全然おいしいぞ」

あんさん、比較対象がおかしいよ。プリプリしちゃうよ」

ちは繋がっているのだ。 冗談を交えながら、それでも瑚太朗君が嘘をついていないことはわかる。 あたした

.....ふと、

こんなふうに『瑚太朗君』になにか食べてもらったこと、あったのかな、と考える。

『記憶』にはない。

もあった。 当時の記憶はひどく孤独で、あたしは独りで、最後まで独りで抱え込んでいたもの とするなら、なかったのだろう。

瑚太朗君に話をすることができないまま、世界は終わってしまったのだ。 そして今、瑚太朗君はまたこんなに近くに、でも星々ほども遠くにいる。

このまま、

瑚太朗君は『舟』になって……

あたしの気持ちを知ってか知らずか。

瑚太朗君はサンドイッチを食べ終え、げっぷをすると、ごろりとあたしの横に寝転 いや、良くも悪しくも感覚が伝わらないはずはないのだけれど……

113 「いい天気だな、 コトリ」

「そう……だね。うん」

瑚太朗君は『舟』として。 でも、遠くない未来、あたしたちは、 空の彼方には太陽が高く輝いていて、 まるで瑚太朗君の真似をするように、 あの太陽のもとを離れて、遠く旅立つのだ。 あたしもまた瑚太朗君の横に寝転がった。 あたしと瑚太朗君を優しく照らしている。

あたしはその、『操舵手』として。



「はい。ポチは――瑚太朗君、だと思います」 アンティークショップ・フォレストのマスター、今宮さんは、真顔でぼそりと呟いた。 天王寺、だって?」

の証明だった。 たしのマグカップからたちのぼる湯気と、時計の針の音だけが、時が過ぎていくこと 今宮さんは言葉を失った。沈黙がテーブルを包み、今宮さんのコーヒーカップとあ

「そいつは……」

七年前のあの事件のあと、あたしはお母さん――当時は西九条先生、と呼んでいた 今宮さん 瑚太朗君のことを話したことがある。

た世界で、もう秘密にすべきものなど、なにもなかった。だから、瑚太朗君のことも、 **。鍵』のことも話した。打ち明けた、というより、安堵のあまりすべてを吐きだしたく**

けれど――に身の上話をした。なにもかもが崩壊して、なにもかもが変わってしまっ

という以上のことは、なにも言わなかったけれど、なにか特別な関係にあったことは なったのだと思う。 偶然にも、お母さんは、天王寺瑚太朗、という名前を知っていた。昔の知り合い、

だちのような たように見えた。それから、なんだか、ひどく納得したような、諦めのような、いら て会ったのはこのフォレストだ。当時は休業中で、なんでも今宮さんの知り合いから ない理由はなかった。今宮さんもまた、天王寺瑚太朗、という名前にいくらか動揺し た身の上話をした。真摯に聞いてくれたし、なによりお母さんの紹介なのだ。話をし 小さなあたしにも分かった。今宮さんに引き合わされたのはそのあとで、 ――深い深い息を吐いたのを覚えている。補足すると、今宮さんに初め あたしはま

神戸小鳥の旅路

115 うなふうではなかったし、それに、 あまりにも変わってしまった。あたしたちは新しい生活で忙殺されていたし、 今宮さんが瑚太朗君とどんな関係だったのかは、詳しく聞いてはいない。 瑚太朗君はどこかにいってしまっていて、 話したそ 世界は はっき

引き継いだのだと、当時聞

いた記憶がある。

り言ってしまえば、過ぎたことに関わっている余裕はなかったのだ。

「……一応訊くけど、根拠は?」

「『マスター』として? なにかあいつから、情報みたいなものが感じられた?」 「わからないです。でも、そう感じるんです」

「妖気残いう。こう。可り兌引しかも知れない。無意識には」

「無意識かあ。そりゃ何の説明にもならないなあ」

投げやりに言うと、肩をすくめた。

あこしり言葉こ、うら「でも……」

あたしの言葉に、ちらり、と今宮さんが眉を上げた。

「……どういうことだよ、それは」

「最近、瑚太朗君が夢に出てくるんです」

「なんだかよくわからないんですけど、あたしと瑚太朗君が……こう」

と、今宮さんが面白いおもちゃでも見つけたような顔をした。

「ふしだらNGです!」「なんだ、エロい夢か?」

でも、近いんだろ」

「へえ」

信じたか信じていないか、今宮さんはへらへらと笑った。

「たぶん収穫祭とか、ふたりで。それだけです。ふしだらな点は一切ない」

へいへい」

「いやあ、身持ちの堅い嬢ちゃんでもそういう夢を見るわけだ」

゙あんまり……よくわからないですけど」

「まあ、いいこった。人間っていっても、生き物だからなあ」 言い方はなんだか投げやりにも聞こえたけれど、言葉の調子はひどく柔らかかった。

なにもなかったのか、それは知らない。 そういえば、今宮さんのコイバナは、ついぞ聞いたことがない。なにかあったのか、

嬢ちゃん、あんた――天王寺のことが、好きなんだな」 あたしの勝手な想像を知ってか知らずか、今宮さんは、ふと相好を崩した。

「……そんなはず、ないんですけどね」

肯定、である。

それでもいい、と思っていた。 瑚太朗君がどんなひとだったのか、その多くをあたしは知らないままだ。

だから、あたしは、意を決して口を開いた。理由は分からないけれど、心が震える。でも、瑚太朗君は再びあたしの目の前に現れた。

「教えてもらえませんか、瑚太朗君のこと」

曜 日の気怠い朝のことだった。 機構の伝書リーフバードが今宮さんの手紙をもってきたのは、それから数日後の土

に、 機構本部のピラミッドとは離れた、 その建物はあった。 旧風祭高速道路中央環状線、 東インターの近く

なごく一部に過ぎないだろう。今ではもう完全に機能を停止しているとはいえ、かつ ては科学技術の粋を尽くして異物を排除していたであろうそれは、言うまでもなく要 いた。その廊下のここそこに、ぎらりと光るレンズや黒々とした銃口が見え隠れして あたしは、こわごわとあたりを見回しながら、今宮さんの後をついて廊下を歩いて もちろん、あたしの目に見えているのは、全体からしたら、どうでもいいよう

れる。そんなにセキュリティレベルは高くないからな」 「大丈夫だって。こいつらは完全に死んでるし、何かあっても俺が一緒なら無事に通

この建物の一番奥に伺うのは、どうやら遠慮した方がよさそうだった。

られ、比喩ではなく迷路のような空間だった。そのスチールラックのほとんどが、 も言うべき空間だった。体育館を軽くしのぐ巨大な地下空間に所狭しとスチールラッ クが並べられ、その間を右に左にキャットウォークが走り、梯子があちこちに立てかけ の資料やら段ボール箱やらで埋め尽くされていた。 今宮さんに連れられてたどり着いたのは、そう、一番近い表現をするなら、書庫、と

科学技術文明の遺産だ。段ボール箱。

ここの管理のことだろうか。 魔物を使えばいい、と思うだろ」

まさか。

「自分で探すんですか!?」

まじか、と顔がこわばるのが自分でもわかる。「セキュリティ上な」

のか、もう誰も、ほとんどわからない……ついてこられるか?」 「ま、俺はごく一部の資料の場所を抑えてるだけだけどな。どんな資料がどこにある

森の遊びに比べれば、大したことはない。ルートさえ分かっているなら。 あたしはこくんと頷いた。

キャットウォークや梯子が所々崩落しているのを見ながら考える。

「それならよし」

今宮さんが手近な梯子に腕を伸ばした。



して、位置感覚をとうとう完全に失った頃。すっ……と今宮さんが足を止めた。 梯子を幾度か登り、キャットウォークを右に折れ左に折れ、何度か梯子を下りさえ

「今宮さん?」

一ここだ」

取り出した。 言いながら右のスチールラックの、少し上の棚に手を伸ばし、ひとつのファイルを

そして、キャットウォークに座り込む。

座んな、お嬢ちゃん」

は考えないことにした。 促されて、今宮さんの隣に腰を下ろした。ロングスカートでよかった。 洗濯のこと

そして、

「ほれ」

あたしは。

今宮さんは、手にしたファイルを無造作にあたしに差し出した。

反射的に受け取って、目を落とし――真っ先に飛び込んできたものに、 その が顔に、

「……瑚太朗君?」 声が震えたのが、 自分でもわかった。

写真のなかにいたのは、 七年前、『鍵』をめぐる闘争の中にいた、あの危ういくらいに孤高な瑚太朗君だった。 間違えるはずもない、瑚太朗君そのひとだった。

場所は、森だった。おそらくは深い森だ。 今ではもう自分の記憶の中にしかない姿が、 目の前の写真にあった。

安くはなさそうなスーツを着ているが、手入れをする余裕もないのだろう。 辺りを警戒するように眼光は鋭い。 まった

くスマートに見えない。 そんなところが、確かに瑚太朗君だった。

そして、瑚太朗君の隣に、小さな女の子の姿が映っていた。

言うまでもなく、他でもなく。

「あたし、ですね」

今宮さんは頷いた。

やはり――あたしが話す前から、 知られていたのだ。

あたしと、瑚太朗君の関係は。

「悪かったな、嬢ちゃんのことは、色々探っていた。なんなら――殺す、 あるいは、あたしと『鍵』の関係も。

そうだろう、と思う。 今宮さんの口調は、懺悔、の成分を含んでいるように聞こえた。

予定もあった」

でもそれは、あたしにだってなんとなく分かっていたことなのだ。

「……気にしないでください。あたしが今宮さんの立場なら、そうします」

歪めて、そして――話しだした。 今度はいつもの軽薄さでその一言を口にすると――ふ、と今宮さんが皮肉げに唇を 有難いね、理解して貰えて」 アンとなる――」

アンにはいない。もちろん、ガイアにもだ」 「天王寺瑚太朗。享年二十六歳。ただし、天王寺が死んだのを確認した奴は、ガーディ ああ。

やはり、瑚太朗君は死んでいた。 あの争いのあとで、姿を見なくなったのだ。

これもまた、あるいは――と、想像はしていたけれど。

ずしん、と胸に重いものを感じる。

「十七歳のとき、バイアーン帯剣緑地騎士団団長江坂宗源に適性を見出され、ガーディ

記録を読み上げている、わけではなさそうだった。 あたしの顔色を伺うこともせず、今宮さんは淡々と 語りだした。

だが、なにかの詩を暗唱するかのようだ。

目の前に紙があるでもない。

心の奥深くに刻み込まれている詩を。

た助けもした――」 中東ではいくつかの戦闘区域を転戦し、 実戦経験を積んだ。 人を殺しもし、

ま

あたしは、ようやく知りつつあった。

今宮さんの説明と瑚太朗君のイメージは、ぴたりと一致した。 あの時代の、瑚太朗君との僅かな邂逅の裏で、いったい何が起こっていたのかを。

『鍵』のために奔走していた瑚太朗君の姿。

そして、あたしの記憶の中にだけいる、瑚太朗君の姿もまた。 何かのために動くことができるのだ。

瑚太朗君という男の子は。 状況次第で、誰かのために、何か



明……ここで、記録は終わっている」 最終的にガーディアンを離反したものと認定される。記録上は、 戦闘中行方不

高い天井の向こう、空の向こうに目を向けるようにして。 あたしは長く長く息を吐いた。 あるいは、ずっと昔の、瑚太朗君のことを思いだしているのかもしれなかった。 そして、最後まで語り終えると、今宮さんは、ひょいと上のほうを見やった。

だった。 ため息とは違うが、長い間抱えていたものを吐きだしているような、ひどく遠い息

は、『鍵』を殺して、自分が『舟』になった――『鍵』の意志を継ぐために、な」 の『ポチ』が天王寺瑚太朗だっていうなら、ある意味で――つじつまは合う。あいつ そう。 天王寺はたぶん、七年前に死んだ。もしかすると、『鍵』を殺してる。そして――あ

自分のためでなく、誰かのために。 瑚太朗君ならきっと、そうするだろう。

ちゃんの『記憶』 を無視できない。なにしろ嬢ちゃんは『舟』の『操舵手』――あいつ のマスターなんだからな。俺たちが知らない何かがあっても、全然不思議なことじゃ 「どこにも確証はない。根拠は嬢ちゃんの感覚だけ、じゃあな……だが、俺はその嬢

再度、頷く。

「そう思います」 「ずいぶんはっきりと言うな」

確信がありますから」

そうか」 なぜだか、今宮さんはにやりと笑った。

125 それは踏み込むべきではないような気もする。 今宮さんと瑚太朗君の関係がどんなものだったか、聞きたくはあるけれど、でも、

「……しかしまあ、嬢ちゃんのことだから、何か頭がおかしくなったとかだとかじゃ だから、その表情は、好意的に捉えるに留めておくことにした。

ないと思うけどさ。ちゃんと学園の定期検診受けときなよ?」 「このあいだ、ちょっと最近体調悪いーって言って、検査受けました」

「そっか。ならよかった。コイバナは精神力消耗するからな」 「元気元気。めっちゃ元気」 「 で ?

「それは……ありがとうございます。それとごめんなさい、ワケのわからない話し 「大丈夫大丈夫。軽く見やしないって。大切なことだぜ、そういうのは」

「コイバナって……別にそんな」

ちゃって」

「いいってことよ。なあ――」 ふと、今宮さんが遠い目をした。

くらいのことはできるんだ。あの時――」 「俺たちだって、あの頃の俺たちじゃない。 今の俺たちなら、嬢ちゃんの相談にのる

目を、とじた。

てどんな人間だったのか、話してやることもできる。元ガイアの連中でも、内々の話 「――ガイアとガーディアンのあいだに何が起こっていたのか、天王寺が俺たちにとっ

くさんあるだろう。だから……一人で抱えなさんなよ」 が出来る奴はいる。きっと、俺たち元ガーディアンの目からは見えないことだって、

た

「はい」

いつも飄々としている今宮さんだが、言葉の最後は、少しだけ優しい感じに聞こ

昔の瑚太朗君のことは、もっと知りたいと思う。 今の瑚太朗君、つまりポチ――『舟』のため、もあるのだろうが、心強くもあった。

それで瑚太朗君に近づけるなら、あたしは知りたい。

ポチが瑚太朗君だとして。 どうしてだか、胸騒ぎがした。

あの七年前の瑚太朗君の関係が、かたちをかえて今のあたしと瑚太朗君の関係になっ

それだけは、説明も仮説も、まったくないままなのだ。 それなら、このあたしの――恋は、いったい何なのか? ているとして。



を僅かに上回り、 | |山 「々が紅く染まる季節、空がひどく高いその日、瑚太朗君の全幅は二○○k 静止軌道上の長距離遠隔リーフバードに繋げると、その姿はだいた

*

い四国と同じくらいの大きさに見えた。

たしは現実に戻ってきた。 夢と現の境に朝日が差し、 意識が水面に顔を出す。 チチチ……と朝の鳥が鳴き、

そんな予感がした。 きている。 る。鼓動が、心なしか早い。朝起きたときの奇妙な切なさは、 が影響を受けているのか。それはどちらでもいいのだが、あたしは掌を胸に当ててみ 呼び起こしているのか。あるいはもしかしたら、ほんとうは逆で、夢が先にあって心 く甘かった。 夢は未だに具体性を伴わず、ふわふわとしてとらえどころがなく、それでいてひど 「何を意味しているのか、まったく分からない。が、なにかが起こるような、 あたしが抱いている感情が、瑚太朗君を好きだという感情がそんな夢を 日増しに大きくなって

隣を歩く瑚太朗君の姿は、このあいだの第十三次船体拡散実験かまるで嘘のように、

ドやリーフバードの編隊飛行、ささやかな花火は上がったけれど、採れたての野菜や 収穫祭は、当たり前だけれど、あたしのよく知るいつもの収穫祭で、楽隊のパレー

ごく普通の男の子そのものだった。

瑚太朗君とふたり、という意味では、文字通りに、夢にまで見た収穫祭、とも言える。 いつもより少しばかり豪勢な料理が広場に並ぶだけの、いつもの収穫祭だった。

「コトリ、すごいものだなあ、収穫祭というのは」

リ」とあたしを呼ぶ声は、やっぱり昔の瑚太朗君の声とは違っていて、それがあたし の胸のどこか遠いところをちくりと刺した。 「でしょう? 一年で一番にぎやかなお祭りなのさ」 もちろん、楽しまない手はないので、精一杯楽しむのだ。 でも、 瑚太朗君の

「あの人だかりはなんだ、コトリ」 「うーん、なんだろうねえ」

と、人ごみの中から、ぽーんとバトンのようなものが投げあげられた。

「ダイドウゲイニン? なんだ、それは

ありゃ、大道芸人だねえ」

゙そりゃ、ボールとか箱とか輪っかとかを、

その……」

あれを言葉で説明するのは無理がある。

見たほうが早いよ、

瑚太朗君!」

13

せた。 「うお!?」 腕をひっつかんで歩き出すと、不意をつかれたか、瑚太朗君は二三歩よろけてみ

「ほら、早く早く!」「やるな、コトリ……」

――ふと見ると。

瑚太朗君は、不敵な笑顔と、わずかな悔しさの入り交じった表情をしていた。

珍しい、表情だった。

•

•

で一息ついた。 大道芸人の出し物が一段落して、あたしたちは人混みを抜け出すと、手近なベンチ

「すごかったねえ、あのひと」

「ああ。魔物でもなく、能力者でもない、人間。なかなかやるものだ」 「こた……ポチに言われると嫌味だよ」

したらしい。 瑚太朗君は一瞬、あたしの失言を気にしたようだったけれど、どうやら流すことに

「なんでもないよ」

あたしは余程、うまく取り繕っているんだろうか。特に変わった風もなく、あたしの言葉に応えた。「俺は魔物だからな。人間の基準を理解はするが」

こうして歩いていると、まるで普通のひとみたいなのに。 ――自分は魔物だ、と断言されるのは、やはり堪える。

どうした、コトリ」 ……どうやら、心配させてしまったらしい。失敗だ。

――ふと鼻をかすめる匂いがあった。ひょい、とベンチから立ち上がる。

瑚太朗君が人外じみたスピードで反応した。

あれか」

思わず、鼻がひくついた。

のままの、椅子とも言えない椅子。それらが囲んでいるのは、小さなバーベキューセッ 目線の先には、屋台がひとつ。いくつかの質素な木製の丸テーブルに、丸太の形そ あの網の下では、きっと炭火があかあかと燃えているに違いない。

年の男性が、その野菜達にハケでなにかを塗っている。 そして、網の上で焼かれているのは、収穫祭の主人公、とれたての野菜たちだ。

壮

「オレには分からないが、 「醤油かな?」 コトリがそうだと言うなら、そうだろう」

「多分ね」

これでも、料理には多少覚えがある。



晴れ渡った空に、秋の少し冷たい風が吹く。 ふたり、瑚太朗君とならんで、焼きトウモロコシの屋台のほうへ歩く。

あとしばらくすれば、もうそれは木枯らしとなり、枯れ葉が頭上を舞うだろう。

食欲をそそる、香ばしい匂いは、しかし、あたしのどこか遠い記憶のようなものを、 ――妙な気分だった。

まるで針で優しく突くかのように刺激した。

あるいは、瑚太朗君とならんで――いつか―― のかも知れない。 -焼きトウモロコシを食べたことがあ

明確な記憶には、ない。

「らっしゃい、嬢ちゃん!」

あたしたちを迎えたのは、どこか見覚えのある、ひげ面のおじさんだった。

顔をした――ようにも思えた。 おじさんはあたしたちをちらと見ると、ほんの僅かだけ、 妙に優しげな、 寂しげな

が、おじさんはすぐに、がはは、と笑うと、

「あ、はい。お願いします」「一本ずつでいいか?」

新聞紙でくるまれたそれはずいぶんと小さく見えたが、それはおじさんの手の大き ひょいひょいと火箸でふたつ、トウモロコシをつまみあげた。

をサ双分に、思ってこりてきさのせいだったらしい。

「おいしそうだな」
受け取ると、思ったより大きくて。

「いい顔をするじゃねえか、坊主。 熱いから気をつけるんだぞ」

「分かっている」

律儀にも、手に持ったトウモロコシを、ふうふう、と吹いてみせた。

あたしたちは、バーベキューセットの近くの小椅子に腰掛けて、焼きトウモロコシ

____ヽ、、g、ぎを覗き込んだ。

---いい、匂いだ。

どこか懐かしいそれを、思う存分に嗅ぐ。

今の瑚太朗君の感覚器官でも、あたしと同じように、これをいい匂いと感じるのだ 見ると、瑚太朗君もあたしをまねて、同じことをしていた。

ろうか。

願いにも似たことを思う。そうであってほしい。

周しい当位プロスストン

それから、あたしたちは、まるで示し合わせたように、同時に焼きトウモロコシに

「旨い!」

かぶりつくなり瑚太朗君は、そう一言叫んだ。

「ごうさう、言ゝうしは言ゝ「ポチ、はしたないよ」

違和感があった。 「でもさあ、旨いもんは旨いだろ」

昔、あたしが知っていた瑚太朗君とも、違って、 その口調が、いつもの瑚太朗君と違っている、ように思えた。

まるで、それは、

『いやあ、それがちょっとファン活動でね』『なあ、小鳥さんよ。放課後暇か?』

いつも、

優しげで、少し斜に構えて、

いつか夢で聞いた、瑚太朗君の口調のようで。『そいつは残念だな』

『今日一番のアタリだな!』 『ほんとうにおいしそうに食べるねえ、 瑚太朗君は』

『いやいや小鳥さん、このタレは人類の叡智の結晶ですぜ』 あるいはそれは、この焼きトウモロコシの匂いが、 あたしの脳になにか作用して

るだけかも知れないのだけれど。

でも、確かに。

それは、瑚太朗君の声だった。あたしは、ようやく気づいた。「どうしたんだ、小鳥……おい!?」

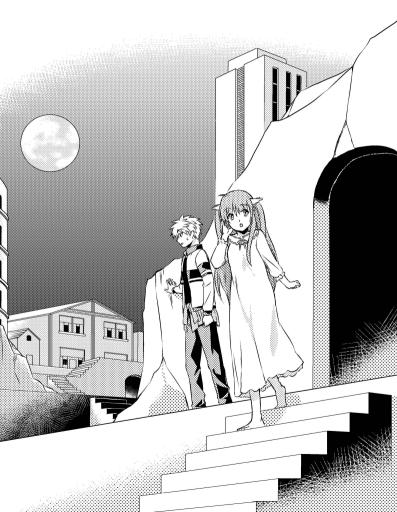
ぎ)。 でも懐かしい、

あたしの知らない、

あたしの瑚太朗君の声だったのだ。

確かに、紛れもなく、でも、ずっとあたしの隣にいてくれた、

スタリィ・ムーニィ・ナイト・フライト



「うおおおお暇だああああああああ「瑚太朗うるさいです」 魂の叫びは一蹴されて、どっか遠くの方に飛んでいって消えた。

「はあ……」

「そんなこと言ったって、一体いつまでここに閉じこめられてればいいんだよ……」 「うちに来てから、まだ三日ですよ。まったく、先が思いやられます」

風祭の奥深い森の、 あの事件から、三日が過ぎていた。

「殺されたいの?」

'とんでもない!」

たら俺だってここに住んでるようなもんだから同じか。とにかく外に出られないんだ ― ちはやんちに引き籠もるのが最善策というわけだった。要するに軟禁だ。 ちはやは自分の家なんだから軟禁とは言わないかも知れないけど――いや、それ言っ 会長の端的な表現に、俺も端的に答えた。そうすると答えはひとつ。安全なところ

「せっかくだから、のんびりしたらいいんですよー」 ちはやはアーモンドチョコをぽいと口に放り込んで、少年マンガのページを繰った。

からこれは軟禁。今決めた!

リビングのテーブルには、菓子袋が山積みだ。 オカ研で見慣れた光景だけど、

日に

日に量が増えている気がする。

「? なんですそれ?」

「おまえは魔人のひとか」

「なんでもチョコレートにして食べちゃうんだ」

「たしかにチョコレート食べてますけどー」

なんだかいわれなき中傷をされたような顔をする。たしかに、

魔神のひとほど太っ

俺は」

ちゃいない。燃焼効率の問題……だったか。 「のんびりっつったって、一体どんだけのんびりしてりゃいいのよ、

「そのあげぱんってのは、そんなに魅力的なのか?」

「ううん……それは私に聞かれても……」

「そりゃあもう!」 「いやそのあげぱんの話じゃない」

「ああ、『鍵』のことですか」 ぽん、と手を打ち合わせて納得の仕草。

「給食当番は、そう思ってるみたいですね」 ·そうそう、そっちのあげぱん」

会長は

朱音さんも、たぶん」

「そーかい……」 世界の運命を握るあげぱんを巡って、給食当番と争奪戦。おかげで一回死にかけた。

「我々だって好きでやっているわけではありませんよ」

「勘弁してほしいよなぁ……」

いいながら部屋に入ってきたのは咲夜だった。

うにかしようとする敵や給食当番がいるから、我々は仕方なくバランスを取っている のです」 「あげぱんは、他の何にもかかわらず、ただあげぱんであればいいのです。それをど

えはどうなんだちはや……と横顔を盗み見ると、相変わらずもぐもぐしている。あげ 「わけわからん」 実際ほとんどなにも聞いてないし。それとあげぱん言うな緊張感が薄れる。この喩

゙まあいずれにせよ、何も起こらずに穏便に済むならそれが一番いいのですが」

ぱんか……。

「騒ぎを起こしても仕方がないってか」

一まあ、正論だ」 ·疑惑や憶測が加熱して、火がついてしまえば、どうにもなりませんから」

もなりますしね」 「ですから、もう少し息を潜めていていただけると助かります。 ちはやさんのために

「承知の上で言いました」「狡いぜ咲夜」

にこやかに笑いやがる。くそう。「海矢の」で言いました」

*

「まあそんなわけで、瑚太朗君ご所望のものを入手してきました」

「うおっ! マジか!」 咲夜はどこからともなく紙袋を取り出した。おもちゃ屋のだ。

してもらえるならそれが最善かと」 「現実見えてない太朗君に暴れられても困りますので。仮想世界に引き籠もって満足

線ゲーム機だ。早速箱を開けて本体を取り出す。なんだか懐かしい。 ツッコミながらしかし体は自動的に動く。紙袋を開けると、そこにあるのは某売れ

酷い言われようだ!」

「ああ、昔は結構やった」 「瑚太朗、ゲームするんです?」

連ジとか。

店主に相談して、いいものを見繕ってもらいました」 「で、咲夜、ソフトは?」 「あまり血なまぐさいモノはちはやさんの教育によくありませんからね。 顔なじみの

ズのスタッフが手がけた、一風変わったアクションゲームだった。

これもどこからともなく、パッケージをひとつ。それは、某有名ハリネズミシリー

「おお……噂には聞いたことがあるけど、やったことはないな……」

「そりゃそうだ。とにかく恩に着るぜ!」 「ものはためし、ですよ、瑚太朗君」

「くれぐれも寝不足には注意してくださいよ。ちはやさんの肌に障ります」

咲夜は言うと部屋を出て行く。 相変わらず、ちはやのこととなると気が回るというかなんというか。たしかにちは

で、その当のお嬢様はというと、ゲーム機をしげしげと眺めている。

肌は綺麗だよなあ。

「これがゲーム機なんです?」 「見たことないのか……あ、精密機器だからな! 不用意に触るなよ!」

`なんですそれっ!」 反論しつつ、ちはやは手を引っ込める。自覚はあるらしい。

白黄色を間違えないからラクでいい。 ム機を持っていそいそと近づいて、ケーブルを繋げてセットアップ。最近のヤツは、赤 リビングルームの隅っこには、ちゃんと最新型の薄型テレビが備え付けてあった。ゲー ちはやんちは殺人事件でも起きそうな洋館だけど、それなりに近代化はされている。

グ・デモだ。そのムービーに…… でもって電源を入れると、ちゃらーん、と音がしてゲームが始まった。オープニン

|へえ……|

ちはやが目を丸くして見入った。

蒼とした森を、純白の雪山を、雲ひとつない砂浜を、きらめく夜の街を――ちょっと かぶったおどけたキャラが、まるで踊るように空を舞い、飛んでいく。緑の渓谷を、鬱

おおらかなオーケストラを背景に、トランプのジョーカーみたいなツノつき帽子を

だけ皮肉げな、でも、屈託なく笑って、飛んでいた。 オープニング・デモは、そう長くはかからない。やがて画面はメニューに切り替

「なんか、いいですね……」 遠い声でちはやが言う。

「そうね」

いる。 俺はそれだけ返す。たしかに――咲夜のやつ、いいチョイスだ。さすが気が利いて

「そんじゃ、はじめますか、お嬢様」

言って、コントローラを手に取る。まずは二人プレイから。

二人プレイはすぐに終わった。

終わりを待たずして、無惨にも粉微塵に砕け散ったのだった。 あくまで一般人向けに作られているコントローラの片方は、

ステージーの一週目の

ちはや、ドン凹み。

| あうう…… |

「まあ、子供向けに作られてるからな……」

んだよね。 まうもんで。実際俺もやっちまったことがある。アナログスティックってすぐ壊れる フォローフォロー。一応最初に注意してはおいたけど、やっぱり白熱すると忘れち

「別のことやるか?」

「ううん……」

ちはやは名残惜しそうに画面のほうを見た。ゲームオーバーからのオープニング・

デモだ。それをしばらく眺めてちはや、ぱっとニコニコ笑顔になった。

「え、いいの?」

「瑚太朗がやってください」

「私は見てますから。それで十分楽しめそうです」

あー」 なるほど。さっきも夢中になってたもんな。それなら、いろんな風景を見せてあげ

「っしゃ、まかしときんさい」

るのが俺の仕事というわけだ。

「うん、期待してますよー」

「そんじゃ、ちはや攻略本担当な」期待ですか。うむ、ありがたいこったね。

「え、なんですそれ?」

「ドライブの道案内みたいなもんだ。ほれ」

わんね。 バーチャル・デート・フライトは一時間ほどで切り上げることになった。 ブツを手渡す。さすが咲夜、この状況までお見通しだったとしたら――いやあ、

敵

「ゲームは一日一時間ですよ、ちはやさん」 とは咲夜の談。ちはやの目を悪くするのは、俺も本意じゃない。 眼鏡は眼鏡で嫌い

スの気取ったヤツだ。 じゃないけど、それなら伊達眼鏡だっていいわけだし。邪道かな。 その日はそのまま夕飯と相成った。咲夜お手製のバッシュド・ビーフ。ハヤシライ

ごはんの横に、デミグラス・ソースをベースにしたルーがたっぷりとかけられてい

る。その上に、白い液体で絵文字の如き模様が描かれていた。

「生クリームですね。省略されることも多いですが、味がまろやかになりますので、 「咲夜さ、この白いのは何よ」

「そうなんです?」 「ハイソだ!」 当家では欠かさないようにしています」

「そりゃおまえ……というか、おまえの生活って、全体的にものすごくハイソだからな」

「よくわからないですけどー」

長の方が超常現象レベルで上か。 世間知らずのお嬢様ですな。怪力で大食いだけど。ついでにハイソっていうなら会

一なんのことです?」 「比較対象があの人だと、現実霞むよな……」

気に入った?」

いえ……いち市民のひとりごとです……」 小さな幸せに慣れておけってことだあよ、と小鳥の声がした。

あいつもどこにいるんだか。 食事が終わり、風呂をつかう(ちはやが最初、俺が最後だ)。部屋で一息ついてか もいちどリビングルームに戻ると、ちはやがテレビを見ていた。

珍しいなと思ったら――映っているのは、さっきのゲームのオープニング・デモだ。

画面から目を離して、ちはや。夢見るような目だ。「あ、瑚太朗」

「まあ、そうだな」

「……いいですよね、空を飛べて」

頷く。

「ああ、いますね」「そういや魔物でさ、空を飛ぶやつ、いるじゃん」

「ああゝうりっこさ、乗ぇなヽ森で見たやつとか。

「ううん……」

元に指を当てて考える仕草。

風呂上がりの格好でされると、

効果はもう抜群だ。

「……あんまりないかもです。鳥だって背中に誰かを乗せて飛ばないですよね」 内心の悶絶を知ってか知らずか、ちはやが答える。

そりゃあそうだ」

「そんなもんか……」

魔物もおんなじです。 誰かを乗せるバランスで作るのは難しいと思います」

「いくつかあるかも知れませんけど、少ないでしょうね」

゚ひみつ道具みたいにはいかないか……」

「マンガじゃないんですから」 日本誕生。 。もしくは恐竜だったっけ。聞いてちはやが呆れ顔だ。

「そーらを自由にっ、飛ーびたーいなっ!」

「なんですかそれ。瑚太朗はばかですねえ」

そろそろ寝る時間ですよ」 ちはやが笑う。よし。

咲夜が好意的な口調で言った。



枕が変われば眠れないなんて神経質なタチじゃないけど、そんな日だってある。 夜は寝付けな

ひとつのイメージが脳裏を過ぎった。 ……夜、か。一体みんな、どこにいるんだろう。

風祭は、 夜空に沈んだ町並みを見下ろす。 ゆったりとした山地のただなかに拓かれた町だ。

でも、ほんものの闇夜でもない。都会のサーチライトも不夜城もない。

そのどこかに、みんな、いるのだ。ささやかな人間のささやかな灯りが、

ぽつぽつと浮かんでいる。

出来れば苦労はしない。 でも、少しくらい空に近づいてみたいもんだ。

ふと、思いついた。

空を自由に飛びたいな、

か

(屋根に登ってみようか……?)

廊下に出て、天井を見上げて歩いていく

裏に登る梯子に違いない。近くには小さな物入れがあって、 天井を見上げて歩いていくと、 四角い入口みたいなのがあった。 開けてみると案の定、 屋根 梯

子を引き出す鉤つき棒が入っていた。 |よっ……と|

目を細めて扉の掛け金に鉤を引っかける。入口が開いた。それから中の梯子を同じ

く棒で引っ張り出す。 「よし……」

れるかも知れないが、ここは入るなとは言われちゃいない。何とかなるだろう。 ギシ、ギシ……と少し軋む梯子を登って、屋根裏に這い登る。 棒を片付けて、梯子に手をかけ、足をかける。ちょっとした冒険気分。咲夜に怒ら

少し埃が舞う三角屋根の空間のさき、はっきりと光が差し込んでいる場所がある。

月明かりだ。あの窓から、外に出られるだろう。 ガラスの窓をひらいて半身を乗り出すと、そこは別世界だった。思ったよりもずっ

と明るい金色が、そらに輝いている。

「そっか、満月か、今日」 呟く。

満月は実に風情がいい。団子でも用意すべきだったかも知れない。 月が明るい日は、弱い星の輝きは薄れてしまう。天体観測には向かない夜だ。

と痛いかも…… バランスを崩さないように気をつけて、窓枠に足をかける。落ちたらさすがに、ちょっ 「ならいいですけど……」

瑚太朗?」

い、生きてますか!?」 うおっ!?」

ずるり、足が滑って、慌てて窓枠を掴む。

ああ、何とかな……」

「そんな顔しなさんな。落ちやしないって」 体勢を立て直し、声の主のほうを仰ぎ見た。 屋根の一番高いところに――ちはやがいた。

ちょっと安心の顔で、ちはやは座り直す。

「何見てるんです!?」 (サクランボ……) いや、言わないけど。ここで言ったらマジで命がない。

いやなんにも」 平静を装って屋根の傾斜を登り、 ちはやの横に腰掛けた。

へえ……」

眼下に見下ろす町並みは、静かな星空のようだった。二十世紀的な無愛想な街灯は、

の前に広がっていた。 この町にはない。すべてが自然に調和するように造られている。その穏やかな光が目

かで、赤い航空障害灯ばかりが明滅している。 いくつか建つ高層ビルも、窓の明かりは落とされるかブラインドがかけられている

「ちょっとしたもんだな、これは」

「えへへ、でしょう?」 ちはやは心なしか自慢気だ。坂の上、町一番の山の手に建つちはやの家だ。 眺めの

「こうなると、月見団子が欲しいところだな」

悪かろうはずがない。

「あ、食べます?」

「あるのかよ!」

積まれている。咲夜もなかなか芸が細かい。 突っ込みつつ差し出されただんごをひとつ摘む。ご丁寧にも三方にピラミッド型に

「……なかなか旨いな」

それ、私が作ったんですよ」

「まじか」

ーホントですって」

「参った。咲夜かと思った」

私だってやるときはやるんです」 ふふん、と胸をそらしてみせる。

そんな感じに、二人して月見団子をぱくついて、 お茶を啜る。

「ぷはー」

いくつかを胃に収め、

満足の意を示すと、ちはやがころころと笑う。

「なんだよ」

「いやあ、おじいちゃんみたいだなあと」 「月見団子にお茶とくれば、そうなるだろ」

「まあ、たまにはそんなのもいいですね」 これで縁側だったら完全にご隠居夫婦だ。

「……うむ。そんなのもいいな」

俺のくっくっという独り笑いに、ちはやがクエスチョンマークを浮かべた。

·そういえば、ちはやさ」

「おまえ、よくここに来るの?」 なんです?」

「屋根ですか?」

「たまに、です。星空とか夜景を見たくなったときに」

「転校してきて二ヶ月ないだろ」

「まあそれでも、ここにはたまに戻ってきますから」

「そういうことです」 月見団子と相似形の、あの緑のピラミッドは、明々と照らされてはいないものの、

「あー……ガイアの本拠地だもんなあ、風祭」

「昼はさすがに。人が見てますし」 「やっぱ夜か」

ひっそりとした灯りたちだけで十分にそれと判る威容を誇っている。

「そりゃそうか」 ぱんつも見えるしな。

俺は目の前の夜景に、視線を戻した。

「でも……そうだなあ」

「できればもっと、高いところから見てみたいなあ……」

ですよね……」

言うとちはやは立ち上がった。

「そんなんで変わるか? 視界」

「いえ、そうじゃなくって」 首を振って、こちらに手をさしのべた。

なんだかわからないうちに、俺はその手を取る。

え? 「つかまっててください」

首をねじって後ろを向く。

俺の返事を聞くか聞かないか……背後で、ばさり、

となにかが広がる音がした。

そこには――大きな大きな羽が―― なんだ……こりゃあ!? 広がっていた。

言葉が出ない。視線でちはやに説明を求めてみた。

[']ああ、これですか」

以心伝心!

ま、魔物!?」 魔物、です」

純白の鳥の羽-しげしげと俺は、 みたいに見える。が、ああ、そうか、 その羽を観察してみた。

と俺は腑に落ちた。

「これ……ちはやの髪飾りか」 そうだ。見覚えがあると思ったんだ。

「正解ですー」

「ちはやウイングは空を飛ぶ、ってわけだ」のんびりと言う。

「ちはやブースターはないですけどね」

「飛べますよ」「飛べるの?」

「どれくらいまで?」

首をひねる。そして、うん、と大きく頷く。「んー」

「試してみましょう!」 首をひねる。そして、うん、と大きく頷

足元には、穏やかで暖かな光をたたえる町並み。俺たちが飛び過ぎるごとに幾何学 遠くには、ゆるやかに連なる旧い山々。月明かりに燦々と照らされている。

俺はただただ、それらの万華鏡みたいな光に、うっとりと見とれるばかりだった。 頭上には、雲ひとつない満天の星空。南の高い空に、まんまるお月様が浮いている。 的に形を変える。

きれいですねー」 端的な言葉でちはやが表現した。

「そうだな……」

そういう素直な感想も素敵だ。美味しいものを食べたら美味しいって言えばいい。

きっと、ちはやならそうするだろう。

なるほど、そんなことも俺は忘れていたというわけか。

「うん、これは綺麗だ」 「どうしたんです?」 口調がすこし変わったのが自分でも判った。 ちはやがこちらの顔を覗き込む。

いや、だから綺麗だなと思ってさ」

?

「それはそうですよ。おいしいものはおいしいし、 「深く考えないでも、綺麗だ」 綺麗なものは綺麗です」

やっぱりそうくるか。もぐもぐ。

「特にどこっていうのはありませんけど」 「それでちはや、俺たちは一体どこに向かってるんだ?」

「それじゃ、ちょっと行ってみたいところがある」

俺は、少し離れた丘の上、見慣れた建物のほうを指さした。

ふわりとちはやは給水塔のてっぺんに降り立ち、俺もその横に着地した。

学校の屋上、普段は登ることができない給水塔だ。二人してその縁に腰掛けた。

「瑚太朗も地味ですねえ。登ろうと思えばいくらでも登れるじゃないですか」 一度登ってみたかったんだよな」

「そりゃそうだけど、見つかったら怒られる」

「あはは……」

微妙な顔でちはやが苦笑いする。

「そうなんです?」

くない」

「こちとら一応、平均的なガクセーさんで通してるんだ。あんまり突飛なことはした

「ちはやさ、自由人だよな」

「あんまり褒められてる気がしないです……」

「半分半分くらいかな。うらやましくもあるさ」

「私はそういうの、よく判りません」

「そうなん?」

「私、ガイアの魔物使いですから。空だって飛べちゃいますし」

フツーのひとは空とか飛べない。「あー、そりゃそうか……」

電柱とか振り回せない。

うなのかなーって思うようになりました」 「みたいです。今までは当たり前だって思ってましたけど、なんだかここにきて、そ 「ちはや、結構苦労人な」

-ここ? -

「ああ、オカ研です」

「なるほどね」

なんだ、結局あれか、 俺は内心、笑った。

「いや、さすがに誰もいないだろうし……でも会長がいたら大変だ」 「寄っていきます? オカ研」

似たもの同士……なのかも知れない。

「そんじゃ、どっか別の場所に行こうか」

「あー、そうですね。怒られるのはです」

立ち上がる。

別の場所って?」

「どこか行きたいところ、ないん?」 そうですねえ……」 ちはやは、空を見上げる。空を指さす。

つられて見上げる。その先には「?」

「ですっ!」

満面の笑みで頷いた。

*

の中にぼわりと光るひとつのかたまりになった。 超越しつつあった。 足元、風祭の町がどんどん小さくなっていく。個々の光がにじんで溶けて、やがて山 今までだって落ちたら洒落にならないとは思っていたけど、そろそろそんな高度を 地学の授業で詰め込んだ知識をひっ

「で、ちはやさん」

くり返す。そろそろ高度十キロ……成層圏だ。

「息、できるの、これ」「なんです?」

いいながらちはやは、羽をちょんちょんと触った。「この子は、そのあたり大丈夫らしいですー」

「……まあ、そのあたり大丈夫じゃなかったら、もうあの世行きだと思うけどな」 どういう構造なのか、ただの羽じゃあないらしい。

「そうなんです?」

「ですっ! 富士山で高山病になるだろ。あれ、 酸欠だからな」

「あー、なるほど。今、富士山より高いですね、私たち」

「そういえば、月ってどれくらい遠いんでしたっけ」 見りゃ判る」 っていうかエベレストより高い。あれ、酸素ボンベ担いで登るんだぜ。オマケに超

もいちど、頭の中をがさごそと探る。「あー」

「たしか、三十八万キロメートル」

「じゃあ、四分の一きてますね!」

「ええっ」 「三十八キロメートルじゃないぞ。三十八万キロメートルだ」

「めちゃく」がびーん。

「そりゃあなた、月だからねえ」「めちゃくちゃ遠いじゃないですかっ!」

ちはや、ちょっと腕を組んで唸る。 っていうか、三十八キロって隣町くらいだと思うんだけどな。

「うーん、もうちょっと頑張らなきゃですねー」

「もうちょっとって……どうするのよ」

加速、です!」 言うと、ちはやの羽が――広がった。広がったというより……まるで植物が枝を伸

ばすみたいに――巨大化している。

「おい、この魔物すごいな」

「そりゃあ、もともと恒星間航行用の魔物ですから」

「まじか!」 宇宙怪獣!

「なんだかよく判らないけどすごいな!」

「星間宇宙を吹く風に乗って……なんでしたっけ?

そういうことらしいです」

「そりゃあ、魔物ですから」

|へえ……|

「さ、行きますよ!」

羽がひときわ大きく羽ばたく。

一うお!」

になった。

「大丈夫ですって。落ちたりしませんから」 思ったより大きな加速度に、慌ててちはやにしがみついた。

「そうは言うけど!」

- 瑚太朗は仕方ないですねー」 ふふんと勝ち誇った目をして、ちはやは俺の体に手を回した。ちょっとした安心感

そして、もういちど羽ばたくと……眼下の町が一気に小さくなった。

視界に広がる地平線がだんだん丸くなっていく。 その端から、もっと遠い町の光が見えはじめて、それはやがて、 光の列島のかたち

「なんか、映画みたいだな」

「そうそう、それ……」 「宇宙ステーションからの中継で、見たことがある気がします」

から離れていく。 言う間にも、 町は-地球はぐんぐん俺たちから離れていく。 いや、 俺たちが地球

どこにあるのかすら判らない。 地平線だったものは、今やもう完全に星の輪郭になっていた。 風祭の灯りは、

そして、その星の輪郭のむこうから……太陽がほんのすこし顔を出した。

「わあ……!!」

ちはやが歓声を上げた。

ダイヤモンド・リング。

か見られない天体ショーだ。 「特等席だな」

輝く地球の丸い輪郭に、太陽がぽつんと載っている。本当なら、皆既日食の時にし

「瑚太朗、すごいです!」

そんなちはやと、虚空に浮いて二人きり。 この無邪気さがちはやだよなあ、なんて。 俺はロマンチストなので、そんなことを

思ってみたりする。

「で、だ」

「なんです?」

「太陽が地球の影からでてきたってことは、だ」

「はい?」

「ちょっと軌道がずれてるぞ」

だと月食になる。

今日は満月。太陽、 地球、月がだいたい一直線に並ぶ日だ。 ちなみに本当に一直線

「ほれ」

『あ<u>ー</u>」

「軌道修正ー」 ぽん、と手を打つ。

「なんだか、名残惜しいですねー」ちはやがそれを見やって、ぽつり。

羽ばたきひとつ、ダイヤモンド・リングが消えていく。

「本物って……なんです?」「いつか本物、プレゼントするさ」

なんですかそれ」

ダイヤモンド・リングの名前は、 三十八万キロメートルの虚空を飛ぶ。地球はどんどん小さくなっていく。 ちはやには教えていない。

結構、きたと思うけど」ちはやが少し不安そうに呟いた。

「今、どれくらいかなあ」

「そうなんです?」

ちはやがふりかえって、俺は背後を指さす。

đ

「だろ?」

「月が……」

空に輝く金色の円盤だったものが、心なしか――いや、確かに大きくなっている。

やがて、さっき地球を離れたときの逆再生のように、月はみるみる大きくなってく 近づいているのだ。

それがほんとうに星なのだと判った。 る。黒いウサギの影とその背景の光る円だったものの表面に、デコボコが見えてきて、

その星は、巨大に視界を埋め尽くしていく。黒い月の海が、ウサギに見えなくなっ

てくる。

「わあ……」

ちはやが呆気にとられたような声を上げた。目の前に広がる月は、もはやほとんど

「月、か」壁のようだった。

俺は独りごちた。

遠いような――存在。

消えた。

光が浮かぶ星。俺たちはそこからやってきたのだ。 振り返る。 遠くに地球が見える。 地球から見る月より四倍大きい、 夜半球の人工の

俺たちはそうやって、月の上空に留まった。

訊く。

「どこに降りる?」

「それは考えてませんでした」

ちはや、困ったような顔

「おまえさんが来たいって言ったんでしょう」

「そりゃそうですけど、でも、 そのすっと表情が消える。 細かいこととか知りませんし---

――こんな寂しい星だなんて、思ってもみませんでした」

そう、だな……」

命の欠片もない、岩と石のかたまり。

夜空に金色に輝くウサギの星、 俺たちが夜空に見上げる月とは、 かぐや姫の星 これはあまりにもかけ離れた世界だ。 ――そんな優しい物語の印象が霞んで

「とにかく、どこかに降りよう」

「どこでもいい。例えばそうだな「どこかって……」

----『静かの海』」

「一九六九年、アポロ十一号がはじめて降り立った、 「なんです、それ?」 月の海さ」

俺は大体のあたりをつけて指さす。

と、ちはやが、ぎゅっと俺の服を掴んだ。 ゆっくりと降下をはじめる。星の輪郭は地平線となり、足元の地形が見えてくる。

視線を追う。 「あれ……なにか、

あります」

「どうした」

視線を追う。

追って---

なにかがあった。俺は絶句した。

明らかに人工的につくられた――しかし、長年の風雨に晒され綻びきった――それ

は、廃墟だった。

石造りの ――そう見える 町の荒れ果てた姿が、 眼下に漠と拡がっていた。 「なあ、ちはや」

「そう、みたいです……」 町……?」

- どうする?」 そんなものがあるなんて、学校じゃ教わってない。

今目の前にあるのは、俺たちにとって未知の領域だった。いわばそれは――

-オカル

一ヶ月前の俺なら、喜び勇んで降りていっただろう。 だ。

だから、俺は言った。 まるで紀元前みたいに遠い昔に思えた。

「うん、そうしましょう」 「降りて、みるか」 「なんです?」

ちはやは少しこわごわと同意した。

その町の中心、広場のようなところ――かつては Ė 俺たちは降り立った。

石造りの家、石造りの高層ビル、 しゅるる、とちはやの羽が髪飾りに戻って……俺たちは二人きりになった。 石造りの街路。

灰色の、月の色のモニュメント。

ここ……なんでしょう」 それらが俺たちを見下ろしている。

ちはやが、誰にいうでもないように言った。

俺は、空を見上げる。地球がそこにある。

「わからん……」

「ここに、誰か、住んでいたんでしょうか……」 「そう、見える……」

りの町を歩き始めた。歩くと、風化した石や砂が、ざりざりと音をたてた。 突っ立っていても、風景はまるで変わらなかった。どちらともなく、俺たちは石造

しばらく建物の間を行く。そこは延々と連なる廃墟だった。

「そうだな……」

何もありませんね……」

ここは何なのだろう、という疑問が、 俺たちの頭にまとわりついて離れない。

「なにかあるとしたら……あそこか」

俺はそれを指さす。他の建物とは明らかに異質な、巨大な構造物がそびえている。

感じもする。

「ああ」 「行ってみましょうか」

頷く。

どちらかというと、それが最初にあって、まわりに町ができあがっていったみたいな それは巨大なドームだった。町のど真ん中にあって、他の建物たちを圧倒している。

けられた、アーチ型のそれが、黒々と口を開けていた。 ドームの壁沿いに歩いていくと、しばらくして入口が見つかった。壁に無愛想に開

いていた。見上げると、内側の壁は、右手――ドームの中央に向かって軽く傾斜して 入口を入ると、すぐ左に通路が続いていて、それは外壁に沿ってゆるくカーブを描

「瑚太朗、これ……」

「ああ……ドームの中にドームがあるんだ」

「なんなんでしょう……」

「さあ、判らん。とにかく進んでみるしかないさ」

通路はずいぶんと長く続いた。感覚的には、そろそろ一週もするんじゃないか。ど そのまま通路を進む。かつかつと靴音が硬質に響く。ぴったり二人分の足音だ。

こまで続くんだ……と不安になったころ、

ちはやが声を上げて立ち止まった。

行く手で、通路が行き止まりになっていた。いままで分岐はなかったはずだ。どう

した――とよく見ると、その右側、内側のドームに入口が開いている。

むと、その内側にもドーム(三つめだ!)があって、今度は右側に通路が続いている。 「こっちだ」 ちはやが黙って俺の手を握った。二人してゆっくりと近づく。それから俺が覗き込

「なんだか無駄に遠回りしてますね……」

「いま通った道の、ちょうど裏側だ、これ」

「そうすると、この先に何があるか大体想像がつくぞ」

た別のドームだった。 「またひとつぶん内側に通路がある……と」 想像通り、しばらく通路を進むと行き止まりで、左手に入口があり、その内側はま

「マトリョーショカ人形だな」

「なんですそれ」

「ロシアの土産でさ、人形の中に人形が入ってるやつ」

俺は問い、ちはやは呟く。

中心に向かっているらしかった。 どうやら俺たちは、右回りに左回りにと、同心円をひとつひとつ辿って、ドームの

いているのだ。 そして、ある入口を覗き込んで……俺たちはそこが終点だと判った。 直径三〇メートルくらいの小さなドームだった。

そんなことをくりかえすうちに、ドームはだんだん小さくなってくる。中心に近づ

俺たちは黙ってそれに歩み寄る。その中心に、ひっそりとなにかがあった。

それは――芽だった。

月の大地に、それは静かに静かに息づいていた。 灰色の世界の中に、くっきりと浮かぶ、二枚ひと組の緑。

あまりにも神々しく、あまりにも弱々しかった。俺たちはちっぽけなそれに――圧倒された。

「わかりません……」「これ……何だ……?」

でも、きっと、まだ触ってはいけないものだ。 なにか――この死んだ星に残されたわずかな根源のようなものだ。 これは尋常ではないものだ。

瑚太朗」

だった。 俺を呼ぶ声がした。その顔を見る――ちはやも、同じようなことを考えているよう

俺は応える。

「行こう、ちはや」

ちはやはこんどは、黙って頷いた。

背後から――いきなさい――と声が聞こえた――気がした。 俺たちは、どちらともなく、その緑に背を向けた。

息をついた。 の外に出て、近くのベンチ――だったもの――に腰を下ろし、俺たちは、ふう、と一 ドームの中心に至る道は、一本しかない。歩いてきたそれを逆向きに辿る。ドーム

そこは変わらず、石の町だった。

俺にはなんとなく判った。

まだ来るべきではないところに、

俺たちは来てしまったのだ。

ちはやの息が落ち着くのを見計らって、俺は立ち上がる。

俺に倣って立ち上がり、ちはやは何も言わず、 羽を広げた。

見えたが、それも見る間に小さくなり、やがて見えなくなる。 廃墟の大地は、やがて球面になり、月のかたちをゆっくりと取り戻す。

羽がひとつ羽ばたくごとに、石の町が遠くなっていく。その合間に、

あのドームも

いつの間に

かそれは、巨大ではあるけれど、見慣れた輝く月へと変わっていた。 名残惜しみつつ、俺たちは再び、 三十八万キロの虚空の旅に出た。

月が、 少しずつ、少しずつ小さくなっていく。 ゆっくりと遠ざかっていく。

飽きもせず俺たちはその姿を眺めていた――

鳳ちはや!」

不機嫌な暴力が感傷を吹き飛 ばした。

ぶん魔物が、浮かんでいる。その背に…… 慌てて振り向くと、 地球の夜景を背に、 巨大で異様な物体が 竜のような一 | た

「あ、朱音さん……」

とだった。 に乗って、腕を組んで仁王立ちしているのは、オカルト研究会会長・千里朱音そのひ 悪戯をみつかった子供のように、ちはやが乾いた声を上げた。言葉どおり、その背

「どうする、ちはや」

「うええ……」

冷や汗じみたものを浮かべつつ、ちはやは唸る。

「見つかっちまったもんは、仕方ないだろ」

りと会長の隣、巨竜の背に降り立った。 「そうですね……」 はあ、と肩を落として、ちはやは羽をひとつ羽ばたかせる。そうして俺たちはゆる

しゅるしゅると羽がしまわれ、こわごわとちはやが声をかける。

「あのー、朱音さん……?」

した目線をこちらにくれて、口が動いた。 が、会長は微動だにもしない。たっぷり一分は沈黙が続く。それから、 じっとりと

それを皮切りに、ぎらりと会長の目が光り、説教が始まった。

まったくおまえはなにをしているのかしら!」

涙と鼻水を流しながらちはやはひたすら頭を下げている。

一転、一方的な仮設裁判所に変じていた。もしくは生徒指導室。

巨竜の背は、

「私は一体どういう指示をしたか、おまえ、覚えていて?」

人として狙われている。事態がどれだけ緊迫しているのか判っていないの?」 ·奴ら——給食当番があげぱんを狙って町をうろついていて、おまえたちも重要参考 家で静かにしていなさいって……」

あげぱんが……うう……」 ちはやはもう、ごつんと一発やられた小学生のような有様だ。

いやいや会長、その表現だと緊迫のしようもないっすよ。

゙まあまあ会長、そのあたりで……」

見ていてちょっとかわいそうになってくる。

天王寺、おまえも同罪なのよ。土下座なさい」

土下座!」

すみませんでした会長」 「早くしないと足でその空っぽの頭を踏みにじってあげてよ?」 即座に膝をついて頭を下げた。

弱っ! 俺弱っ!!

ガスッ! ガスッ!

衝撃が頭を。 ガスッ! ガスッ!

「うるさいっ!」「ぎゃぁ!」結局足蹴ですか!」

「とっくに馬鹿だわ!」「ご勘弁!」これじゃ馬鹿になっちゃいますよ!」

「うう……ずびばぜん……」

一通り罵声を飛ばして、頭を踏みつけるのにも飽きたよく見るとちはやの後頭部にも足跡が。会長容赦ねえ。

で、ふん、と鼻息を鳴らす。 一通り罵声を飛ばして、頭を踏みつけるのにも飽きたと見えて、会長殿は腕を組ん

横を見ると、ちはやさんもぐったりだ。生き残った……。

刑の執行はどうやら終了だ。

「で、もう一度訊くわよ。おまえたち一体ここで、なにをしていたの?」 顔を上げると、会長殿は未だ憤懣やるかたなし、 といったふうだ。

「で、宇宙旅行」 いやあ……しばらくちはやんちに閉じこもってたら、なんか鬱屈しちゃいまして」

飛んでみようと!」 「猫型ロボット的な歌を歌ったら、ちはやが『できますよ』って。それで、それなら

「どアホだわ 頭を抱えて会長殿がぼやく。

「それだって、こんなところまで来る?」

「もうすこしで月だわよ、ここ」 見回す。星間宇宙。地球と月がそんなに変わらない大きさに見える。

「どこまで高く飛べるかなって、試してみようと思ったんですよー」

はやが頽れた。 「まあまあ、そういう会長も、こんなところまで来ちゃってるわけですし」 真性のどアホね」 ぱっとにこにこ笑顔のちはやに、会長殿が絶対零度のツッコミだ。あううー、とち

「わわわ私は単にお前達の保護者としての責任を果たしにね」 突っ込むと会長殿、ちょっと顔を赤らめて見せた。

サムズアップ。頭をはたかれた。

「どもってますぜ会長!」

179

「私のことはいいの。権力者だから、 「相変わらずえげつねえ!」 あんまり騒ぐと殺されるわよ」 黒服たちが命に代えても守ってくれるわ」

「おまえたちは違うと言っているの。

「給食当番に?」

敵もいるのよ」

「そっちは実感が沸かない……」

たことはない。っていうか、会ったこともない。

魔物に襲われることはあっても、なんていうんだ、

正義の味方みたいなのに襲われ

静流とルチア、か……)

あの二人が俺たちを殺しに来る。

どうにもイメージが沸かない――というか。

(そんなの、信じられないよなぁ)

「こんなアホっ子どもを抱えて戦わなきゃならないなんて、悲劇もいいところだわ」 一通り怒りを発散すると、会長は頭を抱えて巨竜の背中に座り込んだ。

「うわ、会長、アホっ子扱いっすか」

愚痴った。

.馬鹿と煙は高いところが好きって言葉知らないかしら?」

いところだわ!」 「それじゃ言い直す。こんな馬鹿どもを抱えて戦わなきゃならないなんて、 「会長、アホだって言ってたじゃん!」

悲劇もい

「なんだかそっちのほうが傷つきます……」

「勝手に傷ついているといいわ」

「ふうん……なるほど、地球がこう見えるわけね」 言いすてて会長は辺りを見回す。

「会長、このあたりにきたのは初めて?」

あるのよ?」 「当たり前じゃない。なんでこんな寒々しいところに好きこのんでやってくる理由が

「男はこれだから」 「ロマンとか?」

会長はまるでウジ虫を見る目だ。

「こんなところに長居は無用だわ。もう帰るわよ」

言って会長がすっと手をかざした。

竜が異界的な音をたてると、プテラノドンのような羽を広げた。

どうやら、ちはやの髪飾りの魔物よりも、 会長の竜はずっと速く飛べるらしい。

地球は見る間に大きくなっていく。

「ん? 何だ?」

「そういえば瑚太朗」

「私たち、月からの使者みたいに見えてたりしませんか?」

あー」

想像してみる。

男女-

地上に立って、満月を見上げる。その満月に映る、 怪しい影。 竜の背に乗る三人の

「月の女王と召使い二人って感じかな」

「ですよね……って、私も召使いですかっ!?」

「むしろ、会長がいるから、ちはやは召使い確定」

「俺は月の王子でもいいんだけど、会長のお相手はちょっと遠慮したいところだよな」 「い、言われてみれば……」

「そんなものはこちらから願い下げだわ」

ぼそりとばっさりと、会長が斬った。

朱音さん、 女王様ですね……」

ーそうそう。 地球を制圧しにきた月の女王――」

突然、ぐわり、と竜が揺れた。

わあーっ!?」

慌てた声に振り向くと、ちはやがバランスを崩している―

「ちはや!」

慌ててちはやの手をぐいと握ると、竜の背にしがみついた。 間一髪だ。

「会長、どうしたんすか!?」「あ、ありがとうございます……」

゙なにかが……来る」 問うと会長はぐっと手綱をひいたまま、 地上を見下ろして、 呟いた。

接近していた。 その言葉通り、なにか緑色のバーストを輝かせた人型の物体が二つ、こちらに急速

**

|月の女王が地球を制圧しにきたかと思ったぞ!!| その姿は全身真っ黒の、 竜の背に降り立つなりヘルメットを脱いでまくしたてたのは、ルチアだった。 たぶん空間戦闘用スーツかなんかなのだろう。

「あー」

あー」

ちはやと顔を見合わせた。どっかで聞いた表現だ。

「いや、委員長にしては陳腐な表現だと思って」 「何だ天王寺!」

「他にどうしろと言うんだ。かぐや姫だというなら、もっと穏当に降りてくるだろう!」

一まあまあ

ちる。言うまでもない、静流だ。 もうひとりがヘルメットを脱いで言った。まとめられたブロンドがはらりと肩に落

「とにかく月の女王ではないし、地球を制圧しに来たのでもない。そうだろう、カイ

問われた会長がようやく口を開いた。

チョー」

「そうだわね

うでなくてよかった」 「それなら問題ない。異星人ではガーディアンで対応できる範囲を超えているが、そ

「おまえのその装備なら、宇宙人にも対抗できるのではなくて?」

に攻撃されたらひとたまりもないだろう」 「この空間戦闘用スーツは、あくまでも試作品だ。量産にも成功していない。宇宙人

「静流! それは機密事項だ!」

「咲夜のことです?」 「たぶん。カイチョーは重要人物だし、調べてみたらちーも随分危ない」

下手をすれば戦闘になっている」

「ルチアもそうかりかりするな」

静流は安穏として言う――が、その口調が少し沈んだ。

「そうなのか?」

「だけど、コタローたちも気をつけた方がいい。来たのが私たちだからよかったが、

だろう、ルチア」 「そうだ。目をつけられている。私もちーやカイチョーとはやりあいたくない。 そう

「そう、だな」 ルチアはずっと目を瞑っていたが、やがて、ぼそり。

「うむ」 よし、と頷く。そして、にっこりと笑った。

「言い忘れていた。カイチョー、ちー、それにコタロー……久しぶりだ」

子で口火を切る。 いろいろ有耶無耶のうちに、俺たちはそれぞれに座り込んだ。ルチアが委員長な調

185 「それで、お前たちは一体、何をしていたんだ。こんな高いところまできて」

私は配下のアホどもを迎えに来ただけよ」

「天王寺、やはり貴様か」 不満な会長の言い分を聞いて、ルチアの視線がこっちに刺さった。

゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙ ちはやはどうしたよ!」

鳳さんと並べてみれば、 ものごとを煽動するのはお前の方だろう」

゙ひでえ言いようだ!」

「瑚太朗は日々の行いが悪いですからねー」

「フォローなしかよ!」

「とにかく」

言い争いをルチアがぶった切る。

「天王寺に鳳さん。少し話を聞かせて貰おうか」

俺たちはまた、顔を見合わせた。

俺たちの頭上に浮かぶあの月の――ドームにあったもの。 たぶん、あまり人に話さない方がいいようなものだ。 あれは。

俺にだけ判るように、ちはやが首をかしげて見せた。

「ええとですね、実は二人でピクニックに行こうと」

ピクニック……?」 ちはやの答えがお気に召さなかったか、委員長殿のこめかみがぴくりとした。

「随分暢気なものだな。我々とあなたたちは、世界の命運を賭けて争っているという

「まあでも、たまには気分転換しないと、もちませんよ」

と――そんなもの、持っていたっけ?――ルチアに差し出した。 珍しくちはやがルチアの言葉を遮った。それから、背後からバスケットを取り出す

「せっかくですから、サンドイッチ、食べます?」

「ば、ば、馬鹿な! 我々は敵同士だぞ! どうして敵の作ったものなど食べられる! 一方のルチアは目を丸くして激憤だ。

毒でも仕込んであったら、どうするつもりだ!」 「そんなことしませんって……」

呆れ気味でちはやが返すと、静流がすっと手を挙げた。

「そうだ。ちーはそんなことはしない」

「ちーがやる気を出したら、咲夜さんが出てくる。姑息な手を使う必要はない」 |判るものか!|

·そうですよー」

「それに」 だが……」

187 静流は優しく言葉を被せた。

ちーのサンドイッチを食べない理由はどこにもない。そうだろう?」 その言葉の真意はまったくわからないが、聞いたルチアが固まった。

「たとえ毒が仕込まれていたとしても、私とルチアなら、何の問題もない。

「た、たしかに……」

「私ももらっていいか、ちー」

「いいですよ。ピクニックですし」

「うむ。ピクニックはいいものだ」 答えると静流はちはやのバスケットに手を伸ばす……が、そこで遮る声がした。

会長だ。

「いいけど」

「どうした、カイチョー」

「どうせピクニックなら、もう少し落ち着けそうな場所がいいんじゃない?」

「そんな場所があるのか」

あのあたりとか」

いつのまにか、竜は地上近くまで降りてきていた。

固まった。 その地上の一点を、会長は指している。そのほうを見て――俺は背筋が震えて……

「こ、こ、こ、」

小鳥じゃないですかっ!!」 ちはやがどもって言う。

その言葉の通りだった。

会長が指し示す先に、こちらを見上げている小鳥がいた。

目を丸くして……その顔が雄弁に、みつかっちゃったよ!

と物語っている。

だった。 竜がふわりと降り立ったのは、実に小鳥らしく丁寧な手入れをされた、 庭の一角

がり、竜はかき消すようにいなくなった。 皆が竜から降りると、朱音がその額に手をかざす。魔法陣のような紋章が浮かび上

その庭は森のただなかに拓けていた。

少し離れたところに、小鳥が立っていた。こっちを見ると、ちょっと困ったように

笑った。

「いやー、ちょっとファン活動をね」 小鳥! そこに一番に駆け寄ったのは、ちはやだった。 こんなところでなにしてるんですか!」

変わって、小さな声で答える。 「意味分かんないですっ! 心配したんですよ!」 肩を掴まれて小鳥は、ちょっと驚いた顔だ。それから、どうにもすまなそうな顔に

「ごめんよちーちゃん。私にもいろいろ事情があってさ」

ちはや、彧「はあ……」

ちはや、盛大にため息をついた。

「なんだか事情だらけですね。まあいいですけど」

「それで、ちーちゃんたちは一体どうしてこんなところに?」

ぱあっとちはやの顔が輝いた。

「ピクニック! です!」

とがとてもよく伝わってくるのだ。 けれど、ここはそれともまた違った、長い間愛情を込めて手入れされているというこ 鳳家(っていうかガイア)の潤沢な資金を存分に使った、鳳家の庭も大層なものだ ピクニックで偶然辿り着いた先にしては、小鳥の庭は素晴らしくいいところだった。

一言にすれば、とてもとても――居心地がいいのだ。

「知ってはいたが……神戸さんのガーデニング技術はまったく凄いな」

ルチアが感嘆の声を上げて、あたりを見回した。

゙なんかはずかしいなぁ……」 頭をかきかき、小鳥が笑って、それから、ピクニック主催者

流れ適にそういう

ことになった――ちはやに問いかけた。 「で、ピクニックっていうからには、なにかお弁当があるの?」

「はい。サンドイッチを作ってきました!」

「おお、さすがちーちゃん。やるねえ」答えるちはやはにこにこだ。

「そうかあ。それじゃ、せっかくだから――ここはみんなひとつ、お茶でもいかが?」 なぜかこっちを見て、小鳥がにやりとする。それから、みんなの方に向き直った。

「何か、シートがあるはずなんさ」「何をするんだ?」

小鳥は俺を連れて、庭の片隅の納屋に向かう。

゙あー、レジャーシートみたいな?」

「そうそう、そんな感じ。どっちかっていうと、ブルーシートだけどね」 すこしがたがたと鳴る引き戸を開ける。月明かりが届かない納屋の中は、

ほとんど

「ちょっと待ってて」

真っ暗闇だ。

小鳥は入口近くにかがんで、なにかごそごそとやっていたが、やがて、ぽっと橙の

おし

灯りがついた。

小鳥が持っているのは、手提げ式ランプだった。

「いわゆるランタンってやつだあね」

「ファンタジー小説の中でしか見たことがないぞ」

「言い得て妙」

小鳥は静かに納屋の中に入っていく。

「足元に注意してね」

おう」

中は思ったより広かった。

奥の方で、小鳥は立ち止まった。

園芸道具と思しきものや、大小の袋が、きちんと整理されて棚に並んでいる。

その

「まんまブルーシートだな

「ガーデニングで使うんさ。ちょっと無愛想だけど、みんな座れるサイズっていった

ら、これ」

ーよしきた」

小鳥のランタンに照らされるなか、俺はブルーシートのひとつに手を伸ばす。

これでいいか?」

「よっしゃ」

あいよ、コタさん」

「すまないねえ」

しまう。

棚と棚のあいだはそんなに広くない。もしなにかに当たったら小鳥に迷惑になって ずりずりと棚から引きずり出して、肩に担ぐかと考えて、やっぱりやめた。

「なに、いいってことよ」

一回。それで即席の食卓ができあがった。 ブルーシートを広げると、近くのせせらぎを使って、濡れ拭き、それから乾拭きを 軽く言葉を交わして、俺たちは月明かりの下へと戻る。

「テーブルもなにもないけど、ごめんねえ」 「ピクニックみたいなものですよ。ね、朱音さん?」 「……野外趣味にしては、まあマシなほうね」

ルチアもこれなら大丈夫だろう」 うむ、と静流が頷く。

神戸さんはさすが女の子

「シートが敷いてあるしな。きちんと掃除されているし。

「いやぁ、それほどでも」 まんざらでもないように小鳥が答えた。

「そんでもって、次はお茶とお菓子だあね」

「です!」

ちはやが頷く。このわんぱく暴食娘め。

「えーと……そうだなあ、いいんちょとしずちゃん、ちょいと手伝ってくれないかね?」 「ああ。任せてくれ」

うむ」

二人を連れて小鳥はまた別の方に消えた。それを見送ると、俺は突っ立っている二

人のほうに顔を向ける。

「ま、座ってましょうや」

「そうね。せっかく用意してくれたのだし」 「わーい!」

人と何でもぶっ壊すおっちょこちょい娘。なにげに戦力外通告されたという事実に. 靴を脱ぐと、それぞれブルーシートの上に陣取った。箸より重いものを持てない貴

ちはやは気づいてないっぽい。会長は会長で全部スルーか。 力仕事ができないことに、

一片の後ろめたさもないもんなあ、この人。

「やれやれだわ」

「まったく、こんなところで何をしているのかし」言って会長は天を仰いだ。

「どうしたんです?」「まったく、こんなところで何をしているのかしら」

「おまえね……此花と中津はガーディアンよ。それがどうしてこんなところで仲良く これまた空を眺めていたちはやが、ふっと振り返る。

お茶会の準備をしているのよ」

「ああ、そうでした」

「でも、わたしたちオカ研ですし」(今それを思い出した、というふうにちはやが笑う。

「私がいるからなんとかするけど、ちはや、私が見ていないところでこんなことがあっ

「しょ、処刑!」たら、おまえ、処刑よ」

がびーん、とちはやが目を丸くする。

「処刑はちょっといやです……」

れるのも重りをつけて水に投げ込まれるのも、ぜんぶごめんだわ」

「同感ね。わたしも嫌だわ。ギロチンで首をはねられるのも火あぶりでじわじわ焼か

ちはやが目を丸くしたまま固まった。

「それグロいっす会長」

「わたしたちガイアは、そんなに近代的な処刑方法を持っていないのよ」

「悪の秘密結社的にはそれだわね」 「近代的って言うと、爆死とか?」

「どっちかっていうと、ルチアや静流のほうに処刑されたいもんっすね」

「電気椅子とか絞首刑とか薬物注射とか、人道的に問答無用で始末してくれるでしょ

「あー、やっぱりそっちも嫌っす」

うね」

「だわね。生きているに越したことはないわ。 死んではゲームもできない」

ゲームときたもんだ。オンゲー?

「ゲームごときにハマるのは、人間の証明よ」 「心底ひきこもりっすね、会長……」

「自分でごときって言いますか」

下郎には判らないことよ」

下郎いわれた!」

辟易したように会長が呟いた。

|安い女ね……| わくわく!」

あ!

「コタさんが下郎かどうかは置いておいてだね」 顔を上げると、小鳥がルチアと静流を引き連れて戻ってきていた。 三人とも、手提げ盆に手提げ籠、それに紙袋で両手が一杯だ。

「お菓子ですー!」

ちはやが復活した!そしてルチアがちょっと引いた。

「ちょっと待ってくれ、いまちゃんと準備するから!」

アルコール・コンロに火が入り、ヤカンが沸騰し、 小鳥が人数分のお茶を淹れて

並べていく。 その横で、 ちはやが次々にバスケットから食べるものを出して、 車座のまんなかに

ちはやお手製サンドイッチに、 ちょっとしたピクルス。それに……

「それ、咲夜さんのアップルパイだ!」 小鳥が声を上げた。

「です!」

おお、と一同歓声を上げる。

た。あの味は忘れようっても忘れられるもんじゃない。

悔しいが、咲夜のフルーツパイは絶品だ。オカ研の部室でも何度かご相伴にあずかっ

はやは小鳥の方をちらりと見た。この庭の主人は小鳥だ。 そうして、小鳥のお茶が入る頃、ちはやのバスケットがようやくカラになった。

た。それから、コホン、と咳払いをひとつ。 小鳥は、あたしかい? とちょっと首をかしげたが、すぐにやれやれと笑ってみせ

「それじゃあ……」

その声に、みんなが小鳥のほうを見た。

「「いただきます」」 「……久しぶりに、のんびりしましょうかねえ。いただきます」

皆が唱和して、そうして宴が始まった。

回した。 やがて、いくつめかのサンドイッチをぱくつきながら、ちはやが、ふとあたりを見

そういえば小鳥」 なに、ちーちゃん」

「なんで、こんな森の奥に、 「それね……」

少し小鳥が言い淀む。

「つまり、広い場所が欲しかったんさ」 小鳥の家の庭、狭いんです?」

ごく普通の一般家庭だよ。お庭も猫の額さね」 ちはやの頭に、はてなマークが浮かぶ。

猫の額?なんですそれ?」

「陽があたらない……それじゃ、育つものも育ちませんね」 「めちゃくちゃ狭いってことだあね。ちゃんと陽もあたらないし」

てたんだけどさ」 「そんなわけで、いろんなご家庭のバルコニーなんかを、いろいろいじらせてもらっ ちょっと寂しそうな顔の小鳥さんだ。

神戸小鳥謹製、 リトル・フォレストシリーズか。

「やっぱり、いつも見てあげられるわけじゃないし。水や肥料のやりすぎで枯らしちゃ

うひともいるし」

「俺か!」

「そうなんです?」

「確かに天王寺は苦手そうだな、ガーデニング」

「コタロー、ひとには向き不向きがある」

「まあ、コタさんは極端にダメな例だけど」 「無様ね」 四人それぞれにご講評を下さる。普段、俺をどんな目で見ているかよく判るな……。

「とにかくリトル・フォレストだと限界があってね。いろいろ試してみたかったんだ」 極端にダメ!」

「うん。森の奥の方が、植物がよく育つから」 「それでこの庭、ですか」

よく育つ、ね。

そういえば……。 小鳥の緑を増やそう委員会に一緒に出かけたときのことを思い出す。 異様に増殖し

た蔓に根っこ。爆ぜる虫こぶ 『風祭はね……環境さえ整えれば、 一晩で花が咲く。そんな土地』

いや、イメージではない。

森の奥ならば、生命力はもっと激しいに違いない。風祭の市街地ですら、それなのだ。

この小鳥の庭に覆い被さるように、夜闇に黒々とひろがる影。 俺は――ぞっとして、あたりを……見回した。

それらがずるずると触手を伸ばしてくるようなイメージ。 町の街路樹と似て非なるもの。暴力的なまでの生命

のだ。 背筋が震えた。 植物は、成長する。日々着実に。こちらへと、ゆっくり、 俺たちはとんでもないところにいるんじゃないのか---しかし確かに迫ってくる

小鳥の声が、俺を現実に引き戻した。「そんなに怖がらなくても、大丈夫」

>・・、、・・は こうこうほうおうごよこう 深く息をつく音がした。 見ると、ルチアだ。

「いいんちょはちょっと苦手だったかもだね」「ああ……」

「そっか。それならよかった」 いいんだ神戸さん……興味深くはある。見ているぶんには、 嫌いじゃない」

「ルチアも女の子だ。綺麗なものには興味があって当然だ」

「な……静流!」

んのかね? ルチアが赤面した。俺と違って鉄拳が炸裂しないあたりは……俺、やっぱ嫌われて

その脇で、小鳥のガーデニング講座が続いている。

「まえにちーちゃんの家のお庭、いじらせてもらったよね?」

「あの時のことを思い出してもらえればいいんだけどさ、ガーデニングの基本って、 「はい。おかげで見違えるようになりました!」

『そこにあるものを活かす』ってことなの」

「そ。たとえば、そこに生えている木があれば、それを活かす。そこに岩があれば、 「『そこにあるものを活かす』?」

それを活かす。建物や道があれば、それを活かす」

「建物もですか!?」

「そ。ちーちゃん、お庭のために家の形を変えようって思う?」

「え、家ですか。うーん……」

難問を振られて、ちはやが考え込む。 、かわって静流が手を挙げた。

「家のかたちを変えるのは、ガーデニングではない。 「はい、しずちゃん」 建築だ」

「大正解」

にっこりと笑って小鳥が言う。

「要するに、変えられないものは変えられないから、それに合わせてお庭を作るって

のが、ガーデニングなわけさ」

ちはやさんも納得のご様子。「なるほどー」

「そんなわけで、ちーちゃんちのお庭をいじるときには、ちーちゃんちの家をどうやっ ちはやさんも納得のご様子。

て上手く使うかっていうのを、まず考えなきゃいけないわけ」 「それじゃ神戸」 「なんですか、会長?」

か基準になるものなんて、そうそう見あたらないと思うのだけれど」 「この庭は、何に合わせてつくられているの? この原初の混沌の森の中では、なに

「それはですね」

その先は、煌々と輝く月――かと思った。 小鳥がふわりと背後を振り返った。そして指さす。

景に、星空よりもさらに黒い影が見えた。 だが、違う。それより少し……下だ。そこに……その月明かりを逆光に、

星空を背

見上げんばかりの巨樹が、俺たちの目の前にそびえ立っていたのだ。 誰もが絶句した。





先頭を行くのは、小鳥と会長だ。 淹れた紅茶を魔法瓶に詰め、お菓子を籠に盛って、俺たちは巨樹の根元へと向かった。

「これが、お前の『庭』の中心?」

「こんなものが森にあったとは……」 「そうです。この樹を活かして――この樹を主体にして、庭を造っています」

見上げてルチアが半ば呆然と言う。

「……大きいな」

゙うむ。大きい」

その樹は、近づくに従って、その巨大さをいよいよ示し始める。 静流もルチアの横に立って歩きながら、視線を合わせる。

「これ、一体何メートルあるんだ?」

屋上より高そうです。落ちたら痛そうですね……」

「痛いっていうか、普通はもっとおヤバいことになる」

「たしかに、そうかもです」

やがて数分も歩くと、巨樹の幹が姿を現わした。 粛々とちはやも頷いた。

ちはやが歓声を上げた。

うわあ……」

「大きいですー!」 ああ、大きいな……」

そのまんまの感想に、ルチアも気圧されつつ同意した。

「ひとかかえなんてものじゃない。直径――五メートルはあるぞ。

いや、もっとか……」

ルチア」 その幹に駆け寄った。

階段がある。小鳥」 静流が、

うん、お庭の一環でね。 なぜだかそこで、小鳥は俺のほうを見た。 展望台みたいになってる。登ってみる?」

手すりはちゃんとついてるよ」

危なくないのか?」

俺は樹を見上げた。果てしない高さに思えた。

「行ってみようか」 登ってみる価値はある、 と思った。

·あいよ、あんさん」

先導を頼むわ」

゙まかしときんさい!」

階段は、樹の周りに螺旋を描いて張り付いていた。

小鳥の言うとおり手すりはちゃんとついているし、

思ったよりも危なっかしい印象

はない。

小鳥の言葉が思い出された。

どうやら、樹の凹凸や枝をうまくつかっているようだ。『あるものを活かす』、

し離れたところに夜景がひろがる。風祭の夜景だ。 ぐるぐると登っていくと、 見る間に地上は遠くなり、 空が近づいてくる。足元、

森からは、町がこんな風に見えるのか……」

ルチアが呟く。ちはやがそちらに顔を向けた。

「たしかにあまり見ない光景ですよね」

森の奥は、そうそう来られる場所じゃないしな。 踏み込むだけだって、 ちゃんとし かたち、極相林だ。

た装備がいる」

「それもあるな。私だって虫に咬まれたくはない」「虫除けスプレーとかですか」

「ですよねえ」 その会話に、足元のほうを見下ろした。くろぐろと森が広がっている。 明かりひと

林となり、陰樹林となり。 つない。満月の月明かりも、木々の傘のむこうの地面までは照らせない。 荒れ地に苔が生え、一年生の草むらから多年生の草むらになり、それがやがて陽樹 こういうのを、極相林――というのだったか、と、ふと生物の授業を思い出 なにもないところから森が産まれて、それは人が年を取っ

ていくように姿を――相を――変えていく。その行き着く果てが、この深い深い森の

した戦線の塹壕のように曲がりくねって連なっている。 なんか……」 遠く風祭の夜景は、くっきりと黒に縁取られている。 町の領域と森の領域は、

膠着

言葉が口まで出かかった。

後ろから会長の声がした。どうしたの、天王寺」

20°

俺の言葉を催促するように、会長はそれ以上言葉を口にしない。

「なんか、風祭って――森を畏れているみたいっすね」

俺はもういちど、町と森と、光と闇とに目を向けた。

息を呑む気配がした。会長の足が止まった。

振り返る。その目が大きく見開かれていた。

「どうしたんすか、会長」

くしゃりとその顔が歪んだ。そのまま会長は、

風祭の方へと視線を向ける。

の沈黙。 「……慧眼ね、天王寺」

「そうですかね」

俺はあくまでも飄々と答えた。

「そんなに的確に ひどく高い評価だ。返す言葉に詰まった。 ---あの街を評したのは、 おまえが初めてだわ」

俺はなにか、核心に触れることを言ったのか。

「瑚太朗、なにしてるんですー?」

上の方から、のんびりちはやさんの声がした。

がった。

「せっかくのピクニックです、楽しみましょうや、会長」

俺は努めて軽い声を出す。

声に応えて、会長はやれやれと首を振る。その顔は、いつも通りの無愛想だった。

階段は、大樹の八割あたりの高さで終わっていた。 その先には、まだがっしりとした枝と幹、その間に張り巡らされたハンモックが

あった。 「ちゃんと落ちないようになってるから、大丈夫だよ」 最初はこわごわと、めいめいにハンモックに降り立つと、みな手足を伸ばして寝転 小鳥さんがそう言ってハンモックに降りたった。

広がっている。 真上には大樹の天窓、 見回しても、枝々の先に視界を遮るものもなく、 夜の大気が

「ここはお茶でもひとつ、どうぞ?」

い湯気が立ち上り、皆が小鳥の方を向いた。 小鳥が言うと、プラスチックのカップを取り出して、魔法瓶をあけた。ぽうっと白 いめいにカップを啜り、めいめいに見渡す風景に見とれた。

風の吹き渡る静かな音がする。さわさわと頭上で葉の掠れる音がする。

俺は見上げる。見上げるそのむこうに――月が輝いていた。

月。

遠い遠い、月---。

それが、真上からさす光に照らされていた。 目の前には、あの時に見た緑の双葉があった。

――月のドームに、俺はひとり、立っていた。

光……?

はっとして見上げる。 何層にも重ねられたドーム、その頂上に、小さくない穴が空いていた。

樹が――伸びるための穴か。

そしてそこから、光が差し込んでいた。

俺はその光の柱のたもとに そこに、輝く星があった。 ――双葉の横に立ち、そらを見上げた。

天高く輝く蒼い星――地球だった。

地球の光が、 この月の廃墟に降り注いでいる。

|綺麗だ……)

そして、俺は孤独だった。

誰かの声がした。

「……ちょっと、夢を見ていたんだ」

月と地球。最も近く、それゆえ最も遠い星だ。 俺の他にも誰もおらず、小さな双葉だけが俺の横にいた。

その地球の光を受けて――足元でなにかが動く気配がした。

禄線をやる。

(大きくなっている……)緑が変わらずそこにあった。

「どうした、天王寺?」俺はもう一度空を見上げる。

地球が輝いている。

我に返ると、ルチアがこちらを見ていた。「どうした、天王寺?」

見上げると、天頂付近に月が輝いている。

いや……」

上に地球が輝いている――なんていうのは、 ということは、あちらから見れば、地球は新月のように暗く見えるだろう。 あり得ない。

月の頭

「夢、か」

「どしたの、いいんちょ」 ルチアは短く言うと、ぐるりとあたりを見回した。

「いや……」

「この樹は一体、何メートルくらいあるんだろうな、と思ってな」 そして、足元の方をちらりと覗いた。

小鳥が下を覗き込んだ。 ひゅう、と風が吹く。

゙どうだろうねえ……」

「そうすると、高さは全部合わせて、二百メートルくらいか……」 「百五十メートルくらい?」

そして、ゆっくりとその瞼を開いた。

目を瞑ってルチアが呟く。

穏やかに……寂しげに笑っていた。

神戸さん」

「なに、いいんちょ」 この樹は、なぜ 町から見えないんだ?」

小鳥が絶句した。

「自分で言った!」

コントに続いてルチアがまた口を開いた。

れる……?」 「それに、もしここが百五十メートルもの高さなら、なぜ会長が平然と登ってこら 「考えたこともなかった……」 今度は会長が口を開いて固まった。

「たしかに、朱音さんがここまで登ってこられるなんて……」

「あり得ないわね ちはやが首をかしげる。

かっただろうか? なあ、天王寺」 「そしてそもそも、神戸さんの庭からこの樹を見上げたとき、この樹は、そこまで高

「え、俺?」 「高さ二百メートルと言えば、風祭でも一、二を争う超高層ビルとおなじくらいだ。

そこまで高いようには、見えなかった。そうだろう?」 「い、言われてみれば……」

「この樹は、私たちが登っている間に、高くなったんだ。いくら風祭でも、こんなこ

213 とは起こりえない。それなら、合理的な説明はひとつだ。天王寺」 「あ、ああ……」

なによりあの月――廃墟、ドーム、小さな芽――そうか、ちはやだって、言ってい その言葉に、いくつもの光景がフラッシュバックした。

たじゃないか。 人を乗せて飛ぶような魔物は、そもそも難しいんだ、って。

「そんなことだろうと思ったわ。私の体力でこの樹に登れるはずがない」 その髪飾りで月にまで行くなんて……夢物語だ。

ちょっと困ったような顔をして、でも楽しそうに笑っていた。 いいながら俺は、ちはやの顔をちらりと伺った。 「そこっすか、会長……」

それもまた、夢だったということか。俺たちのちいさなちいさな月旅行。

夜の闇が――白く、白く、世界が染まっていく。その月が、きらきらと光の粒になって広がっていく。

ルチアはまだ笑っていた。

夢は夢、

か

「残念だ、天王寺瑚太朗。でも、悪くなかった」

「敵として相見えたくはないものだな。 ルチア!」 鳳さんも――

「此花さん!」

「---できれば、こんな世界がよかったな……」

| 承託・・・

静流とルチアが手を取った。

そんな光景を眺めながら、小鳥がぼやく。そして、「なかなかうまくいかないもんだねえ」

俺の方へと小さく手を振った。

私たちも行こう、静流」 「それじゃコタさんや、またいつか」 小鳥がそう言って、ふわりと光の中へと消えた。ルチアが小さくなにかを呟いた。

呟いて二人は俺たちに背を向けた。それが最後だった。

「やれやれね」

会長は例によって辛辣な口調だ。 そして、言葉を口にしながら

| 天王寺、おまえは本当に

ちはやがなにかを言おうとして口を開いた。その声が聞こえるか聞こえないかのう そしていつのまに、真っ白な闇の中に、俺とちはやは二人で立っていた。





ちに……俺の意識はその白に溶けて消えた。

気がつけば俺は、ちはやんちの自室のベッドで天井を見ていた。

僅かに身じろぎをすると、体に感覚が戻ってくる。 首をひねって窓のほうを見る。東向きの窓で、夜が明ければ、

朝日が差し込むか、

くもっていてもいくらか明るくなる部屋だ。 視線の先に、夜明けまでは、まだ少し時間がある空が見えた。

_ う う ん ……」

寝ぼけた声を上げて、ベッドの上に半身を起こした。 妙に寝覚めがいい。よく寝た、ということだろうか。

なにか、違う。

体が起きているのだ。

まるで、ついさっきベッドに寝転がったかのように、

体は元気だ。

【本当に寝てたのか、俺……?)

その瞬間、 俺の脳裏にいくつかの光景がフラッシュバックした。

それらの美しい幻想が、脳内でまるでパズルのように組み合わされて、やがてひと 夜空、羽、月、庭、樹……

つの物語となった。

の物語は、現実とみるには、あまりに現実離れしている。

まるで今しがた、自分が体験してきたかのような、確かな感触を伴って。しかしそ

|夢……か?| 判らない。 半信半疑で、 俺は俺自身に問うた。

ふと、月が見たい、と思った。

を羽織って部屋を出た。 俺はのそのそと起き上がり、いくらかまともな服に着替えて、少し考えてから上着

(夢では、あのあたりだった……)

廊下を歩く。

然り、天井のその場所に、四角い入口のごときものがあった。

が開いた。 近くの戸棚を開けると、その中には鍵棒があって、それをつかうと屋根裏への入口

キイキイと音をたてる梯子も、夢と同じだった。

埃の舞う屋根裏の窓が、ひとつ開いていた。どきり、とした。 まさか……?

俺は恐る恐る窓に近づき、外の様子を窺った。

「ちはや……?」

そこに、ちはやがいた。

した。そして、そしらぬ顔で応えた。

そっと声をかけると、ちはやがこちらを見て、少し顔を赤らめ、スカートの裾を隠

「瑚太朗、どうしたんです、こんなところに」

「ちょっと、な」

その正面に、月が浮かんでいた。今しも地平線に沈まんとする満月だ。 言葉を返して、俺は屋根のうえに出て、ちはやの隣に腰掛けた。

「……月が、見たくなってさ」

「奇遇ですね。私もです」

| ふうん……」

二人して、その月を眺める。東の空は白んでいるが、西の空はまだ星空だ。

なあ、ちはや」 そういえば、訊いたことがなかった。 そのまま右手を自分の頭に伸ばして、その髪飾りに触れた。 しばらくして、ほう、とちはやが息を吐いた。

「その髪飾り、何か――特別なものなのか?」「なんです?」

いえ……ただ、小さな頃からつけていたとは思います」

ひゃんっ」 **「ふうん」** 思ったよりかわいらしい声がして、 俺は無造作にその髪飾りに手を伸ばした。 派手に頬をはたかれた。

「いや、なんか……」 そのじんじんする頬にリアルを感じつつ、俺は呟いた。

「な、なにするんですかっ!!」

「なんかさ、空でも飛べそうな髪飾りだなって」

「こ、瑚太朗!?」ちはやが目をまんまるに見開いた。

「ん? 何だ?」

「そ、その、空を飛べそうって……」 ちはやが言葉に詰まった。

その様子を見て、俺の脳裏に、

瞬時に仮説が構築された。言葉が口を衝いて出た。

「……夢?」

「そ、そうです!!」 ちはやが大声で叫んだ。

「ちはや、いま夜」

「あ……」

「そ、その……!」

おまけにここは屋根の上だ。

「ちはやも、見たんだな、夢」

今度は俺は、確信を以て問いかけた。果たして、ちはやは大きく大きく、頷いた。

「そ、そうです! それから、その……」

一月に?」

少し言い淀んで、

「小鳥の、庭で……」

「お茶会をして、木登りをした?」

「……はい。 あれが木登りって言えるか判りませんけど」

俺たちは黙り込んだ。

『夢……でしょうか」どう解釈したものか。

「その髪飾りで、月まで行ける?」ぽつり、ちはやが言った。

「いえ……そもそも、この髪飾りは、ただの髪飾りで、空なんて飛べません」

「どうだろうな……」「同じ夢を見たんでしょうか……」

でも、それはあくまでもいわゆる科学の雑誌であって――俺たちが今立っている、 科学雑誌か何かで、そんなことはあり得ない、という記事を読んだ気がする。

魔物やら超人やらという世界の地平の話ではない。

「……ある、かもな。そんなことも」

たとえばあの月

ちはやは応えず、月のほうを見た。

何があるのだろうか?

あの月に

遺跡。

廃墟。

「呼ばれた、のかも知れませんね」 ただひとつ、 ほんの僅かに残された命の息吹。

呼ばれた?」

゙そんなことも、あるかも、な」 ゙はい。あの……月の、あのちいさな あれはいったい、何だったのだろう。 芽に」

無論、考えたって判るはずもない。

でもなにか――とても大切なもののような気が、

したんだ。

なあ、ちはや」

いつか、月、行けるかな」

それは唐突な問いであった。 かしちはやは、 少しだけ真面目に考え込んだ。 はずだ。

年、六度目、最後の月面着陸。それから、月に行ったひとは、どこにもいません」 教科書に載っている話なら、 知ってます。一九六九年、 最初の月面着陸。一九七二

そんなに、

「そうか――」

「もう、昔話になっちまってるのか……」 「でも」

ちはやは、頭を上げ、月をじっと見やった。

「行きたいですね……」

「それなら、行こう」 「ああ」 俺は頷いた。確かに俺はそう思った。

「 え ?」 「いつかさ。オカ研で――みんなで行こうぜ」

みんなって……」

「さっき会ったみんなで、さ」

みんな……」 会長。小鳥。ルチア。静流。 誰のことを言っているのか、 間違うはずもなかった。

「ちはや、俺とおまえは、夢を共有していた。そうだろう?」 俺たち六人で、それでこそ、オカルト研究会なのだ。

「はい? まあ、そうですね」

「っていうことはさ」

俺は言葉を句切った。ちはやがこちらに意識を向ける。

「それじゃ、あとの四人だって、きっと、そうだったんだよ」

その俺の言葉をちはやが理解するのに、少しかかった。ちはやの顔に理解と希望が

花のように咲いた。

「瑚太朗……!!- 」 「まーつまり、なんだ。オカ研復活友の会、現在会員六名。だと俺は思ってる」

それは希望的観測に過ぎないのかも知れない。 でも、俺は信じようと思った。

「ですねっ!!」

信じていきたいと思ったのだ。

「なあ、ちはや。いつか、 行こうな――月までさ」

だけど、ちはやは大きく頷いた。 まるで夢物語みたいだった。

それから、満面の笑顔で言ったのだ。

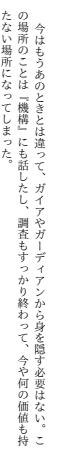
その時俺たちは、確かに、そんな約束を交わしたのだった。「はい、絶対ですよ!」

final episode: "moon"



きちんと覚えていない。 ただ、瑚太朗君になだめすかされるようにして機構へ戻って、気がついたらあたし 正直なところ、あたしはひどく取り乱してしまって、あのあと何がどうなったのか、

こともある、 は――森にいた。 ずっと昔、 あの場所だ。 篝をかくまっていた場所。そしておそらくは、あたしのアトリエだった



所に寝転がって空を見上げることがある。 ただ、ここは今でも確かにあたしだけの場所で、ひとりになりたいときは、この場

その境目にあいた小さな穴から、あまりにも濃厚にむせる森のただ中から、 森ははるか地平線の向こうまで広がり、空は無限の彼方まで続いている。 ――こうして、森にぽっかりとあいた穴から空を見上げるのは、好きだ。 あたし

はひとりきりで、空にゆったりと雲が流れるのを眺めていた。

――声がして、顔を横に向けた。「ここにいたんですね」

聞き覚えのある声だった。

その声の主は、な「……津久野先生」

その声の主は、森の木々のあいだから、あたしの寝転んでいる方へと、静かに歩い

『機構』のガイア側の人で、あたしの先生でもあるひとだ。 半身を起こして、小さく頭を下げる。

「……ご心配、おかけしました」 あたしの言葉に、津久野先生は、ちょっとだけ笑ってくれた。

「いいんですよ。生徒は先生に多少の迷惑をかけるくらいが、ちょうどいいんです。

それに――」

すこしだけ、躊躇って。

――あなたのほうが、私よりずっと大変なはずですから」

「あの……『舟』の魔物使いですからね、あなたは。女の子ひとりが背負うには、ちょっ そうですか?」

「嫌じゃ、なかったんですけどね――」

と重すぎると思ってしまいますよ」

まったく、随分と参ってしまっているらしい。 言ってから、言葉尻が過去形になっているのに気づいた。

「――今宮さんに、すこし聞きました」

聞いた、とは……つまり、「ポチ」が瑚太朗君だと、あたしが思っている、と。 あちゃあ、と思って、すこし泣きそうになったが、この状況では仕方がないことだ

フォレストのマスターに悪意があるわけではないのは、わかる。

と割り切った。

てみるつもりですけど、そのような現象はちょっと……聞いたことがありません」 「あなたの記憶のことは、正直、私もよくわかりません。ガイア時代の記録に当たっ

「ですよねえ……あたしも初耳です」

だ。でも、あたしに似たような事例は、どこにも見当たらなかった。 はは、と苦笑いした。自分でも、わからないなりに難しい教科書にあたってみたの

ガイアの技術体系のアプローチを組み合わせて、アウロラの理解はかなり進みました。 「アウロラの働きは、今でも随分未知数です。ガーディアンの理論的なアプローチと

けれど、その本質については、十分に解明されたとは言い難い状況です」

はい

に至っている……とか、そういうことに近いのかも知れない。聞きかじりだし、今の それはたとえば、旧時代の相対性理論と量子力学がうまく整合性を取れないまま今 い香りがする。

時代、そんな旧技術には誰も興味を持たないのだけれど。

「だから、神戸さんの記憶、それがなにかしらのアウロラの働きでもたらされている

としても、不思議ではありません」

「いいじゃありませんか」 「疑似科学っぽいですね」

定できない。アウロラで説明がつくなら、そう思っておけばいいんですよ」 「大切なのは、神戸さんがそう思っている、ということです。そのことは、誰にも否 まぜっかえしたけれど、津久野先生は優しく受け止めてくれた。

「……ありがとう、ございます」 ふう、と一息つくと、津久野先生は、あたしの隣にごろりと寝転んだ。ふわりとい

スーツ姿だけれど、この先生はたまに、こういうことをする。 あたしもそれにならって、また草の上で仰向けになる。空が無性に眩しかった。

「天王寺さんのことは、私もすこし知っています」

「……そうだったんですか?」

そう、ですか」 「今宮さんほどではありませんけど、少々――悪い奴じゃなかったですね」

た。ガーディアンでも、ガイアでも、なにかの力を持っていると、そうなりがちなん 「少なくとも、自分の技術で鼻を高くして、回りを見下すようなことはしませんでし

「瑚太朗君らしいです」

ですけどね」

「まったくです」

やれやれ、とでもいいたげな口調だった。

「……だからこそ、あなたには、今話しておいた方がいいと思いました」 ややあって。

話。

考えるまでもない、瑚太朗君のことだ。

津久野先生は、なにかを教えようとしてくれている。

「魔物がどういうものか――今更復習する必要はありませんね、あなたに」

津久野先生の授業で、何度も聞いた話だ。

また、黙って頷く。

それに。

――少し迷ってから、付け加えた。

お父さんと、お母さんのときに」

「人間と魔物とは、

決して対等な関係にはなりません。

使役する側と使役される側。

津久野先生は何のことか、 とは問い返さなかった。

知っていてくれたのだ。

たぶん、ずっと前から。

「天王寺君も、ですね」 何かを言いかけて、ふう、となにか深い息のようなものを、津久野先生はした。

「……魔物。単に事実として、彼は魔物です」

最初から。 それは、分かっていたことだった。

意志のあるものと、意志のないもの」 **一**でも……」

言葉が続かなかった。

その原則は、お父さんとお母さんのときに、いやというほど分かっていた。 たとえ人間をもとに魔物が作られたとしても、生きていた時と同じような仕草で、

ので、 同じような言葉を話しても、それは単に、魔物の材料になった肉体のクセのようなも 「意識が残されているとか、そういうものではない。普通は、そんなことは

ありえないのだ。 瑚太朗君は魔物で。

ただ、それだけの関係なのだ。 あたしが使役し、瑚太朗君が使役される。 あたしは魔物使いで。

そんなことは、ずっと昔から。

「……わかって、ます」 そうですね。あなたは聡明な子ですから」

手で拭うのは、いやだった。

なぜだか、涙がこぼれそうになる。

そうかも知れないが、今は愚かでありたかった。

ければなりません」 「……そしてね、あなたの先生として、神戸さん。もうひとつ、大切なことを教えな ぬるいものが目尻からこぼれて、こめかみを伝って落ちていくのがわかった。

が、津久野先生は今度は――敢えて、だと思う――言葉を続けた。 わずかに嗚咽が零れた。 無意識の抗議だった、のかも知れ ない。 「……っ」

たの記憶の謎も解明されていない。だから、天王寺が 「神戸さん。今の我々にとって、天王寺の力のほとんどは未解明です。そして、あな 何か特別な力で――過去の

彼はね、あなたよりもずっと遠くに行きます」 記憶を保持している可能性は、あるかも知れません。でも、 仮にそうだとしても

| え……?|

その言葉の意味が分からない。

「あなたは、魔物使いです。ですが、人間です。生まれて、生きて、それからいつか 津久野先生は、一瞬だけ目を閉じると、それから――決然と口を開いた。

言葉が区切られた。

は死ぬ、ただの人間です。でも、彼は違う――」

いた。 「そうです」 その言葉が頭に入ってきて――それが意味することに気づいて、あたしは目を見開 津久野先生が静かに頷いた。

彼は、 「いつかあなたがたどりついた星で、あなたが人間として死んでも、天王寺君は かに引き継がれます。 そのあと何万年、 次の魔物使いの手で、また星間宇宙を駆けるでしょう。彼を操る役目は、必ず 何億年と、彼は宇宙を飛び続けることになるのですよ」 もし仮に、 貴方が死ぬまでその役目を果たし続けたとしても

.

ないのか。 あたしが瑚太朗君の魔物使いであることに、感謝すればよいのか、それともそうで

でも、 判断することはあきらめた。 目の前になすべきことがあるのは、単に気が紛れるというだけでも有り難い

からない。 緑の大地にしか見えないそれを、なんと呼べばしっくりくるものだか、あたしには分 『塔』に登って、そこから空のほうへと船体を浮かべることになっていた。 瑚太朗君の船体拡散実験は、もう地下のホールでも、石の町でも全く足りないので、 頭上に巨大に広がる瑚太朗君の体は、もう『舟』と呼ぶにも巨大すぎた。遠目には

要がある魔物たちも地上で準備されていた。 内部にはもう、人が生きていくための設備も整えられていて、瑚太朗君に乗せる必 接続されたリボンから、瑚太朗君の船体の情報はよく読み取れた。

の役割だ。 空気とか水の循環系は小さい魔物でまかなうのは難しいので、瑚太朗君

それらはまるで、 瑚太朗君のもうひとつの血液のように体中を巡ってい

ていた。 あたしは、その巨大な瑚太朗君の下で、自分のなかにある不思議な記憶を思い返し あたしたち人間を生かすための装置だ。

ある時は、 ある時は、 ある時は、 それはもう、全く整合性のない、説明のつかない記憶の数々だった。 瑚太朗君と二人で世界の終わりを見届け。 他の誰かと生きていく瑚太朗君を遠くから見守り。 終わらなかった世界で、 瑚太朗君と二人で生きて。

でも、それらはすべて、あたしの記憶に他ならない。 それはまるで、いろいろな物語を読んでいるようで。

離れていても、あたしの記憶のすべては、瑚太朗君とともにあったのだ。 そして、それらのすべての記憶は――どうしてだか瑚 太朗君とともにあった。

ごく自然なことだと思えた。 不思議だったけれど、なぜだかすっと納得できた。

そして、あたしは思う。

やっぱり――「瑚太朗君」、と呼びたいな、と。

時代でいうところの、スペース・シャトルの軌道よりも高いことになるけれど、 瑚太朗君はもう、最高で高度一○○○キロメートルまで上昇していて、それは旧い 今日も瑚太朗君の船体の稼働状況は全く問題なく、実験はつつがなく終了した。 瑚太

う不要だろうと思われた。 だった。 その姿はもう、ほとんど空に浮かぶ星のようで、これ以上の極限環境適応試験はも

朗君自体の大きさがもう全幅七○○キロメートルを越えているので、存在感は圧倒的

もう、旅立ちの日がやってくることになっている。 実際、『機構』の試験計画では、もう月までの試験航海が間近で、 それが終われば

「よっ、お疲れさん」

てくれた。 『機構』のオペレーションルームに戻ると、今宮さんがなんでもない軽口のように言っ

「ま、今日は店仕舞いだな。二人ともゆっくりしてこいよ」 瑚太朗君が頷き、ちらとあたしのほうを見た。

「だ、そうだぞ、

「そうか」 こくり、頷く。

ふたりして、歩き出す。 心配げな視線をいくつか感じたけれど、今はもう、気にしないことにした。

行くあてがいくつもあるでもない。 ふたり、無言で歩いた。

……あるいはヒナギクの丘か。 たぶん、そうだろう。

家か、部室か。

みんなの場所よりも、今は二人でいたい。

びいているだけで、すっかり青々と晴れ渡っていた。 船体拡散実験の日だから当たり前なのだけれど、空にはぽつりぽつりと薄雲がたな

これでも女の子なので、ちゃんと地面に敷くシートは持ってきているけれど。 ここにくると、あたしたちはいつも、あの大樹に背中を預けて、地べたに座り込む。

|言葉もなく見上げる空に、ひゅう……と風が吹いた。

首のマフラーを、きゅっと締め直した。街の外は寒い。

冬もあり、夏があり、 小さい頃は、この町は――この星は、そうではなかった。 四季があった。

でも、それらはもう、遥か昔の出来事だった。

話をしなきゃいけない、と思った。この星は死につつある。

時間はあまり残されていない。

星の規模でも、あるいは個人的な意味においても。

「あのね」

声をかけると、 瑚太朗君は小さく身じろぎをしたようだった。 るはずだった。

それでも。

思い返してみればこれも、瑚太朗君のクセだったような気がする。 いている、というサインだ。

——色々、 思いだしたんだ」

うん

色々、

瑚太朗君の返事はない。

それはそうだろうな、と思う。

もし瑚太朗君が瑚太朗君なら、それがどういうことなのか、 瑚太朗君は魔物で、あたしは魔物使い。

嫌というほど知ってい

それでも――話をしないといけない、とあたしは思った。

ある。 言葉を交わすことでは伝わらないこともある。かえって駄目になってしまうものも

でも、言葉でしか伝わらないことも、あるのだ。 あたしは、口を開く。その名前を呼ぶ。その名前で。

……何のことだ?」 -瑚太朗君は……最初から覚えていたの?」

拒絶の問いではない――と思った。 あくまでも優しく、瑚太朗君はそう答えてくれた。

話を聞いてくれているのだ。

「いろいろ、ね」

「いろいろ、か」

瑚太朗君は、ひょいと首をあげた。

「オレは、まだやらなくちゃいけないことがあるからな」

「……そう、だね」

「コトリには、オレを操縦してもらわないと困る。魔物ってのは、ひとりじゃ何もで

「そうだね。知ってる」きないんだ」

答えながら、胸がずきりと痛んだ。

瑚太朗君の「コトリ」は、やっぱり、 あたしにも、やるべきことがある。 ポチの声だった。

これい悪でにようことなど、ごとらはごごにそれは同時に、瑚太朗君の願いでもある。

それを無下にすることなど、できるはずがない。

「……操縦、しなくちゃだねえ」 たとえ、それが瑚太朗君の長い長い旅の、 ただの最初の一歩に過ぎないとしても。

短く答えて、それから一瞬だけ間があって。「ああ」

ああ、そうか――と、あたしはようやく理解した。 たぶん、「ごめんな」、という言葉だったような気がした。 瑚太朗君が、なにかを小さく呟いたような気がした。

やっぱり瑚太朗君は、瑚太朗君なんだ。瑚太朗君は最初から全部、知っていたのだ。

魔物として、人々の舟として。

そして――瑚太朗君は、

一人で行くつもりなんだ。

だから、あたしは。 人としてのあらゆる喜びに背を向けて。

瑚太朗君は何も答えてはくれなかった。「ね、瑚太朗君……背中貸して」

その背中にぎゅっとおぶさると、だらりともたれかかった。 だけど、黙って大樹から背中を離した。

思わず涙がこぼれそうになる……のをぐっとこらえて、それからあたしは言った。 やっぱり――瑚太朗君の匂いがする気がした。

やっぱり瑚太朗君、優しくないねえ」

一人で行ってしまうのだ。瑚太朗君はいつもそうだ。

そして、ふと。 知ってはいたけれど、やっぱりきついなあ、 と思った。

「ばれたか」

おぶさる瑚太朗君の体に、

違和感があった。

コ、リニ汁、ウはいはごばないことその声に、苦笑いの成分があった。

「コトリに分からないはずがないよな。考えてみれば……繋いでみるといい」 そうしてみれば、すぐにわかった。わかってしまった。 言われ、おそるおそる契約線を瑚太朗君につなげる。 わかりたくなかった――が、 瑚太朗君は、まるで聞き分けの悪い子供をあやすよう

に、首を横に振って見せた。 「……そうだな。オレはもう、そろそろ、この姿を保てなくなる。オレは舟だ。 人の

姿でいられるのは、あといくらもないだろう」

共に行くことができないなら、なにを話しても虚しい――というのは、 瑚太朗君は結局、 、なにも話してはくれなかった。

頭では分

かる。 でも、それはひどく寂しいことだ……と、 あたしはぼんやりと思った。

夜である。

電気なるものはとっくに世界から姿を消していて、魔物で灯りを点すのにも命がい ベッドにひとり寝転がって、薄暗い天井を見上げていた。

夜はすっかり暗い時間になっている。

ただ――ベランダから差し込む薄青い月明かりがぼんやりと床を照らしているばか

るので、

りだった。

どうにも寝付けない。

あたしはベッドから降りるとスリッパを履いて立ち上がる。

なったのだ。 月に誘われた、などというと子供じみているが、なんとなくベランダに出てみたく

窓を開けると、冷えた空気が頬を撫でた。

結界の内側でも、夜の気温はかなり低めに設定されている。 街はすっかり静まりかえっていて、 風の音が寒々しい。

は欠けながら、ずっと回り続けているのだ。 だった。月というのは不思議なものだと思う。 その結界越しに月を見上げる。真夜中、下弦の月が東の地平線から昇ってくる時間 街の気温を保つにも、 命が必要だ。 いつも地球に同じ顔を向けて、

満ちて

小鳥——

女の子の声のようだった。 誰かが、 あたしの名前を呼んだ気がした。

辺りを見回してみるが、 誰もいない。

-----誰?」

なく広がる不毛の大地だった。

家族は皆、 気のせい、 だろうか。 寝静まっている。

と、また。

小鳥

どうにも妙な感じに響く、 誰かが呼んでいる。 頭の中に響くような声。 小さな声だ。

どこから聞こえてくるのか、まるでわからない。

そして、気がついた時には、あたしは――月にいた。 小さく問いかけた瞬間、 突然——、 一陣の風が吹き抜け。







はじめに目に入ったのは、夜にしても余りにも漆黒に過ぎる星空と、足元に果てし

自分が――全く理解しがたいことに――月に立っていることを知ったのだ。 ――それが他ならぬ地球だと理解した瞬間、あくまでも論理的な帰結としてあたしは、 そして、見上げた星空に、見慣れないものがぽっかりと浮かんでいるのに気づいて

(夢……?)

そう、かも知れない。

なにしろ今は夜の時間だし、ついさっきまであたしはベッドに横になっていたのだ。

夢であっても不思議ではない。 なにより。

月面には空気がないはずなのに、 あたしは息ができているし、

それはあたしだけじゃなくて、

目の前に、もうひとりの女の子さえいたのだから。

それは。

銀の髪に黒いビロードのドレス、そして真っ赤なリボン。

かつては恐ろしかった、でも今や懐かしいその姿は

なの?」

淡々と言うと、篝はとことことあたしの方に歩いてくる。

その様子に、ふと。僅かな……違和感を覚えた。

違う気がしたのだ。 篝から漏れるアウロラの感触が、あたしの知っている篝のそれと、ほんの少しだけ

「あなたは……?」

「見せる?……何を?」 問うと篝は、リボンをひとつ生やすと、それをまるで指さすように……真上に向

誘われるようにあたしは、目線を空に向けた。

ロニンダレジー

――空を飛んでいた。 風を切るようにして前に向かって飛んでいる感覚が

青空、ではない。ただ、なにかの流れの中を、

どちらを見回しても星空で。眼下には大地もなく。

つまり、あたしは遠く星を離れて星間宇宙をひたすらに飛んでいた。

「――篝?」と、隣に気配を感じた。

「そうです」

あたしに寄り添うようにして、篝が立っていた。

「ひさしぶり……でいいのかな」

「はい。いちどだけ、この月で、瑚太朗と一緒に」

言いよどむ。「一度だけ?」でも……」

「ずっと昔、会ったことがあるよ。それに――何度も、いろんな世界で」

そこではじめて、篝は微笑んだ。

「知っていますよ、神戸小鳥。でも、それは私とは別の篝です」

「そう……見てください」

別の篝?」

舟であろうことは感触で分かったが、それを舟と見て分かるわけではなく、濃密な 篝が指さす先――宇宙に広がるごくごく薄いアウロラのなかを、疾駆する舟があった。

アウロラの塊であることだけがわかる。

僅かに緑がかったて、青白く輝くなにかの塊。 その駆ける舟の周りをゆっくりとまわる小さな舟、小さなアウロラ。

それは、まるでー 地球の周りを回り続ける月のようだった。

「私の記憶です。私たちがこの星に来るまえの記憶です」

これは……?」

『私たち?』」

「はい。貴方が知っている篝が、これ」

隣に立つ篝が、大きな舟を指さした。

「私はこれです」 そして、すっと指を動かし。

「私は、篝。月の篝。貴方が守り、天王寺瑚太朗が殺したあなたたちの星の篝と共に 大きな舟の周りを回る、小さな舟。

きて、ずっとひとりでこの月にいる篝です」

なにをしているのだろう? 大きな舟と小さな舟は、星々のあいだを駆けながら、ときおり星に立ち寄っていた。

じっとその光景に目をこらす。

すると――ああ ----大きな舟は、 種をまいていた。

播いていくのだ。 星々のあいだを駆け巡り、ときに立ちより、その背にいる生命や生命の種を星々に

永きにわたって繁栄したり、あるいはあっけなく滅んでしまったり。 背後を振り返ると、生命は星に満ちたり、あるいは満ちなかったり。

だが、それはそれぞれの生命の問題でしかない。 星を巡りながら、大きな舟は、ただひたすらに種を蒔き続けている。

最後に地球と月にたどり着くまで、ずっとそうしてきたのだ。

その理由に、思い当たるものが……あった。 遥かなる宇宙の種蒔きの光景を見ながら、あたしは自分の胸がひどくうずくのを感

ることはない。 大きな舟のすることを種蒔きとは言うが、そのまいた種がどうなっていくのかを知

舟は、長い長い旅の途上にいるのだから。

だから、それは種蒔きであると同時に――別離なのだ 星に留まるなら、それはもう舟ではなくなってしまう。

また星に立ち寄り、また別れがある。

星に立ち寄り、

別れがあり。

なんという――孤独だろう。

そして、この子は。

隣に立つ篝。

この子は、その孤独を、ずっと見守り続けてきたのだ。

もうひとりの篝がどんなに救われたことだろう。

そして彼女たちが地球にたどり着いたあとも、この子は月として、ずっと地球を見 そんな孤独に、ひとりではとても耐えられるまい。

守り続けていたのだ。

自分のことではない。そしてあたしは突然、激しい胸の痛みを自覚した。

彼女たちふたりは、その旅路は、孤独ではなかった。篝たちの旅路のことでもない。

彼女たちは、ずっとふたりでいたのだから。

でも――瑚太朗君は。

そう、この胸

の痛みは。

誰も伴わず、 その孤独の道を ただひとりで、あまりにも長い別離の道を行くことの。 ――瑚太朗君がひとり行くことの、 痛みなのだ。

気づいてか気づかずか、篝が、ふとあたしに顔を向けた。 あたしは思わず、ぎゅっと胸を押さえた。

その表情にはっとする。 「そう。小鳥。あの人には――誰かが、必要です」

その顔のまま、篝は、小さく、でもはっきりと、あたしにむかって言った。 あまりにも優しげな、慈母のような柔和な顔。

――その言葉を、今でも覚えている。

かと思うのです」 いるのは、もう、 ·だから小鳥――私の力を、あなたにあげます。あなたが行くのです。私に残されて ほんの僅かな力だけです。それはもう、あなたに託すべきではない

**

夢、ではないと思う。 気づいたときには、あたしは夜のベランダに立ち、星空を見上げていた。 何もなかったかのように輝いている。 月はまる

なぜなら――月が出ているのだ。

篝の声を、今でも鮮明に思い出せる。 あそこにいる篝が――月の篝が、あたしに声をかけたのだ。

そう思った。うん、まずはゆっくりと寝よう。

**

土曜日だから学校も機構もないから、昼まで寝ていてもいいのだけれど、 寝覚めは爽快だった。

こんな朝もいいだろうと思った。

たまには

一階に降りると、みんなはまだ起きてきていない。

月にたり、道へによった。時計を見て驚いた。まだ五時半だ。

朝ご飯でも作るかな、と思って台所に立つ。朝と言うにも随分と早かった。

食卓のかごには、みかんがいくつか残っていた。

それならあとは目玉焼きとパンがあればいいだろう。

だろう――と思ったところで、足音がした。 常温保存用のベーコンは、日持ちしない割にひどく塩辛いから、二、三切れでいい

フライパンと網を取り出して、食料庫から卵と塩漬けベーコン、それにパンを取り

て、なんだかそれが妙におかしかった。 お母さんだった。相変わらず、起きているのか寝ているのかわからない目をしてい

「おはよう」

「うん。おはよう。今日は早いわね」 「なんだか起きちゃって」

「あら、ベーコンエッグ。私ももらっていいかしら」

まず、ベーコンを二人分、切り分けた。

「もちろん」

換気のために窓を開けてから、コンロの魔物に火をつける。

フライパンにベーコンを乗せて、菜箸で油を回すようにした。

それから卵を二つ割り入れる。

蓋をしてから、その隣に網を置いて、その上にパンを載せた。

三分も待てば、朝ご飯のできあがりだった。

じゅうじゅうといい音がするが、いつまでも味わっていると焦げてしまうのだ。

お母さんがひょいとコンロを覗き込んだ。

いいの?」

「サラダ、作ろうか?」

「食べないとダメになっちゃうわよ。それと、クルトも」

贅沢!」

けれど、まあ、たまにはいいだろう。 葉物野菜は比較的貴重な食べ物だ。 お母さんと二人で、というのはちょっとずるい

お母さんがレタスをざくざくと切っている横で、いい具合の目玉焼きとパンをお皿

ほぼ同時だった。 にあげる。 さすがにお母さんは手早い。 お酢と油のドレッシングでシンプルに、できあがりは





一ごちそうさま」 「ごちそうさまでした……ベーコンエッグ、 おいしかったわ、 小鳥」

「そうかな。よかった」 そんなに手をかけたわけではないけれど、そう言ってもらえると嬉しいものだ。

やっぱり、生野菜はおいしい。 うちでは、きちんと手を合わせて、食後の挨拶をすることになっている。

ちゃんとした朝ごはん、というのは、得がたい物になってしまった。

ふと窓の外を見ると、まだ夜の色を残した空に、朝の鳥が鳴き交わしながら飛

その飛ぶ空のそのさらに遠くに、瑚太朗君が巨大に浮いていた。

んでいる。

「そうだねえ……」

「彼、今日も大きいわね」

うより、定義上はもう宇宙空間に「係留されている」ということになるらしい。 瑚太朗君の全長は、もう一○○○キロメートルを越えていて、空に浮いているとい お母さんが入れてくれたハーブティーを口にして、それから空を見上げた。 これはフォレストのマスターの受け売りだけれど。

――やっぱり、お母さんには色々わかってしまっているのだろう。

お母さんはそのあたり、 鋭い。

れているのだ。 先生をしているのもあるけれど、ずっと一緒に暮らしていて、あたしを見ていてく

感謝してもしきれない、と思う。

……ね、小鳥」

なに?」

「そうだね……そう聞いてる。その……本人から」「彼ね、そろそろ――サイズの調整が難しいって」

「あら、そうなの。なあんだ」

なぜかお母さんは、安心したように言った。

一呼吸置いて。

「こういうのはね、本人同士でお話ししているなら、それが一番いいかなって」

なんだろう、と目線を向けると、お母さんはひとこと付け加えてくれ

ぎょく ヘーアごさ かここ になっていだいがお母さんはすこしだけ、遠い目をした。

····・なに?」 「でも、ひとつだけ……あなたに言ってあげられることがあるかもしれないわね」

「そう。あの日ね……」

そして、その日は、瑚太朗君が---。 世界の全てが変わってしまった、 あの日。あたしたちが「あの日」といえば。 あの日に他ならない。

ね、この子のことを頼む、って」 「――あの日、すべてが終わるまえにね、天王寺に頼まれたのよ。

写真を見せられて

.... 言葉を失った。

思いだす。

『瑚太朗君、こわい。放っておいたら、いなくなっちゃいそうで……』

『あんたなんか嫌い。死んじゃえばいい!』 『まだ、一緒に遊んでもらってないっ!』

たのだ。 そんなことを言い放ったあたしを……瑚太朗君はお母さんに、頼む、と言ってくれ

でも、あの言葉はひどいなあ……と、その時の瑚太朗君のことを思いだして。

それは、冷たい涙ではなかった。

いつのまにか涙がこぼれていた。

確かにそこに、なにかあたたかいもののやりとりは、あったのだ。

「そうよ。天王寺は、あなたのこと、ちゃんと見ていたのよ」 「そう、だったんだ……」

抱きしめてくれた。 お母さんがふと立ちあがった。そして、あたしの背後に回ると、ぎゅっと背中から

昨日あたしが、瑚太朗君にしたように。

はげましてくれているようで。でもそれは、あたしよりもずっと優しくて。

「大丈夫よ、小鳥」

「お母さん……」

「あなたが行きたいところに行きなさい。あなたなら、大丈夫」 まるで、小さな子をあやすように、頭を撫でてくれて。

あたしは、あたしの胸に回された手を、そっととった。

そう言ってくれたのだ。

れでも。 その手をぎゅっと握って――温かくて、ずっとこうしていたいとも思ったけれど、そ

「うん」

「いってきます、お母さん」 あたしは小さく、でも確かな声でつぶやいた。

「はい。いってらっしゃい、私のかわいい小鳥」

空は青く晴れ渡り、月はまだ沈まず西の空にあり、命の膜がうっすらゆらめていた。。 あたしは我が家をあとにすると、ヒナギクの丘に向かう道を歩き出した。

郊外に出て、空が広くなると、私は契約線を瑚太朗君のほうに伸ばしてみる。 瑚太朗君はその向こうに、悠然と巨大に浮いていた。

瑚太朗君は、まるであたしの手を取るようにして、その契約線をつかまえてくれた。

「ねえ、瑚太朗君、こっち見える?」

『ああ』

声が直接頭に響いた。

ちんと言葉にしたかった。 随分大きくなったねえ」 口に出さなくてもあたしの声は瑚太朗君に届くはずだけれど、それでもあたしはき

『そうだな』

「また小さくなれそう?」

『どうだろうな。あと何回か、くらいだろうな』

「そうかあ……」

『そっちに行こうか?』

落ち着かせてくれる。

「いいよ。大変でしょ」

やはり、そうか。

『まあな』

たぶん今までも、

いくらか無理をして、あたしにつきあっていてくれたのだ。

『何がだ?』

「いろいろ」

『よくわからないが』

『用事はそれだけか?』「いいのさ、それで」

「ううん。そういうわけじゃないんだけど、調子どうかなって?」

「そっか、うんうん」 『問題ない。特に新しい実験をしているわけではないからな』

ヒナギクの丘は、その名の通りにいつもヒナギクが咲いていて、 不思議とあたしを

そんな話をしているうちに、いつのまにかあたしたちは、ヒナギクの丘にたどりつ

なんだか、ひどく懐かしい気がした。

゙よいしょっと」 思えばしばらく前、 瑚太朗君はこの樹から現れたのだ。

大樹の根元に座り込んで、 空を見上げる。

瑚太朗君が浮いている。

そして、そのはるか遠くに、

まるで背景のようにして---

白い真昼の月があった。

あたしは、そっと口を開く

「ねえ、瑚太朗君」

『何だ』

「あたしやっぱり、 瑚太朗君と一緒に行きたいよ」

『……それはそうだ。来てもらわないと困る』

ううん」

あたしはゆっくりと首を振った。

「それはね、瑚太朗君とどこまでもいきたい、っていう意味」

瑚太朗君の言葉がかすんで消えた。

「コトリ……』

゚それは……無理だ。オレはどこまでも行くが、 コトリは ――人間だからな』

『それは……告白か?』 知ってる。 でも、それでも一緒に行きたいよ」

として永遠に生きるなんていうのは、まともなことじゃないんだ』 『ありがとう。でも、やっぱりオレは――コトリには、人として生きてほしい。

「そうだね。そうかも」

『それは、オレが為すべきことだからな』 「その、まともじゃないことを、瑚太朗君はやろうとしているんだよね」

そうだよね。それは分かってる。

でも。

「知ってるよ。でも、だからこそ、あたしも瑚太朗君と行きたい」 あたしはゆっくり立ち上がる。

⁻あたしはね、瑚太朗君を一人にしないのが、 「コトリ……』 あたしの生きている意味だと思うから」

「――ね、そうでしょ、篝?」 天に向かって手を伸ばして、言った。

瞬間、空の彼方の月が激しく輝いた。

そして、三十八万キロメートルの距離を超えて、赤いリボンが伸びてきた。

胡太

その横をすり抜けてきたリボンを、瑚太朗君が背後の月を振り返った。

あたしは右手でつかんだ。

篝もまたあたしをしっかりと掴み、 あたしは一瞬で虚空へと引き上げられていた。

----見れば。

るようにして月の周りをくるくると回っていた。

月の周回軌道に真っ赤なリボンが輪を作り、あたしと篝はその輪の上でダンスを踊

「来てくれたのですね、小鳥」

それだけで、篝には通じた。

「行くのですね」

「うん。だから篝、あなたの力を貸して」

「ありがと……」 「はい。最初から、そのつもりでしたから、

私は」

とてもあたたかい感触だった。 あたしは、そっと篝の背中に手を伸ばした。篝の手も、 あたしの背中に回される。

そして、篝は歌うように言った。

「行きなさい、小鳥。どこまでも。 彼は大地、あなたはその月」

篝のリボンが、あたしを包み込む。

があたしに流れ込んできた。 そのリボンがまるでほどけるようにして、 篝がかたちをうしなっていき――その力

あたしがあたしじゃなくなっていくのを感じた。

くのは、こんな感覚なんだろうかと思った。

でも、それは不思議といやな感覚ではなくて、まるで――さなぎが蝶に脱皮してい

ささやかにリボンが目の前で揺れているばかりだった。

気がつくと、篝はもうほとんど残っていなくて、背中の暖かな掌の感触もやがて消

うん 「小鳥。あの人を頼みます」

消えてしまった。 最後にその言葉を交わすと、篝は---あたしに吸い込まれて消えた。

あたしは、すうっと大きくアウロラを吸い込むと、手足をめいっぱいにのばした。 でも――その力は、篝は、今はあたしの中にあり、 あたしの中にいるのだ。

それはまるで真っ赤な蝶のように見えるだろうと、 手足は赤いリボンになり、ふわりと羽のように星間宇宙に広がっていく。 あたしは思った。

4

私はゆっくりと銀の星をあとにした。

銀の星は、すべてのアウロラを失って、ただ静かに佇んでいるばかりだった。 最後にすこしだけその光景を見つめると、かつてはそこにあった私の力で赤いリボ

あたしの体は、虚空を泳ぎだした。ンの羽をふわりとはためかせる。

てきた。 今や彼は巨大な植物の塊で、ほとんど月と同じくらいの大きさで浮いていた。 でも、その表面の森の片隅に、あたしは懐かしい面影を見つけることができた。

やがて、行く手の青い星が大きくなってきて、その隣の静止軌道に、

彼の姿が見え

「小鳥……!」

彼は-――瑚太朗君は、彼の上に降り立つあたしを、優しく抱きとめてくれた。

「お前は……」

"あたしも行くよ。 一緒に」

それは、遠い旅だ。遥かな旅になるはずだ。

それでもよかった。

あたしであるアウロラが、きっとそう言っている。 あたしはそれでもよかったし、今のあたしには、 それがごく自然なことに思えた。

「でも、今のお前の体じゃ、 まだ俺とは一緒に行けない。 長い旅になるんだ」

うん

あたしは笑って頷いた。

たりないもの。

そんなことは知っている。

だから。 彼も、もう分かっているはずだ。 満たされなければならないもの。

「だから、 瑚太朗君、あなたを、あたしに、 ください」

もはや、瑚太朗君は何も言わなかった。

憶のどこかにいる瑚太朗君のものだった。 ただ、しかたないなあ、という苦笑いを浮かべていて、それは確かに、 月にして」 あたしの記

「瑚太朗君が人類の舟なら、あたしを瑚太朗君の、 瑚太朗君は、 あたしを抱く腕に力を込めた。

269 は泣きそうになった。 その腕は、 あたしのリボンの腕よりもずっと人間の形をしていて、なんだかあたし

を書き換えて」 その――あたしの願いに、瑚太朗君はそっと頷いた。

「瑚太朗君の力で、あたしを書き換えて。ずっと二人ではいられない、あたしの運命

「ありがとう。ずっと一緒に、いてくれたんだな、小鳥」

そして、すこし困ったような顔をして、訊いた。

「あのさ……お前、そんなに俺のこと好きだったっけ?」 その問いがあまりにも瑚太朗君らしくて、あたしは思わず微笑んだ。

「そうだよ。知らなかったの?」

それから、

そうして---。 悪戯っぽくそう答えてから、瑚太朗君を思いっきり抱きしめた。

そうしてあたしは、瑚太朗君の月になったのだ。

それから、

さようなら。おやすみなさい、瑚太朗君。

いつか――いつか目が覚めて、また会える、

はるか遠いその日まで。

うものを造りだして以来、千年、 ふれかえり、盛んに帽子を振って別れを惜しんでいた。それはたぶん、人類が舟とい 舟はすっかり出航の準備を整えて、時が来るのを待っている。波止場には人々があ 万年にわたって絶えることのなかった光景だ。

必要なだけの時間が過ぎて、やがて―

り始めた。もう、誰に導かれるでもなく、己の力で、大海原に漕ぎ出していくのだ。 グボートが舫いをほどくと、舟はもういちど汽笛を鳴らし、ついに自らの力で波を蹴 タグボートに引かれて、港の外へとゆっくりと進んでいく。そして、灯台を越え、 と新天地への予感をいっぱいに乗せて、舟もまた、万感の思いであるに違いなかった。 と消えた。私は、ほうっとちいさく息を吐いた。これが私たちの旅立ちなのだ。 やがて、ボゥーッ……と出航の汽笛が響き、それを合図に舟は動き出した。巨体を 港は少しずつ――しかし、あっというまに遠くなっていき、やがて地平線の向こう 私はその光景を、少し離れたところから見おろしていた。人々の別れと、そして旅路 目を閉じる。思い浮かぶのは、 懐かしい面影。

---そうして、

――そうしてふたりは、長い長い旅に出たのでした。

そんなことを幾千幾万と繰り返しながら、空虚の海を渡っていくのです。 ひとつ、またひとつと星を訪れては種を蒔き、そしてまた次の星に向けて歩きだす。 ひとりはその背に人々を乗せ、ひとりはその周りを見守るように回りながら。

にふたつの星を見つけました。 やがて、長い長い旅の果て、 ついに蒔くべき種もなくなったとき、ふたりは行く手

大きな星の周りに、 小さな星が回っていて、まるでそれはふたりのようでした。

そして、その星に近づいていくにつれて――ふたりは不思議な感触を覚えました。 なぜだかふたりは、その星をずっと昔から知っていたような気がしたのです。 己の体を種にして、この星に蒔こうと、ふたりは決めました。

しまいました。 でも、目の前の星があまりに肥沃だったから、ふたりはそんなことはすぐに忘れて

らなくなってしまっていたのです。 遠い遠い旅路のうちに、ふたりは自分たちがはじめにどんなものだったのか、わか

ひとりがひとりのまわりを巡り続ける、彼らの旅路と同じように、ふたりは星にの ふたりはごく当たり前のように、それぞれふたつの星に降りていきました。 まるでダンスを踊るようにくるくると廻っているのです。

やがてふたりは、喜びのうちに星に最後の種を蒔き始めました。 黒いビロードと赤いリボン、それに銀色の髪をアウロラになびかせて。 あるいは、もしかしたら。

そう。 これはきっと、はるかずっと遠い未来の、

一人の命の旅が終わったこの場所から、すべての物語は始まったのかも知れません。

そしてはるかずっと遠い昔の物語なのでした。

(神戸小鳥の旅路

完

恐らくはかなりおひさしぶりです、鶏卵工房の瀧川新惟です。「神戸小鳥の旅路/

書かせていただいたり、あるいはもうすこし小規模な本を出したりと、色々書いては うわー。 なります。そういや文庫サイズは久しぶりだなーと思って振り返ってみると「棗恭介 You are the earth, I am your moon.」、楽しんで頂けましたでしょうか。 いたのですが――やっぱり文庫本はいいですね。実によく馴染みます。 の帰還」ですから、なんと四年ぶりになります。大学生が入学して卒業する期間だ。 とまらず、「~旅路」前半のみ所収のプレビュー版を出しまして、今回はその最終版と ほんとうは本誌、二〇一六年末の冬コミに出したかったのですが、なかなか話がま 実は職場が変わる等ちょっと大変な感じでして、その間は、同人アンソロに

当調整して頂きました。 描いて頂きました。表紙は特にワガママを申しまして、瀧川のイメージに合わせて相 ろさんに感謝を! と思います。改めてありがとうございます! さて、今回のお話――の前に、表紙と挿絵を描いて頂いた、ちはや式ドリルのまし たくさんの挿絵と、今回のお話の象徴である表紙、素敵なものを ましろさんの絵がなければ、本誌は成立しなかったと言える

多くを語る必要はないように思われます。 そんなわけで、改めて今回のお話なのですが、「神戸小鳥の旅路」については、 ただ、Rewrite の最初のイメージイラスト、

それでは、

ことが出来ております。本当に、ありがとうございます。 誌を読んで下さった皆様、そして関わって下さる全ての人のおかげで、この本を出す みして頂いた月屋さん、ゆきゆきさん、しまさん。同人仲間のみんな、友人たち、本 か塩漬けになっていたものを引っ張り出してきたものです。元はと言えば、この二つ および「委員長と会長の奇妙な友情」。こちらはこの本が初出なのですが、実は何年間 川なりの答えであり、あれがほとんど全てであると言っても過言ではないのです。 それだけであります。 ありません。 にした最初の経緯であります。面白いなーと思っていただければ、これに勝るものは ヒロインはこの子――神戸小鳥そのひと――だろうと、今でもそう思っている。ただ のお話を出すタイミングは、もう今しかないだろ……というのが、この本を出すこと それとは別に、サイドストーリーである「スタリィ・ムーニィ・ナイト・フライト」 最後に謝辞を。まず、改めてイラストを描いて頂いたましろさん。それから、下読 書き換えることが出来るだろうか。彼女の、その運命を。』。 また――そうですね、次は planetarian で何かやりたいなあ! なので、今回の表紙こそが、あのイメージイラストに対する瀧 あれを見て、メイン

二〇一七年五月 瀧川 新惟



鶏卵文庫

神戸小鳥の旅路

You are the earth, I am you moon.

2017年5月14日 初版第一刷発行

■著者 瀧川新惟

■原作 Key/Visual Art's

■製作 サークル鶏卵工房

発行人:瀧川新惟

a. takigawa@lostwinter.info

発行元:サークル鶏卵工房

http://lostwinter.info/

印刷所:株式会社ポプルス

http://www.inv.co.jp/~popls/

※本誌は、Key/Visual Art's 『Rewrite』 及び派生作品の二次創作です。